

福井久藏著

新修
高等國文典

東京育英書院發行

凡 例

一、この書は著者が駒澤大學に於て講義をした草稿に基づき、考證めいた部分を除き、高等教育を受けてゐる若い學徒や、文檢を志してゐる人々、並にこの教育に従事されてゐる各位に一讀して戴きたいと思つて筆を執つたものである。

二、著者は學習院在職時代に日本文法史を出した。今より數へて見ると二十餘年の昔のこと、若い學徒は未だ孤々の聲も舉げられない時の事に屬する。自分もその頃はまだ若かつた。當時我國の碩學はチャンブレンといふ外國教師から日本文典を學ばれた話を聞いて大に慨嘆し不束なものを公にしたのであつた。その後には日本の學問でまだ開拓されてゐないものを少しでも手を著けて置きたいと志し、文學の方面に眼を轉じてゐた。この間に文典の研究は幾多の人士によつて異常な進歩を來した。近年駒澤大學の昇格につれて、旨と東洋學科の教授に係することゝなり、文學の講義と共に文法論の一講座をも受持つことゝなり、若い學生からは水陸兩棲類のやうに思はれてゐることと思ふ。現にある語學史の著者から語學家か文學者かとの手紙を貰つたことがある。いづれにも自分は當ら

ないが、御解釋は御隨意にと御答へをしたことがあつた。従つてこの道にも疎いものであるが、自分の文法に對する私見は文法史を著した前後に文學博士上田萬年先生を煩し、御校閲を願つたり御一所に出したりした新日本文典や大正新日本文典當時の考は今も棄てる氣持にはなれない。自國語の文法を教へるには、音韻や品詞から入らないで、始めから文章篇を授け、品詞は文章に依屬させて説くといふ方針を固く執つてゐる。さうして後に品詞を更に見直すのが善いと思ふ。學徒の頭を散漫にさせない點から實驗上效果が多いと信じてゐる。文部當局の方も斯道の教育に與つていらつしやる方々にも御勘考を煩したいと思つてゐる。それとも愚見が誤つてゐるなら御叱正を吝まれないことを御願する。

一、この書は篇を三つに分ち、第一篇には文章法を、第二篇には韻文の文法を、第三篇に品詞論を説き、附録として假名遣法、送假名法、句讀法を説いた。我が上代文法は記紀萬葉を中心とすべきもので、和歌の文法が大に活いてゐる。然し時世の經過するに従ひ、散文と韻文とは分離した。さうなつて來た後から振り返つて見ると、韻文には約束された語數や音調の關係から特殊の語法が發達したのである。後世のものでいへば連歌や俳諧に切字の制が出來たり、川柳に中止法が缺かれない

やうになつたやうに、韻文の根元をなしてゐる和歌に古より特殊の措辭があつたり排列があつたりする。本書には韻文の文法的一篇を設け、これを和歌と俳句に分けて、各々その特殊の語法を説いた。近時出版になつてゐる和歌や俳句の文法は例を韻文ばかりから取つて一般的のものを取扱つてあるが、本書には散文と共通なものは説かないで、韻文に特殊な法格と思ふものを舉げて文法的解釋を下して見た。

一、本書の文章篇には人に呼びかけるものと事を記し置くものとの二種を基とし、これを記述文と陳述文とに分ち、陳述文に尋問・希求・命令・禁止の別を立て、この類には主語がなくて文となることを述べ、これに敬稱を附隨させて説き、記述文には感嘆・疑問・推度・肯定・否定を分ち、これに時制を併せ説いた。文の構成上から自家の考説を試みたところも少くない。

一、現時世に公にされてゐる著名の文典を見るに新しい術語が頻りに出て來て、著者の意見を知るまでに、まづ用語を記得するに多大の勞作を要するものが少くない。特に分類の細かいものほど一層それが多くなつてゐる。この狀勢に鑑み、止むを得ざるものは別とし、共に扱はれ得るものは互に譲りあつて統制を保つや

うにすることが大切である。著者は夙い時代からさういふ機關の成立を望んでゐる。随つて本著にはなるべく新創の語を避けることを注意したが、それでも筆を執つて見ると、自警を自ら破つた點がないでもない。文の成分中の補語又補足語の名を改めて對象語といつた。總主に對しその中の小い主語を分主といふ稱を附した。動詞の働き掛と受身とを能相所相と呼び、その中間に當る自動を中間相と名づけた。動詞の語尾變化の名稱中、將然また未然形といふを假定條件形と改め、已然形を確定條件形と名づけた。此の如き多少の更改を試みたことを斷つて置く。

一、本書は文語を中心とし口語との連繫を保つことを終始念とした。但し活用表の如きは必ずしも一纏めにはしなかつた。それは對照上に表としては困難なものがある。例へば條件を示すものに文語では假定と確定とが判然分れてゐるが、口語では文語の確定條件の形で兩方をあらはす。それから又別に終止形ならを加へて假定の條件を示すといつたやうにくひちがひを生じてゐるからである。尙表を多く添へなかつたのは高等程度の學徒に各自に表を調製させる目的で省略したのもある。また例文も文章篇に於ては現代に分り易い程度のもを擧げ、

解釋を要する古文や和歌を避けた。これも學生の練習として甲生は何書より乙生は別の何書より好例を摘出させる方針で、他の文典に於ける如く無數の例を擧げることを行なかつた。但し古典から近世文學に至る讀書より二十題の練習問題を書き、讀者がみづからこれが解答を作るやうにして置いた。而して從來のやうに短い文にしないで連續體のものを以てした。

一、品詞論中、語原を説くのは文法の範圍でないから成るべく論じないことゝした。併し各の如き己のおのと共通の語根をもつてゐて、その用法から見ても代名詞にすべきものであるから、その語原を説いた類もある。

一、助詞の分類に關しては文章の上から考へ、格を示すもの、法を示すもの、意を強める爲にするもの、限局するものゝ如き分け方を取り、法を示すものの中、接續と斷止に分け強意の中、述語を拘束するものとし、ないものに分けたが、一つから他に轉じたものは別々の條に説くことにして置いた。一つの助詞で色々に用ゐられる場合を一つに集めて説くのは詞の變轉を見る便はあるが、文章を主として説明する爲に別々に扱ひ、且混雜を防いだ。

一、假名遣には標音的のものと史的のものととの關係を述べ、史的の中には定家假名

遣と契沖の尙古的假名遣との關係を略説した。定家假名遣は維新前までは公家並にその法を奉じてゐた向々には行はれてゐたことを若い學徒には心得させて置く必要がある。然うでないと高貴の尊擧に對し假名遣の相違を認めて直ちに誤謬とするに至る虞があるからである。

一、句讀法の如きは人により書によりて相違があつて一定してゐないから、文法上よりのものと諷詠上のものとを區別し、文法上よりはこゝまでは定めて善からうと思ふ限度を示し、他は自由採量に任せることを立前として説いた。

一、文法は規則づくめで興味がなかつたとの評は昔から一般の學徒の口々にいるところであるから、自分はいつか暇があつたらうだけだ肩の凝らない文法物語でも書いて見たいと考へてゐるが、生來の病弱と近時の多冗とはその試みを實現させない。老來特に精氣衰へてその見込はない。偶々最近日本文法史再版の談から、音聲學會幹事の某々君から切に勧められて、急にこの方に筆を染め植字子を煩すことになつた。勿々に書き改めたもので、執筆者にも意に滿たないところが多々あることを謝する。文中にかうしたら善からうとか、さう見ても差支のないといふやうな書き振りは文典としてはいかゞと難じられる向もあらう。併し文典の體

系はまだ一定不動のものではない。それに若い人々の侶伴として特に平たく書いた積りである。

終に臨み先輩の説き置かれた説に對し十二分の敬意を捧げたいと思ふ。

昭和七年五月

小松園にて著者筆を執る

目次

序説	一
----	---

單語の種類	六
-------	---

漢字と假名	七
-------	---

第一編 文章論	一〇
---------	----

第一章 文の成分	一〇
----------	----

第二章 陳述體の文	一三
-----------	----

一 尋問	一四
------	----

二 希求・命令	一五
---------	----

三 禁止	一七
------	----

第三章 敬語	一九
--------	----

一 敬稱	一九
------	----

二 謙稱	二三
------	----

第四章 記述體の文	二四
-----------	----

一	驚嘆	三五
二	疑問	二六
三	推度	二六
四	肯定と否定	二九
第五章	時制	三二
第六章	動作の種々相	三六
第七章	修飾語	四〇
一	装體語	四四
二	装用語	四九
第八章	文の諸成分とその排列	五二
第九章	總主語と提示語	五四
第十章	單文と複文	五七
第十一章	文の斷續（終止形・中止形・接續詞）	六三
第十二章	合文の成立と接續法	七〇
第十三章	文章成文の關係及轉換	七六

第十四章	假主語	八三
第十五章	引用文	八六
第十六章	首尾の照應	九一
第十七章	係結法	九四
第十八章	文章成文の省略	九九
第二編 韻文の文法		
第一章	和歌の文法	一〇四
第二章	俳句の文法	一三三
第三編 品詞論		
第一章	名詞	一四三
第二章	代名詞(數詞)	一四九
第三章	動詞	一五三
動詞活用 of 古今		
	動詞の假名遣	一六四
第四章	形容詞	一六六

第五章 助動詞	一七〇
---------	-----

活用連語	一八二
------	-----

第六章 助詞	一八四
--------	-----

第一 格に關するもの	一八五
------------	-----

第二 法に關するもの	一九〇
------------	-----

(甲) 條件を示し接續をなすもの	一九〇
------------------	-----

(乙) 判定をなし斷止をなすもの	一九四
------------------	-----

第三 表現の強さに關するもの	二〇三
----------------	-----

(甲) 係辭となり述語を拘束するもの	二〇三
--------------------	-----

(乙) 強調しながら述語を拘束しないもの	二〇五
----------------------	-----

第四 限局を旨とするもの	二〇六
--------------	-----

第七章 副詞	二〇九
--------	-----

第八章 接續詞	二一五
---------	-----

第九章 感嘆詞	二二〇
---------	-----

第十章 單語の轉成	二三三
-----------	-----

附 結

語 錄

名 詞	二二三
動 詞	二二三
形 容 詞	二二六
副 詞	二二七
接 續 詞	二二八
助 動 詞 及 び 助 詞	二二九
一 假 名 遣	二二三
三 送 假 名 法	二四一
三 句 讀 法	二四七
四 練 習 問 題	二五六

新修 高等國文典

福井久藏 著

序 說

吾人が日夕同胞と互に談話をかはし、或は公衆に對つて意見を發表し、或は書きもし読みもする國語國文の方則を考究するを日本文法の範疇とする。

言語は人類の特有するもので、人の口から出て耳に訴へるものと、人の手に成つて目に訴へるものとを總べて指す。併し普通には耳に訴へるものをことばといひ、目に訴へるものを文字といふ。ことばは流れるやうに口から進み出て來てもそのまゝまでは後に留まることが難く、その缺を容易く補ふのは文字である。併し文字は巧に連ねても、音の高低抑揚緩急等の調子がことばのやうに出にくい。喩へて云へば、ことばは生きた人の姿の如く、文字はその寫眞のやうなものである。兩者相助け合つて人の思想を遠いところにも永い後の世にも傳達するのである。

ことばは

皆様御機嫌宜しう御座いますか。(一)

ありがたう。

(二)

に於ける如く、單一なものと複雑なものがある。思想をあらはすには一つのことばで済む場合もあるが(三)普通には多くのことばを連ねて用ゐるのが常である。(一)文法學上ではことばを連續の體と單獨の姿とに分けて考究する必要がある。それは一つ一つの上にもそれぞれ職能があり、連續の上にも種々のきまつた規定があるからである。

そもそもことばの單獨の姿と云ふは如何なるものかと考へるに、櫻とか大和心とかいふ概念を示すものや、美しいとかあらはすとかいふ屬性を示すものや、その關係を示すものなどの差別があるが、概言すれば、ことばとして成立してゐる最も小さい形であつて、通常これを單語と呼んでゐる。

この單語といふ稱も仔細に考へるとむづかしくなる。例へば火といひても一つの概念をあらはすが、これにかゝり又ともしなどの語が加りて篝火・ともし火といふときは別の意義が加つてゐても、これを分けてしまふときは篝火・灯といふ一つの概

念をあらはさぬことになる。随つてこれらも單語とすべきである。更にもう少し重なつた例をいへば、東京帝國大學の如きは、三つのことばが集まつてゐても、一つの概念を示す點から考へると、同じく單語と見做すべきである。更に極端の例を挙げると、夏目漱石の著作の「我輩は猫である」の如きは解剖して見ると文をなしてゐるが、一つの書名を示してゐる點から考へると、單語と扱はねばならぬ理窟にもなる。斯く使用の場合や内容の如何を考慮に置かねばならぬ。單語の研究を旨とするを世の文法家は品詞論と名づけてゐる。

人は他と應答の場合又は感動の瞬間に於ける思想は單語ばかりでもあらはされるが、通常は幾つかの單語を連ねて種々の思想を表すものである。これを文又は文章と呼んでゐる。文といへばある概念につきその屬性を説き、若しくは他との關係を述べたものでなくてはならぬ。文には表現の形式や構造の如何によりて種々の種類があり、それぞれ遵守すべき規定がある。これを明めるを文法學者は文章論と呼んでゐる。

文は口頭で述べるものでも文字に書きとめたものでも同様であつて、見ると聞くとに由つて差別を立つべきではない。然しことばは時代によりて變化することが

甚だしい。随つて文法は古今同一律に扱ふ譯にゆかぬ。變化の著しい點を考へ、時代を分けて考究する要がある。例へば今日の語で「あるのか無いのか」といふことを平安朝時代に於ては「ありや無しや」と云ひ、「行くな」といふことを奈良朝時代には「な行きそ」といひ、「來るな」といふことを平安朝には「なこそ」といひ、「見たい」といふことを室町時代には「一見せばやと存じ候ふ」と云つた。斯ういふ風に時代によつて差異があるから、上代文法、中古文法、近世文法、現代文法と分けて考へる必要がある。現代は口語體と古文體と並び行はれてゐるが、兩者の間には可なり大きな隔りがある。そこで口語法と文語法とを各別に説く人も少くない。或はこれを交へて現代文法として説くものがある。

文法の種類は少くない。國語の形體を旨と説く理論的のものもあれば、實用を主とする應用的のものもある。現代文法に對し、上代文法、中古文法、近世文法を總稱して時代文法といふべく、一時代に限らないで上代より現代まで縦にその變遷の跡を説くものを歴史的文法といふ。また同胞間に使用する語に限らないで、同系統の姉妹語を對比して説く文法もある。これを比較文法と呼んでゐる。比較文法は語學者の専攻するもので、一般の學徒には比較文法は勿論歴史的文法でも學習すること

が容易でない。

近來國文法の學習に重きを置かないものが少くない。その理由とするところは世の文士は必ずしも文法を修めたものではないとか、文法を學んでも何の利益もないとか、文法の學習は一向に面白くないとかいふ。これらはいづれも誤まつた説である。文法學者があまりに煩瑣な名目を設け學徒の理解を助ける方法に力を注がないことも一因をなしてゐる。日本語を學んだ外國人が「あなたよく宜しい」などといふ如きたど／＼しい口調でも、對話の上では意味の通じないこともないが、我等の國語と相距ることが遠いものである。國語は國體と共に我が國民を一つにさせる。千萬里を距てた海の彼方から放送する國語を聞いた時、どんなに深甚の感が吾人の胸をうつではないか、國語によりて暖い血が通ふことが特に分ると思ふ。我等は立派な國語をもつことを各自に意識せねばならない。國語の方則に通じ、我等のもつ思想を文化を口に筆に正しくうるはしく表現するだけの用意がなくてはならぬ。輓近國語の方則を無視した蕪雜な文の横行してゐる今日は文法の學習が一層大切ではあるまいか。禮讓の具はるべき書翰の上に廣く公衆に示す告示文などの上に誤謬の澤山に交つてゐるのを見ると、この教育の上に大に力を添へねばならぬこ

とを思ふのである。

單語の種類

單語にはいろいろの種類がある。まづ普通には

一、事物の名を示す名詞

二、事物の名を用ゐないで、それを指し示す代名詞

三、動作狀態存在をあらはす動詞

四、時間に關係のない屬性を示す形容詞

五、説述の語を裝定する副詞

六、語や文をつなぐ接續詞

七、他の語に依存的に使用されて重要な役目を演ずる助動詞及助詞

八、單獨に使用される驚嘆應答を示す感嘆詞

に分ける。この他數量順序を示す數詞を立てる人も少くない。或はこれを名詞の中に攝する人もある。さうしてその一つ一つを更に細かに分類するが、語によりてはその所屬に關し學者の間にも議論の未だ決してゐないものもある。

以上の如く主として語の職能の上から分類するのではなく、語の體形等から分け

て、獨立して意義を有する詞の中、語尾の變化しないものを體言といひ、變化するものを用言と名づけ、依存的に用ゐられるものを辭テマといひ、その中、語尾の變化するものを動助辭(助動詞に同じ)といひ、變化しないものを靜助辭(助詞に同じ)と呼ぶ分類も古くから行はれてゐる。また以上二様の分類を並用することも久しいものである。

漢字と假名

我等が常に用ゐる文字には假名と漢字とがある。漢字は少數のものを除く外、支那より傳來したもので、その總數は幾萬にも上るが普通に用ゐるは三千字内外である。大體からいへば形・象・文・字と云はれてゐる。日や月や山や川や馬や鳥や魚や目や口などの如く、一々その形をたどることの出来る繪畫に近いものもあれば、それより進んで字の扁や旁の一方に形を示し、他方に音を示して區別した鳩、鴉、鶴、猫、狗の如き形聲文字もある。十の口あればふるきことを傳へるといふ古の字、人の言である信の字の如き會意文字もある。上下左右の如き記號で區別した指事の文字もある。字數が多いばかりでなく、一字でも畫の非常に多いものがあるので、辺、芦、迂等の如き省字も行はれてゐる。また我が國で作られた榊、櫛、𪔐、𪔑、𪔒等の如き漢字もある。書體にも楷行草等の別があり、極めて複雑であるが、疎にしてはならぬ。

假名は我が邦で案出されたもので、これに平假名と片假名との二種がある。共に標・音・文・字であつて、その數は七十有餘あり、それを結合して數千萬語もあらはす。この外古くは變體假名(萬葉假名とも)と呼ばれ、漢字の意義にかゝはらないで、その形と音とを假りて崩した類もある。古板本中にはこの類を混用し、歌人や書家の一部には今もこれを用ゐるものがある。その普通の字體は次のやうである。

心 后 波 尔 不 屈 其 去 里 思 留 线
日 咲 之 堂 進 楚 海 祢 祢 祢 祢
字 乃 於 其 屈 乃 希 奴 奴 冬 天
阿 之 哉 遊 欠 冬 表 魚 虫 无 勢 以

平假名は漢字の草體より來つたもので、變體假名の一層便利な姿になつたもの。片假名は漢字の扁旁冠等を取りて作られたもので、中には漢字の全形をとつたものも一二はある。左にその原字となるべきものを擧げる。

伊 呂 八 仁 保 邊 止 千 利 奴 流 乎

和加與多禮會門禰奈良牟
宇井乃於久也萬ヶ不己江天
阿左幾由メ三之慧比毛世須

〔備考〕一、ワは和の旁から取つたものではなく、古〇を書くに二筆で〇と書いたのから來たといふ説がある。その説に據るのが宜しい。

二、ツは門からでなくて川の古音ツエンから來たといふ説がある。

第一篇 文 章 論

第一章 文の成分

文は種々の體があつて一様でないが、普通のものは思想の題目となるべき部分とそれにつき説述する部分とから成る。例へば「朝日かゞやく」といふ極めて短き文に於てもこの二部分から成つてゐる。この題目となる部を主語といひ、説明となる部を述語といふ。主語述語は文の重要な成分である。

主語は名詞代名詞及準名詞等から成り、現代語では必ずがといふ助詞を伴ふ。文語には助詞を缺くものも多く、また「春雨の降る」鶯の鳴くに於けるが如く、のといふ助詞を伴ふ。その他「これはよし」それも悪しからずに於けるが如く、はまたはものの助詞を伴ふことも少くない。準名詞といふは「言ふは易く行ふはかたし」に於ける「言ふ」「行ふ」の如きを指す。この類には現代語ではのの助詞を加へて「言ふのは」「行ふのが」の如く用ゐるが、文語にはのを加へることはない。

助詞は依存的の形式語であるが、微妙な意義を生じさせるもので、一つののといふ

助詞でも種々の用をなす。主格を示すのはがと同じく指す意をもつてゐる。は他に對し區別する意、もは同じ類を並べる意をもつてゐる。尙もはの別の意義を有するものは後に説明する。

述語の簡單なものは一つの動詞又は形容詞から成り、や、複雑なものはそれになよや等の助詞を伴へるもの、また他の動詞助動詞の連結した活用連語より成り、尙複雑なものはそれに對象となる語をとるものもある。例へば起きよ行くか、急ぐな、怖しやの如きは動詞や形容詞に助詞の加はつたもので、命令や疑問や禁止や感動の意を示してゐる。「知らぬ」知らぬなり「知らぬなるべし」言はれず「言はしめず」の如きは活用連語から成つた例である。この活用連語は最終の助動詞によつて意義が決定する。例へば言はしめずは言はしめまでにて人を發言するやうに仕向ける意であるに、下のずといふ助動詞の添加によりそれを否定する意となるのである。この活用連語の下に言はしめずやの如く更に助詞を加へると尋ねる意となる。

述語は動詞や形容詞ばかりでは説述を完成することの出来ない場合が少くない。例へば人は修むだけでは文を成さない、これに身をといふ目當てになる語を要する。「徳は等し」だけでは文を成さない。これに聖人にといふ語を加へると意義が完くな

る。「食物がなる」だけでは意をなさないが、これに「食物が血液となる」の如く目當の語を加へると文をなす。「猿が落ちる」だけではまだ不明瞭なところがある。これに「木から」といふ關係を示す語を加へると完全の文となる。「私は着いた」だけではまだ完い文ではない。「東京に」等の語を加へなくてはならぬ。「汽船は向ふ」だけでは文をなさない。これには「上海へ」とか「濠洲へ」などの關係を示す語が必要である。「車は送れ」だけでは意義をなさないが、これに「驛まで」といふ關係語を加へて文となる。以上の如きを便宜上すべて對象語と命じて置く。述語は對象語と相俟つて文を完成する。さういふ類を述部と名づける。

對象語は述語と共に述部を形づくるもので、文の重要成分の一である。從來補語又は補足語などと稱へたのは主要成分でないやうな語感があつてふさはしい名でない。今改めてこの稱を用ゐる。或はこれを述語の對象となるもの、述語の關係を示すものとの二つに分けるのが精しいかも知れぬが、形體上のかはりがないから一つに攝する。對象語は名詞代名詞及準名詞に助詞をにとへよりからまでの類を具するを常とし、述語の性質によりては同時に二つの對象語を使用せねばならぬことあり。その排列にも一定の順序の存するのである。「東京より倫敦へ」また「上から下

まで」の如く如何なる場合にも轉換の出来ないものと「手紙を國元へ出す」また「國元へ手紙を出す」の如く、場合により變換して差支のないものがある。

第二章 陳述體の文

文には相手に對し直接呼びかけるさまに述べるものと、相手に關係なく書きとめて置くさまに述べるものと、の別がある。前者を陳述體の文と名づけ、後者を記述體の文といふ。例へば

松平君夕方立ちよられよ。(一)

余は松平氏に夕方來訪あるべきことを勧む。(二)

(一)は陳述體の文にして(二)は記述體の文である。陳述體の文にはいつでも彼我の對立があつて、自ら動くか他を動かすか、いづれにしても先方に對しては相應の敬稱を用ゐ、自己の事には謙稱を用ゐるのが普通である。記述體の文には彼我の對立關係といふことを考へないで、事實の眞を如實に書き留めるのが主で、一般に對しては特に敬語を要としない。また陳述體の文には面前に人と我とがあるが故に、特別の表示を要する場合の外、我とか君とかいふ主語を用ゐないのを常とし、特に連續體の

ものにあつては應諾の一語で文をなす場合も少くない。例へば

散歩に御出掛でありますか。(三)

はい。(四)

に於けるが如し。從來斯の如き陳述體の文は主語の省略と説き來たつたのであるが、國語に於ては特別にこれを示す必要以外の場合には、これを置かないのを本體とする方が、すべてを簡易化する國語の眞實性に近いものと謂ふべきである。

凡そ人に呼びかけるには事項の性質により尋問・希求・命令・禁止の形式がある。

一、尋問

物を尋ねるには述語の末にかといふ助詞を加へてあらはす。文語に於てはかと共にやといふ助詞を以てもこれをあらはす。例へば

それはどういふ譯でありますか。

夢かうつゝか寢てか覺めてか。

かゝること有りや無しや。又 あるかなきか。

に於けるがごとし。かとやとの間には多少の區別があつて、かの方はやよりもおしつめた強い感じがあるやうである。連接の上に於てやは用言の言ひ切る形即ち終

止形の下に、かは體言か、若しくは用言にして體言を續ける連體形の下に接する差がある。近來はそこにゐるのは誰れの如く助詞かを加へないで尋問を示すものも用ゐられる。新聞雜誌には外國文に倣つて疑問符を加へ注意を喚起するものさへある。

口語に於ては特に重きを置く詞を張り揚げ語勢を強めることがある。例へば
君明日午後上野圖書館に行くか。

のごとき文に於て、もし君を揚げるときは多くの中よりその一人を指すことゝなり、明日午後を揚げるときは主として時日を尋ねることゝなり、上野圖書館を揚げるときは場所を尋ねることゝなり、行くかを揚げるときは行くか否やを尋ねることゝなる。現今の普通文にてはその書き分けがむづかしいが、古文に於ては末に附すべき助詞かを切り放し、強調しようと思ふ語の下にや又にやの助詞を加へてそれぞれ書きわけたものである。「君や行く」とか「あすや渡らむ」いつこにやおはさむ等に徴してそれらの區別が見られる。但し外國語に於ける如く、人に尋ねる文だと云つて主語述語の排列を轉換することはないのである。

二、希求命令

人に何事をか要求する場合には尊長と等輩と部下とによりて表現の形式が異なる。尊長に對しては希求といひ、一般には命令といふのが、妥當であらう。口語に於ける希求は對手の動作を我が爲に行ふやうに丁寧な表現を用ゐる。例へば

御賛助を願ひます。

御一覽下さい。

御認めを戴きたい。

に於けるがやうに。動詞となるべき語にご又はおんといふ敬意をしめす接頭辭を加へ名詞狀になし、それに願ふとか下さる等の動詞を加へるか、或はたいといふ希望の助動詞を動詞に連ねてこれをあらはす。このたいは文語にはたしといふ。一般に用ゐる命令は關西地方に於てはお行きい、お起きい、お見いの如く動詞の語尾を引延ばしいの音を添へたやうに發音し、關東地方に於ては見ろ、起きろの如くろといふ音を添へることが多い。文語には動詞だけであらはすものと、それに助詞よを加へるものとの別がある。行く・話す・待つ・云ふ・讀む・知る等の如く五十音のアイウエの四段に變化する動詞はエ列の音で命令をあらはし、その他の動詞は二三の例外を除き一般にイ列又エ列の音に助詞よを加へてこれをあらはす。例へば

(一) 早く行け。靜に話せ。しばし待て。委しく言へ。味ひて讀め。明に知れ。

(二) 起きよ。見よ。

(三) 受けよ。せよ。

に於けるやうに。近世の文には(二)の類にも「めぐれよ」に於ける如く助詞「よ」を加へるものもある。命令を示す文には「行け」男子とか「立てよ新人」の如く呼びかけるものはあらはれないで、呼びかけられるものが置かれる。さうしてそれも述語の下にすゑられることが多い。

古文に於ては直接に人に對して求めるのではなくて、唯獨白の希望を述べるには、對象となる語に「が」又は「がな」「がも」といふ助詞を加へてあらはす。例へば「世の中は常にもがもな」「あはれ知りたる人もがな」等に於けるが如し。

三、禁止

禁止は命令の一體である。ある行爲をとゞめる消極的の命令であるが、特別な表現を要する。例へば

(一) 人の短を云ふな。

(二) 上を見るな。

(三) 不正のものは受けるな。

(四) 病をおして起きるな。

(五) 無益の殺生をするな。

の如く述語となる動詞の言ひきる形の下に助詞なを添へてあらはす。上例の中(二)(三)は文語も口語もかはらないが、(三)の例は相違がある。尙文語の中には近世文と古文とでまた差異がある。即ち

〔口語〕 受けるな 起きるな するな

〔近世語〕 受くるな 起くるな するな

〔中古語〕 受く_レな 起く_レな す_レな

の如く近世語は中古語の終止の下に_レといふ一字が加つた形に變り、現代語は更にそれから變つて來てゐる。古代語に於ては_レな受け_レそ_レな起き_レそ_レなし_レの如き特別の形式がある。近世の漢文口調の文には_レ受くる勿れ_レする勿れ_レの如くなかれといふ語を加へるものがある。これは無くあれの約つたものでなとは少しの相違がある。

また現代に於ける公用文などには_レ當日禮服を着用すべし_レ所得税は何日限り納むべし_レの如く助動詞べしを以て命令の意にあてゝゐる。

第三章 敬語

敬語法には敬稱と謙稱との二つがある。敬稱また崇敬態といふは相手の身分に關するもの、謙稱は自己に屬するもので、古來禮讓を重んずる國として兩稱ともに非常な發達を遂げてゐる。

一、敬稱

あなたは御出ましになりますか。

御所藏の御本は大層よく保存が届いてゐます。

に於けるがごとく、敬稱は呼びかける先方の身分からその動作並にその身に屬するものまでも敬稱を用ゐる習はしである。相手の身上につきてはあなた君などの代名詞が用ゐられる。尊稱の代名詞はその數が頗る多く、皇室のことは直接に呼びかけることはないのであるが、天皇皇后皇太后にはいつでも陛下の稱を用ゐ、皇族方には殿下の稱を、高位高官の人には閣下を、一山の管長には猊下の稱を用ゐ、華族などの家庭には主人を指して御前ごぜんと普通に呼んでゐる。書翰文には貴君貴殿尊君等の類語が甚だ多く、女子の消息文にはおん前様などが最も多く用ゐられてゐる。時代

的に溯ると室町時代には和御寮などの語があり、源平時代には和君和殿などの語が見え、平安朝時代にはなんぢさんぢ等の語が見え、奈良朝時代にはいまし、みまし等の語があつた。

次にその身に屬するものにはお・ご・おん・み等の接頭辭を加へる。口語にはお・及・ごを用ゐ、文語にご・おん・み等を用ゐる。お手紙、御機嫌伺、おん曹司、み笠に於けるがやうに。次に動作に於ける敬相は

元朝に古事記の首章を讀まれた。

節操の大切なことを諄々と述べられた。

に於けるごとく、れまたはられといふ助動詞を動詞に添へることは今も昔も同様であるが、その外極めて丁寧にあらはすには「御覽遊ばせ」の如くいはゆる遊ばせ詞を用ゐる。この遊ばせ詞は上流社會の家庭に於ては今も相當盛んに行はれてゐる。この類は見るを御覽すといふ如く敬語動詞に敬を示す助動詞を連ねてあらはす。今これらの動詞及活用連語を擧げる。

見る　みそなはす

する　あそばす

聞く	きこしめす	有る	おはします
云ふ	のたまふ	思ふ	おぼす
知る	しろしめす	食ふ	きこす
與ふ	たまふ	飲む	をす
治む	しろしめす	着る	たてまつる

尙漢語の敬語にて特別に用ゐられてゐるものには

出御 還御 入御 駐輦 裁可 崩御
 行幸 行啓 還啓 台覽 薨去
 等がある。

敬 稱 助 動 詞	
單 純 形	る ○レル らる ○ラレル たまふ ます
複 合 形	させらる ○サレル せらる ○サレル しめらる させたまふ せたたまふ しめたまふ

近世に至り、動詞に御・おの如き附加辭を語頭に加へて名詞となし、これになるといふ動詞を加へて敬稱に用ゐることが行はれてゐる。上は御出御ゴシユツギョになる、御還御ゴクワンギョになるの如き至尊に對し奉りて用ゐるものより、民間に於ても御出ゴイデになる、御還ゴカヘリになるの如き表現を使用するやうになつた。敬稱はもと相對的關係から發生したものであるが、後には記録の場合にも尊貴の方には特に用ゐることゝなつた。但し相對の場合より多少簡省なるべきことは言ふまでもない。

二、謙稱

尊族長者に對し事を述べるに、みづからの上にも卑下し丁寧な表現を用ゐることは、禮服を着けて賓客に對するのと同じく、やがて對者を尊敬する義となる。これを謙稱けんしやうまた恭謙態きんけんたいといふ。「私は知らぬ」といふより「私は存じあげませぬ」といへば一層鄭重な義となる。書牘文に「愚書を呈し候」とか「拙者も後刻卑見を陳じ申すべく候」と自家のことを述べる代名詞を始め自己の動作に屬すること並に關係のある事柄の上にも恭謙の表現を用ゐるは古くよりの習慣であつて、書牘文に「御座候」とか「存じ候」とか「申上げ候」などと用ゐないものは殆どない有様で、女子の消息文に「參らせ候」とあるも同一のものである。

謙稱の代名詞は口語には私及その轉成のわたし、わたい、わうち、わし等より己の轉成であるおれ、拙者、僕、手前、自分、我が身、我等、私ども、吾が輩等その數が甚だ多い。男女年齢、身分、職業等に由つて細かに分化してゐる。これを時代を追うて上代に溯つて見ても種類が少くない。江戸時代に女は妾めかけと云ひ馴れてゐた。室町時代には上流の婦人はみづからと云つた。平安朝時代には男の人はわれの外ほかまろ（歴）といふ語を使ふものが少くなかつた。奈良朝にはあとかわとかいつた。

自分に屬する事でも對人關係から「御返事差上ぐべく」といふが如き矢張恭敬の意を表現したものである。謙稱は述語の上にも用ゐられる。これが爲に謙稱の動詞や助動詞が出来てゐる。

謙稱の動詞

云ふ	聞く	爲る	同	思ふ
申す *きこゆ	承る	致す	仕る	存す
受く	贈る	呈す	謁す	居る
賜る	參らす	捧ぐ	まみゆ	侍ふ

*は古語

口語に思ふといふを思ひますと丁寧にいふは同じく謙稱であつて、このまゝは對人關係上使用したもので謙稱の助動詞である。室町時代にはこれを「まゝ」と云つた。參らすといふ語の轉である。平安朝時代に貴人に對し自分は云々思ふといふことを衣きせて「思ひ給うる」と云つてあるのと語源が違つてゐても同じ關係である。それゆゑ謙稱には自ら卑下するものと品位をもたせるのと二つあるのである。

第四章 記述體の文

記述體の文とは前にも云つたやうに人に呼びかけるのではなく、唯事實があるがまゝに、若しくはこれに多少の想像推測批判等を加へたもので、その述べ方はある種のものを除くの外は靜的であり、陳述體の文のやうに主語を具備しない場合は極めて少く、且高貴の方に關する外は敬語法を用ゐないで表現するのが普通である。

夏が來た。 青葉が涼しい。

軒端には菖蒲がかをつてゐる。

大きな鯉は青空に躍つてゐる。

の文に於けるごとく、目に耳に入り鼻に肌に感じた通りそのまゝに記しとめたもの

は皆記述體の文である。人は自然なり人事なりに對して未だ十分に理解の出來ないときは驚嘆の眼を開いて見つめてゐることもあらう。またそれに向つて疑念を發し、或は想像を下し推理を進めて物の正邪美醜をも判定するのである。今この類を思考の方向から見て驚嘆存疑・推度・判定の四つの範疇に分けてこの種の文を説く。

一、驚嘆

人が異常な事物に接した時は覺えず嘆聲を發する。この聲はよし短いものであつてもその時の全感である。少くともその全感を象徵したものと謂へよう。さればその聲だけで表現の一形式と考へられないことはない。現に嘆詞は文章に近いものと學者の間にも云はれてゐる。併し記述體の文の卵子でもない。むしろ語と文とのいづれとも判らない形と見るべきであらう。これに多少の語が加つて成つたものは感嘆の文である。例へば

あな恐ろしの姿や。

おゝ見事な虹の色かな。

なさけなの振舞よ。

に於けるやうに。これらの文は主語と述語との區別は立つてゐないで、その主體た

るものは述體であるべきものに修飾され渾然一つの姿體となつてゐて、それに上下または末に感嘆詞や感嘆を示す助詞が加はつて成つてゐる。さうして上に置かれる感嘆詞はあゝなゝはれあらあつばれ等その種類が澤山であつて、その成立に新古の別がある。下にすゑられる感嘆を示すものはやかもかなよ等が用ゐられる。奈良朝時代にかもを使つてゐたものが平安朝に至りかなが發生し、奈良朝時代になと用ゐてゐたのが平安朝の末になつてあらが發生したといふ風に沿革がある。感嘆の形式も後には「彼は一世の人傑なるかな」(イ)とか「うるはしきかな山河の固め」(ロ)の如き主語を示すものも生ずるに至つた。(イ)の如き文はその形式から云つて感嘆文としない人もある。

二、疑念

事物に對し眞諦をつかむことがまだ出來なくて胸中に疑團を生じた時、尋問文と同じやうに助詞やかを用ゐてこれを示す。例へば賴山陽の「雲か山か吳か越か」に於けるがやうに。この疑念文は尋問文と形は同じくて、唯對者に呼びかけるのではなく、低迷の心裡をうつすに過ぎない。

三、推度

事物に對し未だその眞諦をしつかりと握ることが出来なくても、大凡云々のものであらうと想像をゑがき、或は他の事物に徴しそれに相違あるまいと推量したさまに記すを推度文といふ。「需要の多くなるにつれて發明品も益々殖えるであらう」の如き想像から「物價は高くなるに違あるまい」の如き推量を合せて指すのである。元來推度には種々の別がある。まづ文語にては一般に

求めば道はおのづから開けむ。

平和はやがて来るべし。

に於けるが如くむまたべしといふ助動詞を動詞に添へてあらはす。尙事實に即したものは

曙光を認めたるらし。

に於けるがごとく、らしといふ助動詞を加へてあらはす。口語にはらしいといふ。またらしよりも一層事實に近いものをいふに、古くは有るめりの如くめりといふ助動詞を用ゐたが、夙く廢語のやうになつた。これに反し事實が右とも左とも決しかねるときには

その結果はいかになるらむ。

に於けるがごとく、らむといふ助動詞を加へてあらはす。このらむはまたやといふ助詞と呼應して用ゐられることが多い。例へば花や咲くらむに於けるがやうに。口語に咲くやら咲かぬやらといふやらはこのやとらむとが合して末の略されたものである。らむとむとは形も連續の狀も同様であるけれども、むはらむのやうに疑念を含まないで、想定する意がはつきりした方に用ゐる。口語にはう又はようといふ。むからんに轉じ、んからうに變つたものである。文語にはむとんとは並用されてゐる。べしはむより推度の意が一段強い意に用ゐられる。随つて可能適當勸誘義務などを示すにも用ゐられる。關東地方では夙くよりべいとも用ゐ來つた。室町時代にはべしいともいつたが、その形は江戸時代には廢れて仕舞つた。

推度には以上の外事實を否定的におしはつていふものがある。例へば

まさかそれ程にはあるまい。

恐らくはさほどにはあるまい。

かゝる事はよもあらじ。

に於けるがごとし。口語のまいといふを近古にはまじいといひ、古代にはましじと云つた。じは文語ばかりに用ゐ、まじと同義である。否定の推度にはまさかよも所

詮等の副詞を頭におきて照應させるのが常である。

四、肯定と否定

事物に對し正當に理會が出来た時正面からこれを「さうだ」といひ、或はその裏面から「さうでない」と判定を下す。このさうだといふを肯定といひ、さうでないといふ方を否定といふ。例へば、肯定は

今は國民の奮起すべき時である。又(だ)

滿蒙は我邦の生命線なり。

將軍は軍人の典型たり。

將士は零下三十度の極寒の地に戦へるなり。

に於けるが如く、文語にては不完全動詞なり及たりを、口語にてはであるだのだを用ゐてこれをあらはす。の^だは動詞の下に連る時にかぎ^りて用ゐ、その他は名詞又は名詞狀のものに添へる。動詞助動詞の下に添へるなりは指定または肯定の助動詞であつて、不完全動詞なりに區別する。

このなりたりを用ゐないで物の眞をそのまゝにあらはしてゐる文、例へば
東湖が正氣の歌を作る。

その詩には迫力がある。

に於ける如きも肯定に代用される。否定はまた打消ともいふ。例へば

將來のことははつきりと分らない。又分らぬ。

歐米人は東亞の實狀を知らず。

に於けるが如く、文語にてはすといふ助動詞を、口語は關西方言にてはぬを、關東方言にてはないを用ゐてあらはす。古代の文には「家もあらなくに」とか「月日も知らに」中古の文には「人こそ知らぬ」などと用ゐた例があるから、關西方言の方が文語に近いものと云へる。この外否定の状態を示す文語には「見ざる聞かざる言はざる」に於けるが如くざるを用ゐる。このざるは口語にては「ずにゐる」の義に當る。「知らざらん」知らざりければ「知らざれば」などいふざらざりざれもこのざるの變化である。この他文語にはべからずの結合した「べからず」といふ活用連語を用ゐて、一種の否定に代用する。

以上の推度肯定否定の表現は口語にてはますといふ敬稱の助動詞を加へ、自家の見聞並に意見を吐露する態にて陳述體の文に用ゐられる。例へば

あの人は國家の柱石であります。

蝙蝠は鳥ではありませんぬ。

道は近いところにありませう。

遠いところに求めるに及びますまい。

に於けるやうに。尙一段の鄭重を加へるには「あります」の代りに「御座います」を用ゐる。まずは述語の最も末に置かれる場合とさうでない場合との別がある。これは接續上の規定に由るのである。

第五章 時制

記述陳述の如何に拘らず、説述には時制を立てこれに準據してゆかないと、前後の關係が分らなく、事件の明確を期しがたい。特に複雑な事項に於ては一層その必要がある。

陳述體の文中、希求命令禁止はいづれも過去に溯らないのは勿論であつて、その性質から云ふと、未來の事に屬すべきであるが、形の上には全く時はあらはれてゐない。例へば行け、行くなどの如きは現在と未來との不可分の形と云ふべきかも知れぬ。

一體時は現在を中心とし、過ぎ去つたその以前と後に來るべき未來につながる一

線のやうなもので、過去は遠く未來はとこしへで、現在は一瞬のやうに短いものゝ如くであるが、文法上では現在を基本とし中心と立て、それに辭を加へて過去をあらはし未來を示す。吾人は未來を想像したり過去を追懷したりする前に現在に即する。上代の人もさうであつたであらう。随つて太初には何でも現在の形であらはしてゐたかと考へられる。希求・命令・禁止の形はそれを證するものかと思はれる。また月日はめぐる。太陽が物を温める。

水は低い所に流れる。

に於けるめぐる、温める、流れるは何萬年の遠い過去の世でも想像の及ばない未來でも只今の瞬間に於ても同じことである。これは三時に超越したもので、不定時と呼んだ人もあるが、形は現在であらはされてある。

等しく現在といふ中にも副詞を加へて見ると種々と變りが生じて来る。一つの咲くといふ動詞でも丁度今といふときと、今もといふときと、けさから今までといふときと、それらの差異により咲き始める・咲き續く・咲き終るやうな意に分れる。「今鐘が鳴る」「稽古が方に始まる」に於ては鳴るも始まるも正しく現在である。「鐘が鳴つてゐる」「稽古が始まつてゐる」は動作は先から起つてゐてもまだ結了に至らない。随つ

てこれは繼續現在である。「旅人が夕の山路を今も歩いてゐる」に於ける歩くといふ動作はつと前から始まつてゐるが尙進行してゐる。これは進行現在である。この繼續現在も進行現在も一つに攝してよろしい。口語に於てはこれをあらはすに「てゐる」「てをる」「及てゐるの約まつた」とる「てをるの轉訛した」ちよる」を用ゐる。但しち雅正でない。文語にては

街燈の光は消えたり。

勞働者は闇の路を歩めり。又 歩みたり。

に於けるが如く、又はたりといふ助動詞を添へてあらはす。たりは一般の動詞に、りは主として五十音圖のあいうえと四段に活く動詞に連る。りの使用に關しては特別の注意を要す。(歩めりと同じやうに消えりと用ゐるは誤謬である。)現代文には進行現在を示すに、歐文の影響を受けて「讀みつゝある」の如き形を用ゐるものが少くないが、古は同じ動作のうち重る場合を示すには雪は降りつゝの如く唯つつを動詞に加へただけであつた。但し讀みつゝ居ればといふ特別の形もないではない。

過去をあらはすには、口語にては
私は先年富士に登つた。

これは五年前のことだつた。

山の莊嚴といふことは今まで味はなんだ。

拙い筆ではとてもあらはせなかつた。

に於けるが如く、たといふ助動詞を加へる。但し肯定のであるに連るときはだつたとなり、否定に連るときは關東方言ではなかつたとなり、關西方言ではなんだとなる。文語に於ては

余はいにし年富士に登りき。

それより五年は既に過ぎけり。

に於けるが如く、助動詞き及けりを用ゐてこれをあらはす。きは主として陳述體に、けりは多く記述體に用ゐられる。けりはきにありの結合して成つたもので、きの關係は恰もずとざりとのやうに思はれる。過去は回想のものとし、きを目睹回想けりを傳承回想と分ける説もあるが、時代と作家とにより用法にも多少の差異がある。(けりが過去をあらはさないで咏嘆の意を示すものとなつてゐるのも少くない。

なりけりと續いたときは特にさうである。)

未來を示すには口語にては文語のむより轉じたうまたようを用ゐる。例へば

雨はやがて降らう。

夕方になれば空は晴れよう。

に於けるが如し。中に就きうは五十音圖のあいうえに動く動詞に、ようはその他に連るが、關西方言には晴れようととも晴れうとも使用する。過去を回想といふに對し、未來を豫想と説く人もある。文語むは推度に用ゐるものともとは同一であつたが、二つに分化したと見るべきである。

この他に動作を精密にあらはす法がある。例へば
雨が今降りやんだ。

私は丁度この稿を書きをへた。

の二文から今、丁度といふ副詞を去り、既に、先にの如き副詞を加へると降り及書きといふ動作の時が變つて來る。改めた方は過去時を示すが始の形は動作の結了を示したもので、文法上これを動作の完了、略して完了といふ。文語に於てはこれを次の如くにあらはす。

雨降りぬ。

私はこの稿を書き了へつ。

このぬは往ぬより、つは果つより來たとも云はれてゐる。このぬ及つは確かめる意に用ゐたが一面には完了を示すものに分化した。さうしてこの二つの區別に關しては學者間に於て種々の説がある。ぬは多く自動詞に添ひ、つは多く他動詞に添へるとも、ぬは自然的で、つは人爲的といひ、ぬは状態に、つは動作につくといひ、つは直寫的ぬは旁觀的だといひ、つは主觀的ぬは客觀的といひ、ぬは完了のみをつは完了の外に動作の引起す結果の觀念をもつといふ。用例に種々のものがあるので決しにくいが、大體上からぬは自然的の事につは有意的の叙述にと定めて置く。尙繼續現在を示すたりは現時はつぬと共に完了を示すにも用ゐてゐる。すべて過去及完了に關する助動詞は用言の熟語をなす形即ち連用形に連り、未來を示すものは現在の否定をあらはすものと同様の連接をなす。

これら助動詞の活用とその複合形は別に説く。

第六章 動作の種々相

凡そ人の行ふ動作には種々の相がある。併し語法上よりいふときは、まづ積極的に働きかける動作と消極的に受身になつてゐる動作との二つがある。例へば

味方は敵の堅陣を挫いた。(一)

敵將が我兵に捕へられた。(二)

に於て(一)は働き掛で(三)は受身であるが如し。前者を能相といひ後者を所相と名づける。能相(二)はをといふ助詞を具する對象語と動詞から成つてゐる、所相(三)はにといふ助詞を伴ふ對象語とらるといふ助動詞を具した動詞とから成つてゐる。もしこれを改めて

我兵が敵將を捕へた。(三)

敵の堅陣も我軍に挫かれた。(四)

となすときは(三)は(二)と同じ形にて能相を示し、(四)は(三)と同じやうに所相をあらはす。但し(三)に於ては助動詞はられであるが、(四)に於てはれである。されば能相には助詞を具する對象語と動詞とを要し、所相には助詞に具する對象語と助動詞若しくはらるを具する動詞を要する。るは五十音圖のあいいうえと活く動詞に連り、らるはその他の動詞に連る差があるが、意義に於ては同一である。このる及らるは口語にてはれるらると轉じてゐる。上代の文には所相を示すにるの代にゆを、らるの代にらゆを用ゐてゐた。議らゆ、忘らゆなどはそれである。

動作の中には働きかけるでもなく受身となるでもなく、獨自に作用をなしてゐる中間のものがある。例へば「雨が降る」とか「風が吹く」「馬が走る」「鳥が飛ぶ」「魚が泳ぐ」「蟲が鳴く」とか云ふが如きはそれである。從來これを自動詞と呼び更に客語を要しないものと扱はれ來つた。併し實は能相と所相の中間に立つものでいはゞ中間相である。この相は上例の如き類ばかりでなく、対象を取るものも少くない。例へば

湯が水となる。(一)

炎から水が出る。(二)

猿も木より落つ。(三)

淀川が大阪灣に注ぐ。(四)

郵船會社の天洋丸は桑港へ向ふ。(五)

人は道をゆく。(六)

に於ける「なる」「出る」「落つ」「注ぐ」「向ふ」「ゆく」の如きは助詞とを具するもの、からを具するもの、よりを具するもの、にを具するもの、へを具するもの、をを具するもの、それぞれ対象をとつてゐる。併しにを具する対象をとつても助動詞るを具せない動詞は所相とはならぬ。助詞をを具する対象をとつても、をに處置する意のないものは

能相とならない。一般に以上の類を自動詞と呼び、これに對して能相を示す動詞を他動詞と名づけ、その區別を嚴重にしようとする説も少くないが、國語は外國語と異なり、この自他の區別は絶對的のものでない。

上に舉げた「吹く」といふ動詞の如きは普通に自動詞と呼ばれてゐるが、「人が笛を吹く」といふときは能相を示し他動詞となる。此の如きは中間相といふものが上代に於て能相所相のいまだ分化しない時に普く用ゐられた痕跡と見るべきである。また能相を示す他動詞が「又は」を添へると所相を示すことが多い。例へば「鳥を打つ」の打つにるを加へて「鳥が打たる」となし、「枝が撓む」の撓むに助動詞「る」を加へて「枝が撓めらる」となすが如きはそれである。これらの例でも自動他動は絶對的のものでないことが明かである。それゆゑ表現の様式上から中間相といふ名を立てた。

能相所相は分化して更に二つの相を生じた。即ち自分は直接に手を下さないうで、人を使つてその意志を行はせる一種の能相が生じた。例へば

妹にその數を改めさせた。(一)

弟をしてそれを使に渡させる。(二)

に於ける改める、渡すといふ働きは能相であるが、それは自分は手を下さないで、人に差圖をして行はしたもので、主體から云へば間接的の能相である。適切に云へば令相である。從來これを使役相と稱へて來た。使役相をあらはすには口語では助動詞せるさせるを具した動詞を用ゐる。文語にてはさすしむを用ゐる。文語のすがせるとなり、さすがさせると轉じたことは云ふまでもない。しめは見せしめ懲らしめの如き成語の外は口語には使用しない。この動詞の對象としては、(二)の如く能相をつくるに必要なをの助詞を具したものゝ外に、にの助詞を具した關係的對象語の二つか、又は(三)の如く、をしてを具した同様の語に、をを具するもの、にを具するもの三つをもつことが使役相を成立せしめるに必要である。

能相の動詞であつて使役相を示すものと混じ易いものがある。急がす、動かす、通はす、乾かす、匂はす、響かす、ほのめかす、惑はす、まろばす等はそれである。この類は急ぐ、動く、通ふ、乾く等の原の形になす意味のすの加はつて能相を示す動詞となつてゐるが、使役相ではない。「子供が木の枝を動かす」は能相である。これを使役相にするには「子供をして枝を動かさせる」と云はねばならぬ。

能相

所相

使役相

うごかす

うごかされる

うごかさせる

(口語)

うごく 原形、中間相

次には使役相と反對に自己の自由意志で働くのではなく人に使はれて動作するものがある。これを被・令・相といふ。例へば

左翼は友軍の關係からしばし進撃を控へさせられた。

に於ける控へるといふ動作は左翼部隊の意志でなく他より餘義なくさせられた方で、所相の一分化と云へよう。要するにこれは使役相を裏返し、所相者を主體に立た表現である。これをあらはすには、動詞に「させられる」「文語」「させらる」といふ活用連語を加へる。

尙所相の一種に四圍の狀況におされて自然的に動く相がある。例へば「昔しのばる」「そゞろに涙ぐまる」に於けるが如し。この類には助詞にを具した對象語を取るこ
とがない。これを境・遇・相と名づけて置く。

以上の如き動作の動向とは別に實現さるべき力の如何といふ點から見た動詞の

相がある。例へば

人は一時間に一里は歩ける。

粗末なものでも食はれる。

この事は私にも解される。

高山にも木は植ゑられる。

に於けるが如し。これを一般に可能相と稱してゐる。また勢相と稱する人もある。潜在してゐる力を示す姿であつて、他に働きかける能相との混雜を防ぐ爲に新に命名するならば潜勢相と名づけても善いと思ふ。この相は口語にては歩ける、寫せる、勝てる、死ねる、云へる、囁める、割れるの如き或種の動詞ばかりでもあらはせるが、一般には動詞にれるられるの助動詞を加へてあらはす。文語にてはるるるを加へる。

この外に近世に於ては

一時間に一里を歩くことを得。

の如き形であらはすことも行はれてゐる。もしこの力の不能を示さうとするには、歩けぬ、歩けない、歩かれず歩くを得ずの如く否定の助動詞を加へる。この二つの場合を合せて動詞の能否の相と呼ぶ。

第七章 修飾語

ことばは大やうに述べては明瞭な感じが出ない。「門前に人がある」といふだけでは文の要素はもつてゐても男か女か子供か老人か商人か職工か分らない。明確な表現をなすには、人といふ廣い語いはゆる汎語よりも限られた語即ち殊語を用ゐる方が宜しい。その上に限定する語を加へると意義が愈々明瞭となる。例へば

門前で可愛らしい子供が遊んでゐる。

に於けるが如し。この中の可愛らしいは子供を限定してゐる。又

小な女子が巧に羽根をつく。

の文に於ては小なは女子を限定し、巧には羽根をつくことを限定してゐる。すべて限定する語を修飾語と名づける。これを装定詞と稱する人もある。この中「小な」及「可愛らしい」は體言を限定し、巧には用言又述語を限定してゐる。文法上修飾語を二類に分ち、一を装體語とし一を装用語と名づける。その複雑なるものを修飾部と名づける。

修飾語は修飾される語と合體すべきもので、たとひ依存的であるといつても、これ

なくては完全な意義をなさないものである。例へば

蹠のある鳥はよく泳ぐ。

の文に於て、もし「蹠のある」といふ修飾部を除いたならば形式は備つてゐても意義はなさない。また

あの老人も少しは酒を飲む。

の文に於て、「少しは」といふ装用語を省くときは意義が全く變つて来る。斯く見るときは修飾語も文の主語と述語と同じく主成分と見るべきである。述語と共に述部をなす對象語も一般的にいへば装用語の如く考へられるが、さうすると修飾語の範圍があまりに廣汎となるが故に、これは算入しないで、副詞または副詞的のものばかりを装用語とする。

一、装體語

修飾語中の装體語は種々の詞から成る。まづ

- (1) 指す詞を用ゐて表現しようと思ふものを指定する。

この木は その枝も △どの種も △あの葉も

いづれの草も *彼の竹簍は

△文語に用ゐず。
*口語に用ゐず。

等に於けるこのそのあの彼のどのいづれの如きである。中にこのは手近にあるものを指し、そのは向側にあるものを指し、あのかのは離れたものを指し、どのいづれは一つに定まらないものを指す。随つて以上を近稱・中稱・遠稱・不定稱の名によりて區別する。これは方角を示すものでも場所を示すものも同様である。即ち

こちらの橋 そちらの道 あちらの谷 どちらの山。

こゝの門 その垣 あそこの庭 いづこの家
△どこ

に於けるが如し。これは人の代名詞でも

私の心 あなたの御體 彼れの目 誰の家

の如くに用ゐられる。この外にわが君、誰が家の如くのゝ代りにがを用ゐることもあるが、これは慣用があり制限がある。

(2) 名詞にのがつの助詞を加へて修飾する。その中のはひろく用ゐられ、がは限られた語に、つは少數の古代語に用例が残つてある。

青葉の山 黄色の鶏 君が代 天つ神

に於けるが如し。

(3) 名詞に助詞の加つたものでも同様にのの助詞を連ねて修飾となす。例へば

東京よりの便 田舎への旅 いそげとの仰

初年度より三年度までの學生

に於けるやうに。

(4) 數詞にて限定する。物の數や量の上から限局してその物を明確にあらはす方法は常に行はれてゐる。唯櫻を植ゑるといふだけにては明細でない。三本とか五本とか定數を擧げると始めて明細な觀念が浮ぶ。この數詞の用法には注意を要する。被修飾語の上に置く場合と下に置く場合との別がある。上に据ゑる場合には三本の櫻に於けるが如くのと、いふ助詞によりて連ね、下に置く場合には櫻三本といふが如くのと、いふ助詞を添へない。但し

一の三倍は矢張三である。

五の三乗は百二十五なり。

の一の三倍また五の三乗は共に一連であるが、區分して云へば、三倍は一の修飾で、三乗は五の修飾と見られる。さうしてこの場合には、この助詞は除いてはならぬ。また出席者の二分一また全量の三が一といふも同様である。

數詞はその物により補助の詞を用ゐる。それは物によりて同じくない。例へば

着物一襲 帶一筋 袴一行 洋服一着

酒一樽 肴一折 膳一人前

家一棟 土藏一戸前

本一冊 筆一對 紙一帖

大砲一門 鐵砲一挺 刀一振 鎧一領

掛物一幅 屏風一双 鏡一面 葛籠一合

神一柱 人一人 馬一頭 鳥一羽

等に於けるが如し。これらは數を示すと同時にその物の質を示す。これを助數詞と呼ぶ説が一般に行はれてゐるが、名詞と見做す説もある。次に順序を示すものは

第一號の形 三番めの部屋

等の如く數の上に第の字を加へ、下にも助數詞を加へる。

(5) 形容詞及形容動詞で修飾する。例へば

大きな池に幾つかの小さな島がある。(一)

美しい花が花壇に咲き誇つてゐる。(二)

大きい小さいさまざまの鳥が互に啼きかはす。(三)

に於ける美しい、大きい、小さいの如き形容詞や大きな、小さな、さまざまの如き形容動詞でそれ／＼修飾するやうに。形容詞が装體語となるには、いいの語尾を用ゐ、文語ではきしきの語尾を用ゐる。形容動詞が装體語となるには、な語尾を用ゐる。文語はなるの語尾をとる。なるのりが落ちてなとなり、きしきの父音が落ちていいいとなつたものである。(三)の例の如く一つの名詞に二つの形容詞がかゝるときは同じ語尾を用ゐる。「青き赤き鬼」に於けるやうに。尤も宣命などの古典に屢々見る

明く淨き心もて

の如く、同じ形容詞を二つ並べても、上の方にくの語尾、下の方にきの語尾を用ゐるときは、明くして淨き心といふ意にて上下合して一つのものとなるのである。

形容詞と形容動詞との區別は主として語尾の變化の差による。形容詞の方はくしきけれ。しくしきしけれと變化する。形容動詞はならなりなるなれの變化する。文語の形容動詞にはなるの外に嘲哂たる喇叭の聲、凛々たる勇氣などに於けるが如くたらたりたるたれと變化するものがある。口語に於ける「馬鹿げた事」などのたはこのたると關係がある。一體形容動詞は形容詞から動詞に轉じたものであるから存在性の動詞に併せても差支ない。

(6) 動詞を用ゐて修飾する。行く人來る客生きる力死ぬる命等に於けるが如し。五十音圖の第三列の音またはるの音で終る語尾を用ゐる。但し文語と口語との相違してゐるものがある。即ち

生きる口語 生くる文語

受ける同 受くる同

の如く、口語にて五十音圖の第二列又第四列の音にるをつけるものを、文語では第三列の音にるの結合した語尾を用ゐる。

(7) 動詞及形容詞はその對象語と共に装體の修飾となる。例へば「空を掩ふ梢」「風に靡く枝」それと等しき重さ「等に於けるが如し」。

(8) 文を以て装體の修飾となす。例へば

「選手の勝を爭ふ」競技場に

「優勝旗のひらめく」影

等に於けるが如し。

二、装用語

從來副詞と稱されたものは装用語である。「靜に考へよ」の如く一語の上にかゝる

ものがある。「大に實行に力む」の如く、對象語をもつ述語にかゝるものがある。「決して行ふべからず」の如く活用連語にかゝるものがある。「げに君の云ふが如し」の如く、叙述全般反言すれば文にかゝるものがある。また「甚だ速に出來上つた」の甚だの如く速にといふ裝用語を修飾し相共に用言を裝定するものもある。

この類はその種類が頗る多いが大別して二つとなす。一は情趣及程度の如き用言の屬性を修飾するもの、一は叙説を完成させるものである。

情趣を限定するものには、靜に・徐に・ほのかに・遙に・急に・速に等があり、程度に關するものには、聊か・纔に・辛うじて・頗る・大に・甚だ・極めて等がある。これらは文全體の上には變化を導かない。これに對し叙述に關するものは文の形式に變化を生ぜしめるものである。まづ時制の上に就いて云へば「既に」「やがて」の如きは過去の回想とか未來の豫定を示すやうに導くのである。例へば

彼の權勢は既に昨日の夢となつた。

時は方に暑熱に際す。

霜履の漸やがて堅氷至らむ。

に於けるが如くである。

過去の回顧には嘗て曩に・夙く・昔・昨等の装用語があり。現在の叙述には今・現に・方に・度等が用ゐられ、未來の豫想には將に・やがて・他日・後等が用ゐられる。

次に叙述の上には陳述・記述の諸體がある。

希求には どうぞ 何卒 願はくは 希くは

禁止には 決して ゆめ／＼

尋問には なせ など いかゞ

假定には もし 假に 試に たとひ 苟も

推定には 多分 大方 蓋し 恐らくは

肯定には きつと 必ず 疑なく

否定には まさか よもや 決して つや／＼ いざ

喩説には 丁度 恰も

反説には どうして 豈 争で いづくんぞ

等の類があつてそれ／＼上下の照應をなすのである。例へば

豈かくの如き理あらんや。

因果の關係は恰も影の姿に伴ふが如し。

に於けるが如く、豈にはあらんやと結びて反説し、恰には如しと應じて喩説するやうである。装用語は單語に限らず、語と語とが結びついてその用をなすものがある。

例へば

斷崖が「神の斧で削られたやうに」立つてゐる。

丸い大きな岩が「俵を積んだ如く」横たはつてある。

に於ける括弧間の詞の如きである。從來この類を副詞句と呼んで來た。今は修飾部とか、装用語とか稱して置く。

第八章 文の諸成分とその排列

文には主部述部修飾部のあることは既に述べた。さうしてその諸成分の排列に一定の法がある。普通の文に於ては主語は上に、述語は下にすゑる。述語の對象語は主語と述語の間に置き、修飾語はそのかゝるところの語の上に置く。その中装用語はその意のかゝる關係により述語の直上に限らず對象語の上また主語の上にもすゑる。二つの装體語が一つの詞にかゝるときは意義の緊密な方を被修飾語に近く置く。例へば赤きと大なるの二語を以て犬といふ語を修飾するとき、赤き大な

る犬とも大なる赤き犬とも云へるが、赤きといふ修飾語が犬といふ被修飾語に緊密なとするときは、大なる赤き犬といふ排列をとるべきである。

対象語が二つあるとき、いづれを先とするも不都合のないものもあるが、動作の起原發起を示すよりからの助詞を具するものはへにまでの助詞を具するものゝ上に置くべく、その他にも定まれるものがある。

世人東郷大將を軍人中の軍人となす。

の如きはをを具するものは指示の意なるとを具するものに先つべく、

我が大使は露國と平和條約を締ぶ。

の如きは與にの意なる助詞とを具するものはをを具するものに先つべく、

木材にて紙を製す。 木材から紙を作る。

の如きにて若しくはからを具するものはをを具するものに先つ。蓋し成果を示す前にその手段またその器具を先にすべきである。

地位に高下があるが、人に貴賤はない。

の如き述語が存在動詞のあり又は形容詞のなしから成つてゐるときは、主語と結合して一團となり、に又はにはの助詞を具する対象語の下にすゑられる。

貴きも賤しきも男も女も老いたるも若きも皆愛國の熱情に燃えてゐる。

の如き對立してゐる多くの主語を列擧するときは主なるものを首に置く。而して末に概括する指詞皆をすゑる。もし皆の代に各といふ指示を加へるときは、その各個が共同的に動いてゐても個々な獨立をしてゐることを示すのである。

以上は一定の順序をもつべき定であるが、命令を示す文にありては「行け君」の如く述語を先にすることが多く、また感嘆を示す文に於ても「あゝ盛なるかな、けふの儀式」の如き排列を用ゐる。また特に注意を喚起する語とか力をこめて表現しようとする語を前に置く。例へば「その勇ましき最後を友は我に報じ來る」に於けるが如く、對象語を主語の上に提示する如きである。斯の如きを轉置（又は倒裝）といふ。轉置は韻文には常にあらはれる形であるが、散文に於ても時にこれを行ふことがある。

第九章 總主語と提示語

内容の廣き題目を説明するにはその一部一部を別々に述べることが便宜である。例へば一つの菓に就いても、その色や香や味を別々に述べるに方り、

この菓は色がよく、香が高く、味がうまい。（一）

と表現し、一人の青年の上を説くにも

この青年は身體の發育よく、性質溫厚にして、品行正し。(三)

と身體性質品行に分けてそれぞれ説明する。これらの文には述部は三つに分れてゐて、その各部に主語と述語がある。然しその各部は全部にかゝる主語に依屬してゐて相俟つてその叙述を完成してゐる。斯の如き主語を總主と名づける。各述部に於ける主語は部分的の主語であるから、假に分主と命じて善からうと思ふ。(これを副格と名づけ、總主を文主と構してゐる人もある。)この總主分主は國文に於ける特殊の姿であつて、これを外國文に於けるが如く、この菓の色がと書き改めると、それは別の表現の形式となるのである。總主は助詞はを具す。この類にして述部が唯一つから成るものも少くない。例へば、

北國は氣溫が低い。(三)

賀茂川は水清し。(四)

の如きはそれである。これらは總主分主と分けるは不適當とし、(三)の如きは北國に於てはの義で、副詞句であると説く人も少くない。併し(四)もこれと同形であつて、これを賀茂川に於てはと見るは宜しくない。(三)に於ても北國を主として説くのであ

つて、氣溫を主として述べたのではない。試に

北國は氣溫が低い、人口は少い。

氣溫は北地に於ては低いが、南地に於ては高い。

の如き文を作つて見るとその表現の形式が異なることが了せられる。されば述部が一つの場合に於ても總主分主の名に攝して置くことゝする。

これに紛れ易いのは提示語である。提示語は述語の對象となるべき語に特に重きを置かうとする時、それを文首に提出するもので、例へば

會長は會員これを選舉す。

に於ける會長はの如きはそれである。この文の主語は會員であつて、本來は會員は會長を選舉すといふべきを、會長の選舉を重大とし、これを首に提示し、尙それを示す爲にこれをとといふ指示の語を置いてある。随つて會長は總主ではないのである。提示語の複雑なものを提示部といふ。例へば

「一時に金百圓を納むる者は」これを終身會員となす。

の括弧内の語の如きはそれである。提示語をもつ文には「これを」と受ける指示語を略せるものが少くない。且その主語が前後の關係により推知されるものはそれも

略することが常である。例へば

毎月會費を納むる者は通常會員とす。

に於ては「本會は」といふ主語を略してある。この提示部の如きは一見しては主語の如く見えるが述語の題目でない。通常會員となすことは本會がするのである。また

箱は木で作る。

の如きも箱といふ主語が作るといふ動作をなすのではない。もし「箱は木にて作る」と改むれば主語と述語との一致はあるが、國文にはさういふ所相は古來存しない。またこれを作る人は尋常の指物師か大工かにきまつてゐて特示するの要がないから示さないのが常型である。随つて箱は木で作るの如きは誤文ではない。但し作ると箱との間に論理的關係はもたないから、「箱は」は作るといふ述語に對し假主語と取扱ふのが便利である。

第十章 單文と複文

文にはその構造の單純なものと複雑なものとの別がある。尋問・希求・命令・禁止等

直接に應答する場合、又は應答するとして表現する場合を除き、一般的にいへば文は少くとも主語述語から成る。さうして主語述語の關係が唯一回成立するものは單文といひ、二回又は二回以上成立するものは複文といふ。

「飛行機が飛ぶ」の如き主語述語が各一語づゝから成る最簡單な單文である。「飛行機が空を飛ぶ」と關係的對象語を加へても、「蜻蛉のやうな飛行機が低い空をゆう／＼と飛ぶ」の如く裝體裝用の修飾語を加へても主と述との關係は矢張一回しか成立しないから同じく單文である。また

はしけも、荷足船も、ボートも、帆船も、水雷艇も、巡洋艦も、甲鐵艦も皆船舶である。の如きは主語が澤山にあつても述語に對する關係は同様であるから、同じく單文である。

飛行機は郵便物の搭載、旅客の運搬、下界の偵察撮影及敵軍の攻撃等の任務をもつ
の如きは多くの修飾語を有つてゐるが、主語述語の關係は一回であるから同じく單文である。

象は鼻が長い。 兎は耳が長い。

の如き總主分主が一文の中に一つだけあるものも單文に算へる。複文にはその種類

が少くない。第一には主語が同一で、澤山の説述を疊み重ねて述べるものがある。例へば

北畠親房は文武に長じた國家の柱石であつた。』

兵をとつては皇軍を勵まし賊兵を壓した。』

筆をとつては神皇正統記を著し大義名分を正した。』

この文は三つに分れてゐて、初の一段には主語述語が具備してゐるが、二段三段は同じ文主が縦につらぬいてゐるので、主語を示さないのが常型である。(近世の直譯體の文には二段以下には彼はなどの指詞を用ゐるものがあるが古い文にはない。)この類は縦に重ねる文であるから、これを重文と名づける。從來斯ういふ文には別に名をつけなかつたが、自己を物語り人の傳記を記述するにも多く用ゐられる姿であるから一つの目を立てる要がある。またこの類には一つの文段に述べたことを次々に分け述べて、末に結をつける類もある。例へば

彼は饒舌家である。』過去をかたる。』現在を告げる。』未來を述べる。』己を説く。』人を評する。』何にでも口を出す。』

に於けるが如し。此の如き文にありては初の一段を起首節といひ、終の一段を收束

節といひ、その間にあるものを中間節といふ。

第二には文の中心が一つでなく、二つ又は二つ以上に分れてゐるもので、主語述語の關係が二回又は二回以上成立し、相互が對立的に連ねられる文がある。これは横に連ねる文である。よりてこれを連文と名づける。例へば

積善の家には餘慶あり、

積惡の家には餘殃がある。

に於けるが如し。「月落ち、烏鳴き、霜天に滿つ」の如きは三段から成つてゐる。二段から成るものでも三段から成るものでも皆並立節から成つてゐる。並立節は前節後節中間節などと分けることがある。從來この種の文を重文と名づけたが適正と思はれぬから改めた。

第三には主述の關係が二回から成つてゐて、前にある主述の組合せから成つてゐるものは、後にある主述の組合から成つてゐるものの原因となり、條件となり、前行の動作となり、後にあるものは前にあるものの結果となり判定となり、後續の動作となるもので、兩者は相抱合して叙述を完成するのである。これを抱合文略して合文と名づけ、その前半は條件節、後半を判定節と名づける。例へば

氣溫が低いから、氷が張りつめる。(一)

心がゆるむと、志がとげられぬ。(二)

友人が切に勧めたが、私はゆけなかつた。(三)

に於けるがやうに。(二)は原因結果の關係で、(三)は條件判定の關係で、(三)は事件の反對關係で抱合されてある。合文の前後兩節の關係は複雑であるから別に述べる。

第四には叙述全體の主語が一つで、その部分々々を説明する分主と述語の幾つも並出する文がある。例へば

この菓は色がよく香が高く、味はうまい。

に於けるが如し。これを總・主・的・連・文・と名づける。

第五には主部・述部・修飾部の成分中に別の主述關係を有するものを含んでゐる文がある。例へば

牛の飲む水は乳となる。また

蝮の飲む水は毒となる。

の如きは主部の中に「牛の飲む」又「蝮の飲む」の主述關係が別に存在してゐる。また來る人もなき山里にも春は訪れる。

の文中、山里にもといふ對象部には「來る人もなき」といふ主述關係から成る修飾部が存してゐる。こゝの對象部は春はの下訪れるの直上にも置かれるが、強調する爲に主語の上に置いたのである。

人々「蟻の甘きに就く如く」利に趨る。

の中にはその装用修飾語の中に「蟻の甘きに就く」といふ別の主述關係のものが存在してゐる。また

山の端に眞澄の鏡かけたりと見ゆるは

月のいづるなりけり

の歌には述部に「月のいづるなり」といふ別の主述關係が存在してゐる。以上に挙げた別箇の主述關係はいづれも他の成分中の一分子と見るべく、全くその成分に依屬してゐる。されば全文は依屬文をもつ複文である。この類を有依屬文略して有・屬・文と呼ぶ。さうして依屬してゐる部を依屬節と名づけ、その他を主節と名づける。

第六、合文の相重つて複雑の合文をなすものがある。例へば

人皆善良ならむには法律の必要なけれども、もし不正の人出づるときは司直の裁斷を請はざるべからず。

の如き、人皆善良ならむにはは法律の必要なしの條件であり、法律の必要なしはその判定であるが、これが抱合してもし不正以下の文の條件となつてゐる。斯く聯珠的に連續してゆくものがある。

第七には合文の二組が對立的に連ねられるものがある。例へば

春は來れども花咲かず、秋は過ぐれど葉は落ちず。

に於けるが如し。この類は合文を含んだ連文といふべきものである。

第八には重文の中に合文的の連文を含んでゐるものがある。例へば

頼みがたきは我が心なり『事あれば忽に移り、事なきも亦動かんとす。』

に於けるが如し。起首節に續く收束節は二つに分れ、恰も一頭二脚の狀をなしてゐる。さうして二つの收束節はいづれも起首節の「心」が中心となつてゐる。

第十一章 文の斷續 終止形・中止形・接續詞

文は小刻みに幾つにも區切つて述べることがある。またこれに反して長く續けることもある。感情の切迫してゐるときは小刻みに區切りてあらはし、然らざるときは長く續けるを常とする。古歌に「うらみわび待たじいまはの身なれども」云々の

上二句の如きは如何にも押し迫つた表現である。また

火の元用心。お仙名娘の泣かすな、馬肥せ。

の如きは呼びかけた文として最も簡潔なものである。これと反對に保元物語や平治物語などの中には綿々として數百語をつゞけたものもある。この切ることを文法上斷止また終止といふ。終止の形は文中大切なものである。動詞は五十音圖の第三列うくすつぬふむゆるうの音で終止となるものが多い。唯存在動詞のあり及その一群はりの音で終止となり、形容詞は文語はしの音、口語はいしいの語尾で終止となる。(ありも口語ではるで終止となる。)

口語の中、文語と終止の形を異にするものがある。五十音のい列又はえ列の下にるの音を結ぶ起きる受けるの類は近世の文語にてはう列の下にるの音を結ぶ起くる受くるの語尾にて終止し、中古文にては近世語よりるの音を除きたる起く受くの語尾にて終止する。これらの説明は中古文から近世文、それから現代口語に變遷したものであるが、説明の便宜上逆に説いた。

文は全き終止の形をとり一定時の休止をなして更に次の文を起す場合と説述を半ば云ひさし、更に他の説述にうつる場合とがある。後者を中止といふ。連續の文

に於ては中止法を用ゐることが重要である。例へば「雨が吹く」と二つをそのまゝ續けると、その間に若干の隔りがあるやうに聞える。これを「雨が降つたり風が吹いたり」とか「雨は降るし風は吹くし」といへばこの二つの動作は同時に行はれることが明瞭であつて、その間に全く溝はないのである。これは口語に於ける中止法で、し又はたりの助詞の助けを假りてこれを示すが、文語では動詞の種類によりい列かえし列かの語尾そのまゝで中止をあらはすものである。例へば

雨降り、風吹く。

雪消え、氷解く。

に於けるが如し。形容詞を述語に用ゐる時も「山は高いし海は深い」の如く、い又はしの語尾にしを添へて中止形を作るが、文語では「山は高く海は深し」の如く、く又はしの語尾そのまゝで中止を示すのである。

中止法は重文にも連文にも屢用ゐられ、その連續を圓滑にする。重文によつては中止を重ねて經過のあとを順次に示すことが多い。例へば

安藤對島守信友は初め奏者となり、寺社奉行を経、大阪城代に進み、後老中となり、幕閣に列したり。

に於けるが如し。而してこれらの中止法は最終の述語の時制の拘束を受けるものが多い。また各中止形の動作の起つた時間に前後あるときは遠い過去から漸次近いものに及び、これと共に初はとか、尋いでとか、次にとか、後などの順序を示す副詞や數詞を加へることがある。併し助詞での加るときはその意義が複雑に成つて來る。その詳しいことは後に説く。

連文に於ても

月落ち、烏啼き、霜天に滿つ。

最初一人が立ち、尋いで二人ゆき、次に三人が去り、終には誰もゐなくなつた。

に於けるが如し。總主をもつてゐる連文にも最後の文主以外の述語には中止形を用ゐる。例へば

蜜柑は色がよく、香が高く、味がうまい。

といふ文のよく、高くに於けるが如し。

連文に於ける中止法が形容詞から成るときは口語も文語も同様であるから別に問題はないが、形容動詞から成るときは次のやうに變りがある。

兄は柔和で、弟は活潑だ。

兄は柔和にして、弟は活潑なり。

花は紅に、柳は緑なり。

谷水の音は淙々として、秋風の聲は颯々たり。

に於けるが如く、形容動詞のなりは中止形ににを用ゐ、或はこれにしてを加へたりは中止形にとしてを用ゐる。連文に於ける中止法が動詞に助動詞の加つた活用連語から成る場合には、終止法の時制及推度のべし肯定のなりは中止法を拘束するが、所相使役相及否定に於ては拘束しない。例へば

風荒れ、浪騒がむ。(一)

風荒れ、浪騒ぎぬ。(二)

風荒れ、浪騒ぎたり。(三)

に於てむぬたりは中止法に影響を及ぼし、(一)は風荒れむ、(二)は風荒れぬ、(三)は風荒れたりの義となり、

風荒れ、浪騒ぐべし。(四)

風荒れ、浪騒ぐなり。(五)

に於て(四)は風荒るべし、(五)は風荒るゝなりの義となる。但し中止形の下に助詞てを

加へると意義に變化を來たす。このてといふ助詞は助動詞つの變化から來たもので、撥ねる音の下に連るときはでに轉じる。例へば

日既に海に沈んで、月ほの暗し。(六)
に於けるが如し。

銀河半天にかゝりて星きら／＼と冴えたり。(七)

このてまたでといふ助詞が中止形に接した時は(六)(七)の如く、その一節を次の節へ並べ擧げるだけの用をなすものと、

沖の方より波の音しばしば運びて魂削るが如く、(八)

(八)の如くてを結びたる句は次の句の原因または條件を示すものと、

故郷を去りて東の方へさまよふ。(九)

(九)の如く、ある動作が終つて次の動作にうつることを示すものがある。(九)は重文に多く、(六)(七)は連文に限り、(八)は形は連文の如くであつて合文の如き性質を具へてゐる。

文を連續させるにはその述語に中止形を用ゐることもその一法であることは既に説いたが、別に接續詞や接續性の助詞を用ゐて文を延長させる。合文の如きは接

續性の助詞がなくては成立しないのである。

接續詞は語をつなぐのもあるが、文を續けるものはいつにても後の文の起首に置かれ、接續性の助詞は前の文の末に結びつけて用ゐる。例へば

農家は耕耘を事とし、また畜産を営む。(一)

商人は物の有無を通じ、且貨殖を圖る。(二)

織女は金襴も緞子も織りあげるが、自分は着ない。(三)

の(一)のまた、(三)の且は接續詞で、(三)のがは接續性助詞である。接續詞は用法上注意すべきことが少くない。事柄の並列累加を示すには又、且、或は、さうしての類を用ゐ、制限を附するには但し、尤もの類を用ひ、選擇を示すには將^{はた}、若しくは、就中を用ゐ、上文に順應するものをつなぐには、されば、随つて等を用ゐ、逆應するものをつなぐには、併し、されど、さるに等を用ゐる。例へば

官廳の御用始は一月四日とす。尤も當日は平素の如く執務せず。

男子は高帽フロック・コートを着用すべし。但し女子は白襟紋付にて差支なし。

明朝か若しくは明後朝御訪ねいたしたい。

あの人の趣味は野球か、はた音楽か。

私は史書を好む。就中古事記を愛讀する。

天は自ら働くものに道をひらく。されば吾人は努力せざるべからず。

彼は眞面目でよく勉強する。随つて成績が宜しい。

旅は面白し。されど一人にては寂しき感あるべし。

あの人は随分努力した。併し運命の神様はまだ手をお貸しにならなかった。

口語には並列累加に又、及さうしての外にその上などを用ゐ、選擇には中では、制限には併しを、順應にはそれなら、それでは、すると、すりやあ等を用ゐ、逆應にはところが、けれども等を用ゐる。

第十二章 合文の成立と接續法

合文は前節と後節とが相抱合し、一體となつてその表出を完成すること、並に前節と後節の關係に種々の別のあることは既に述べた。今接續上の關係から見てゆくに、(一)前節の述語の末には「といふ助詞を結合させるものに二様の別がある。例へば汝もし十分に力を盡さば、その事成らむ。(一)

力を盡せばその事成る。(二)

に於けるが如く、ばが動詞盡の下に連ると盡せに連るとで意義に相違を生ずる。即ち盡さばは假定の條件を示し、盡せばは事實もしくは事實と認めた確定の條件を示すもので、その後に續く判定節も、これに應じて假定條件の場合には成らむと未來形を用ゐ、確定條件の場合には成ると現在の形で結んで區別する。

口語に於ては假定條件を示すにはなら又はたならを述語の終止形に連ね、確定條件を示すにはから又はのでを述語の終止形の下に連ねる。例へば

汝がもし十分に力を盡すならその事が成らう。(三)

力を盡したからその事が成つた。(四)

に於けるが如し。尤も地方によりては行き、起きり、爲りすの如く用言の連用形若しくは終止形にやを加へ拗音に呼ぶところがあるがこれは訛りであつて標準にはならぬ。

文語の假定條件は述語の未來形の下にばを加へ、確定條件は述語のあいいうえと四段に活く動詞にはえ列に、その他は見る似る等の外はう列の音に、れの結合した語尾に助詞ばを添へてあらはす。例へば起くれば『受くれば』來れば『爲れば』死ぬればに於けるやうである。見る似る等はれの語尾にばの助詞を加へ見れば『似れば』の如く

あらはす。以上の如くばの添ひて確定條件をあらはす用言の語尾を確定條件形と名づける。世の文法家は從來これを已然形又は既然言と稱へてゐる。

假定條件にはもし、假に等の裝用語即ち副詞を用ゐて照應させるのが普通である。次にとも又はどども等の接續性助詞を述語の末に結びて條件を示すことがある。例へば

よし人は謗るとも我はこの道を守らむ。(五)

人は反對すれども我はわが操を守る。(六)

に於けるやうである。この中ともは述語の終止形の下に、どもは述語の確定條件形の下に連る。ともはよし、たとひ等の裝用語即ち副詞を上置き、て照應させるのが普通である。口語では

よし人はどんなに云つても我はこの道を守らう。(七)

人は反對するけれども我は操を守る。(八)

の如く、文語のともはてもといひ、述語の連用形に連ね、どもはけれどもといひ、述語の連體形の下に連ねてあらはす。(五)(七)は假定條件で、(六)(八)は確定條件をあらはす。

以上假定確定條件中(三)より(四)に至るものはその判定は上の條件の意に順應し、(五)

より(八)に至るものはその判定は上の條件の意に逆應して文を結ぶ差がある。これによりて合文は順逆二態の判定に分れる。随つて條件も順意にそふと逆意にそふとの別がある。よりて便宜上次の四つとなす。

一、順意の假定條件 ば

二、逆意の假定條件 とも

三、順意の確定條件 ば

四、逆意の確定條件 ども

順意の假定條件にはばを用ゐるもの、外にむの下には又はかを結びてこれを示すことがある。例へば

よく考へたらむには迷ふことはあらず。(九)

よく道を修せむか悟の門は開かれむ。(一〇)

に於けるが如し。このむは未來とか豫定を示す助動詞であるから、これを加へるときは述語をその意義に仕立てる。而してこれにはの助詞を加へ、時にはの意をもたせるので假定條件をあらはし得るのであり、かの助詞は疑の辭であるから近代文には同様に用ゐられるのである。逆意の假定條件をあらはすにはともの代に古文

にはとばかりを用ゐた例があるが、これは韻文などに少數の例があるに過ぎない。
近代文には

十分なる準備なく事を始むるも成功は期しがたかるべし。(一一)

に於けるが如く、述語の連體形即ち名詞を修飾する形の下にも助詞を添へてともに代用する例が見られる。但しこれは好ましいものではない。それは逆意の確定條件にも用ゐる人もあるからである。尙近世の文には

知らずといふといへども、吾學びたりといはむ。(一二)

に於けるが如く、といへどもを述語に加へて、逆意の條件を示すものがある。これは漢文訓讀上より來つたもので確定よりも假定の方に用ゐる例が多い。また助詞でが述語の中止形に結びて順意の確定條件を示すものがある。

頂に雲のかゝりて、富士は見えず。(一三)

に於けるが如し。

以上の外現代文にはときはいふ成語を述語の連體形の下に添へて順意の假定條件にも確定條件にも同様に用ゐる。例へば

天に向つて睡するときは餘沫がおのが顔にかゝらむ。(一四)

に於けやうである。室町時代にはこのときはをときんばと普通に用ゐたものである。口語にてはこれを略して唯との一辭を述語の連體形に添へて、雨が降ると路がぬかる〔二五〕に於けるが如くあらはす。

合文には前節と後節とに必ずしも主語の存在を要としない。兩節共にこれを存するのは極めて整備した形であつて、前節か後節のいづれかにこれを擧げないのは常に見る形である。例へば

「よく努力せば、その事成る」の如きは前節に主語がなく、天に向つて唾せば、おのが顔にかゝるの如きは前後兩節に主語がない。「一升の粟を蒔けば一斗の粟を得べし」もそれと同様である。これらは主語がないと云つても意義が十分にあらはされてゐて、完い文である。國文には特別にことわる必要のないときは、それを擧げないのが本體である。これを省略と見て一々補ふのは簡易を尙ぶ國文を取扱ふ道に合はないと思ふ。

すべて條件と判定との呼應は絶対に必要ではあるが、如何なる場合でも假定條件には假定の判定を用ゐ、確定條件には現實の判定を用ゐねばならないと鐵則を立てる譯にはゆかない。徒然草に「百たび戦ひ百度勝つとも、武勇の名は定めがたし」とあ

るのを難じ、ともの條件に對し、かたしといふ判定は誤である。宜しく定めがたからむと改めねばならぬとの説も少しこだはり過ぎてゐる。この場合は強意の表示の爲にさうしたと見るべきである。また合文の前節と後節とが時法の一致を要しない場合もないではない。

大川の水は今朝や、引きたれど、舳船は尙出でじ。

雪は頻に降れども、やがて友は訪ね來む。

の如きは事柄が別であるから一致させないのが正しく、また

人物の如何を知らむと欲せば、その友を見よ。

に於ては前節は假定條件であつても後節は命令體であるから差支がない。また

價は廉なれど、今求めることは見合せよ。

の如き前節は確定條件であるが、後節は禁止的の命令であるから是も不都合はない。
また

互に助けたならば、その生活は支へられますか。

の如きは前節は假定條件で、後節は尋問であり、また

どんな事があつても私は行く。

の如きは前節は假定條件で、後節は自家の決意を示すものである。以上の様に前節は假定條件であつても、後節が命令や禁止や尋問や決意の場合にはその條件との照應は必としない。この他助詞がにをに依て兩節を結合させるものがある。例へば情をかけたが、却つて反對に思はれた。

幾度も忠告したのに、更に反省しなかつた。

世は日々に進みゆくを、我は唯退歩するのみ。

に於けるやうに。中に文語は助詞がにをを述語の連體形に連ね、口語はが及のにを使用し、をは用ゐない。これらは反對のものを結合するに始まり逆意の條件を示すに至つたのである。

また述部を修飾する依屬文をもつものは一種の合文と見ても差支がないものがある。例へば照りながら雨が降るといふ文を今少し精密に叙述した

かなたの空は照りながら、こゝには雨が降る。

の如き文になると、こゝには以下が主文で、かなたの空は以下は主文を制限した文と考へられる。元來ながらといふ助詞は二つの動作の同時に起ることを示すもので、口語文語共に同じやうに用ゐられる。これと同じたぐひにものものを用ゐるもの

がある。例へば

今まではさう考へてゐたものの、將來はそれを主張する氣はない。

の如きである。但しもののにて終結した文は矢張有屬文と見る方が正しい。

第十三章 文章成分の關係及轉換

文章の諸成分は互に緊密の關係を有してゐて、遊離すべきものでない。主語と述語との關係を始めとし、述語と對象語との關係があり、主語と對象語との關係があり、裝用語と述語との關係があり、裝體語と主語及對象語との關係があり、接續語と他の成分との關係があつて、互に抱合連結するのである。主語は題目で述語はこれが説明をなすことは既に屢説いたところであるが、本來題目たるべきものと述語たるべきものとを轉換して別の形式であらはすことがある。例へば

エヂソンは電話を發明した。(一)

といへば極めて普通な表現式であるが、これを轉換して

電話を發明したものはエヂソンである。(二)

ともあらはすことが出来る。(二)は題目の動作・狀態等を述語で説きあかし、(三)はこれ

と趣を異にして、主部に事柄を説き、述語は同格であるものを示す。これを表すには口語には名詞にである、です、たの如き辭を添へ、文語にては不完全動詞のなりを加へる。もしこれを一層力強くあらはさんには

電話を發明したるはエヂソンにあらずや。(三)

の如き反語を用ゐる。(三)(三)の式に於ける主語は用語の連體形の下に「ものは」「ことは」を加へたるか、或は連體形の直下に助詞はを加へたるものを用ゐる。もし存疑の場合には

人類に進歩的動機を與へたるは何者か。(四)

に於けるが如し。(四)は「何者が人類に進歩的動機を與へたるか」(五)といふ形式より後に發生した形であらう。(二)と(三)とは表現の意義を同一のものとするならば(二)よりも(三)の方がはでやかな感じを生じるやうに思はれる。また題目が一つに限らないで、幾つもの題目が合體してゐるものに於ても、前と同様に轉換が出来るものがある。例へば

溫熱と濕氣とは植物を生育長茂せしむ。(六)

を轉換して

植物を生育長茂せしむるものは溫熱と濕氣となり。(七)

と改めることが出来る。併しこの場合には題目と説述内容が全體的に一致するものでなくてはならぬ。若し題目の一部分的な説述のものを轉換するときは意義に誤を生じる。例へば「今雨が降る」といふを「今降るのは雨だ」といふのは正しいが、唯雨は降るといふを「降るものは雨だ」とするとき、降るものゝ内には雪も霰も雹も霜もあつて内容に間違を生じるから、此の如きは避けねばならぬ。この如き文に於けるなりだですの如きは大切な詞ではあるが、形式語であるから、これを除いて用ゐない場合も少くない。「降るは雨、鳴るは瀧の水」に於けるが如し。

同格語の外、主語は或種の對象語と轉換をなすことがある。その中最も普通なのは能動の相に置きかへられる場合に生ずる。例へば「降りしきる雪は松の梢を埋む」といふを

「松の梢は降りしきる雪に埋められる」。(八)

と改めるが如きはそれである。埋むの對象語である松の梢を主語に轉じ、主語であつた降りしきる雪に助詞にを加へて、埋めらるの對象語に轉じる。この場合には述語にる又はらるといふ所相の助動詞を缺いではならぬ。併しこの轉換は國文に於

ては無制限に行うてはならぬ。「左官が壁を塗る」といふを「壁は左官に塗らる」とは普通には云はない。生あるものや力あるものは生なきもの静かなものとは區別してあらはすのが國文の常經であつて、歐文のやうに何でも擬人法にとり扱はないのである。近世の文には漢文訓讀法の影響を蒙りて、所相を妙な風にあらはすことが行はれてゐる。例へば「王藤左衛門尉祐經は富士の狩場にて曾我兄弟に打たる」といふべきを

祐經は富士の狩場にて曾我兄弟の打つところとなる。

と書くが如きはそれである。これは正しくない。

主部を修飾する數詞は切離して表現することが出来る。主部の状態を説明する述部を主語の修飾語に轉換するとき、その數詞は代つて述部を形づくるに用ゐられる。例へば「唯一羽の鶴が池の汀にゐる」といふを

池の汀にゐる鶴は唯一羽

といふやうに表現される。また

その中に金鈴を振る蟲一つ

の如き俳句も、これと同じ表現形式を用ゐてある。また國語には外國語に於けるや

うな關係代名詞がないから、縦に重ねる文は幾つにも切つてあらはすのが常であるが、近來は外國文の影響を受けて、一つの説述を主語の修飾部にうつし、次の説述を以上の述部にあてる傾向が餘程多くなつた。例へば

兄は原稿を作る爲に昨夜遅くまで起きてゐた。

けさは起床時間が來ても目が覺めなかつた。

と二文に述ぶべきを

原稿を作る爲に昨夜遅くまで起きてゐた兄はけさ起床時間が來ても目が覺めなかつた。

といふ風に書くものがある。但しこの類はなるべく幾つにも切つて書く方が宜しい。

一つの文の述語を主語に轉じこれに對し、更に述部を加へることも少くない。

我が國民の平和を愛好するは中外の等しく認むるならむ。

に於ける平和を愛好するは國民の述部であるを、これをまとめて主部とし、次に述部を加へてある如き、教育勅語の

我が臣民克ク忠ニ克ク孝ニ、億兆心ヲ一ニシ世々厥ノ美ヲ濟セルハ、此レ我が國

體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

の美を濟すは上文であつて、やがてそれが後の文の主部となつてゐる。

對象語に於ても二つが並んで出るときは一括し順序を示し排列することがある。

「おものの浦は堅田を右に膳所を右の袖にし」といふを

「おものの浦は堅田膳所を左右の袖にし」と記す。

第十四章 假主語

尊い人の上は直接に指さないで間接にあらはすのが、我が國民の思想表現の一形式である。單語の上にもあなたといひ殿といひ様といふもその一端と見るべく、文章の上に於ても同様である。例へば記述體の文に於ても殿下が軍隊を親閲すといつては敬意を缺き妥當な表現でない。そこで親閲せらるゝとかあらせらるゝとか云ふが如く敬稱を用ゐ、これと共に殿下がといふべき主語を殿下にはと對象語の體に換へて表現する。此の如きを間接の主語と名づける。

次に所相を示すものはこれと同じ形をとることがある。例へばそれが私には云々と見える。

といふ文に於ては「私には」は對象語であるが、それがといふ主語が略された形の

私には云々と見える。

といふ文に於ては眞の主語はあらはれないで、「私には」がその地位に立つてゐる。斯の如きを假主語とも假文主とも名づける。國文には特にこれをことわる必要のない場合には主語を置かないことが普通である。随つて假主語又假文主といふものが屢用ゐられるのである。この假文主は述語に對し、論理的の關係をもつてゐないが、斯ういふ形に接した瞬間には、心理上主語述語の關係がその間に成立してゐるやうに思はれる。よりて便宜上これを心理上の主語と命じて置く。また

甘酒は麴にてつくる。

といふ文に於て、甘酒がみづからつくるのではない。人が麴でつくるのは云ふまでもない。そこでそれを委しく

甘酒は麴にて人がこれをつくる

といへば「甘酒は」は一見して提示語であることが分るが、人が及これをの略された場合には、甘酒は心理的の主語でいはゆる假文主である。もし主述の關係を一致させる爲に、これを

甘酒は麴にて作らる

と改めるのは國文の體にかなはない。次に漢文の影響を受けたものには主述の關係ある文を提示部のやうに用ゐ、これに述語を加へて文となすものがある。例へば暴飲暴食は必ず身を害す。慎まざるべけんや。

に於けるが如し。この暴飲暴食は必ず身を害すは一つの完い文をなしてゐるが、下の慎まざるべけんやといふ述語に對しては對象部であつて、形の上からは假文主である。また

物價に高低がある。

地位に高下がある。

文學に境界がない。

職業に卑賤がない。

の如きは助詞にを具してゐる語は、がを具してゐる語の下には置かれない。これらは普通の對象語ではない。「がある」また「がない」の添つてゐる語の方が上の語に依從してある感がある。此の如きはにをのに改めて見ると、いづれの語に重きを置いてあるかが了せられる。これらにはの助詞の下にはの助詞を重ねて用ゐると無論假文主となる。以上の如く敬稱所相提示の場合には假文主が使用せられる。

第十五章 引用文

他の言説を説明者の文中に取り入れることがある。これを引用といふ。引用は語句文章に互りて使用されるが、その文をなすものを引用文といふ。例へば

古人も「隗より始めよ」と云へり。(一)

「君子は過を二たびせず」と論語に云へり。(二)

の如く、故事や格言などを引くことが多く、これらの目的は典據となるものを舉げて自家の言説を力強く表現するにある。随つて修辭學上に取扱はれてゐるが、文法上でも力強く表現するものの一つとして考ふべく、また文章の成分の上からいふと、といふ指示の助詞により他と連結するもので、次の述語に對して對象語の位置に當るものである。すべて引用にはその出所を明示するものと臚げに暗示するものがある。さうしてこれを説明者の文に織りこむには、(一)の如く中に挿むものと、(三)の如く首に提示するとの別がある。直接に明示するものは、といふ助詞で受けて下に云ふとか云へりの如き述語を用ゐるが、古文に於ては

曾子曰はく、「我日々に三たび我が身を省る」といへり。(三)

の如く、上下に曰はく、云へりと相應じて引用したものもある。近世に於ては漢文訓讀の影響を受けて

孔子曰はく、身體髮膚これを父母に受く、肯へて毀傷せざるは孝の始なりと。

諺に云ふ、釋迦に說法と。(四)

の如く、上に曰はく、又はいふを置きて下に述語を省略する文も行はれてゐる。但し斯の如き文には次に「眞に宜なるかな」などの賛意を表する文が伴はれるのが普通である。間接に示すものには、あり、見ゆ、出づ等の述語によりて連結される。例へば

「よむことの難きにあらず、知ることの難きなり」と悦目抄にあり。(五)

「積善の家には餘慶あり、積惡の門には餘殃留まる」とこそ見えて候へ。(六)

「必要は發明の母」と西諺にも出でたり。(七)

等に於けるがやうである。次に引用にあたり趣旨は同じく、その言辭の一部分を變更してあらはすことも往々にしてある。平家物語などには云々といふ本文ありなどと述べてゐながら、原典を幾分改造したと見えるものが少くない。(六)の如きも易の語を少し直してある。

同じく引用である中にも、といふ助詞によらないで、はの助詞によりてそのまゝ、

主語の位置におき、またのの助詞により修飾語の位置にすゑられることもある。

「旅に寐て夢は枯野をかけめぐる」は芭蕉の辭世なり。(八)

「河内に入り三十里、歩々楠公を憶ふ」の詩を誦す。(九)

の如きはそれである。(九)の變體には

少將花のもとに立ち寄りて

桃李不言春幾暮 煙霞無跡昔誰栖 (一〇)

古郷の花のものいふ世なりせばいかに昔の事を問はまし (一一)

この古き詩歌を口ずさみ給へば、康頼入道も折節あはれに覺えて黒染の袖をぞ
濡しける。

の如く、引用文を獨立した形に置き、この古き詩歌と受けさせてある。すべて引用文には「」の如き勾かぎを用ゐて他と區別する。尤も(一〇)(一一)のやうに獨立された場合には別行に記して本文の間に挟むのが常である。もし一人の叙言中に他の言説を引くときは、別種の勾「」を用ゐて區分する。但し世には引用中の引用に單勾を用ゐ、一般の引用に複勾を用ゐるものもある。

また引用には自家の言説に力を添へる爲でなくて、世説を擧げ却つてこれに反駁

を加へることも少くない。例へば

世に説をなすものあり、曰く………と

に於けるがごとく、論難の文には屢、見るのである。これらの文にはとの助詞にて引用を指示した後に「惑へるの甚だしいもの」とか「夫豈然らむや」など反對の意を述べる文が伴はれるのである。

また物語・軍記・謡曲・浄瑠璃等の文に於ては、詞と地、反言すれば叙言と叙事とを織りませてあらはすことが多い。その叙言はとの助詞によりて導かれることが、以上の引用文と同一である。例へば

宗盛卿急ぎ出で、

「競はあるか」(一)

「候はず」(二)

と申す。

「すは、きやつめを手延にしてたばかりぬるは。はや追つかけて討て」(三)

と宣へども、競は勝れたる大力の剛の者、矢繼早の手きゝにてありければ、

「二十四さいたる矢ではまづ二十四人は射殺されなんす、音なせそ」(四)

として續く者こそなかりけれ。

に於けるが如く、とまたとてにて連つてゐる。さうして叙言の部は現代語を用ゐる地の文は古文體に據つたものが多い。これらの文に於ける叙言と叙事の關係を見るに、叙言はむしろ主要な部分をなし、叙事はその紹介に止まり文の結末をつけるに過ぎないことがある。

幾つもの叙言叙事の連續に方りて、紹介の記載の重なるのは讀者を倦ましめるものであつて、一問一答さし追つた場合に於ては、中間に於ける地の文は省略することが多い。例文の(二)問に對し(三)の答に於ける間の省略の如きはそれである。尙その適例としては、平治物語に於ける

「主上はいづこにおはしますぞ」「黒戸の御所に」「上皇は」「一本の御書所に」「内侍所は」「溫明殿に」「劍璽は何處に」「夜の御殿に」と

左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へ給ひける。

の文の如きを見るべきである。

謠曲などには叙言の上に主人公であるシテ詞とか副主人公であるワキ詞とか、隨伴のツレ詞とか子方の詞などと肩書して叙事を省略してある。

狂言詞「いかに申し上げ候。判官殿の御通り候。

ワキ詞「いかに、これなる強力とまれところ。

ツレ謡「すは我が君を怪しむるは一期の浮沈きはまりぬとみな一同に立歸る。

シテ詞「あゝ暫く。あわてゝ事を仕損ずな。やあ何とてあの強力は通らぬぞ。

ワキ詞「あれはこなたより留めて候

に於けるがやうである。尤も謡曲では謡ふところになると、詞も地もごつちやにして主客が一句づゝ交互に謡ふことも多分にあるが、脚本になると、叙言ばかりで文を行り、地となるべき部分は「ト書」といつて小さく首に書き添へる形式をとつてゐる。

第十六章 首尾の照應

文には首尾が相應しなくては完全な表現は出来ない。普通の主語と間接主語又は假文主との別があることは前章に説いたが、それにつれて述語の變つてゆく場合を尙考究して見る必要がある。例へば

私はさう思ふ。(一)

私にはさう思はれる。(二)

の文に於て(二)の私は普通の主語で、その述語は能相である。(三)は間接の主語で、その述語は所相である。もしこれを私はさう思はれる、私にはさう思ふとしたら全く文をなさぬ。これは首尾の一致を缺いてゐるからである。

すべての対象語は述語と結合して述部を形づくることは屢、説いたが、特に「をして」又は「を以て」を具してゐる対象語が上にあるときは、述語は「すさすしむ」をもつ述語が必要である。これも首尾相應の一つに數へられる。

司令官は先遣部隊をして敵の左翼を衝かしむ。(三)

は即ちこの例である。逆にこれを述語の方からいへば、衝かす、衝かしむ、突破せさすの如き使役相を示す述語には「を」をして、「を」を以てを具する対象語か、若しくは「を」を出して、「を」を遣して、「を」を派して、「を」を促して、「を」に命じての如き語句を前に置く必要があるのである。

尙述語の種類によりて表現の形式が異なるものが少くない。奏す、啓す、みそなはす、崩すの如き特殊の敬稱の動詞が述語に用ゐられるときは、主語又は対象語には「天皇陛下に」「皇后陛下に」「陛下は」の如き語を用ゐねばならぬ。

叙す、任すの如き述語につきて云へば、上の方よりの表現とするには

何某を陸軍大尉に任じ、正七位に叙す。(四)

の如くし、下の方よりの表現とするときは、

某は陸軍大尉に任じられ、正七位に叙せらる。(五)

とすべく、或は二つのられを末の一方に攝すべく、また給ふと賜るといふ二動詞に就ていへば、給ふは上より云ひ、賜るは下より云ふの差がある。

陛下には某大臣に親しく優渥なる勅語を給ふ。(六)

某大臣は陛下より優渥なる勅語を賜る。(七)

に如けるが如く、(六)には間接主語か若しくはにはに代へるによりを以てし動作の發り出づる對象を用ゐ、(七)には間接主語を用ゐてはならない。給ふは與へる意、賜るは戴くの義であるから、以上の如く首尾相應の差異がある。自らするのと他からするのとを混じてはならない。縦に重ねる文に於ては

某氏は臺灣總督となり勳一等旭日章を給ふ。(八)

の如きはなりは自爲、給ふは他爲にて、正しい文ではない。給ふを賜ると改むべきである。また侍りの如きは自らの上にいふ詞であるを

昔菅丞相といふ人侍りき。

の如く用ゐるのは同じく誤である。敬稱に云ふにはおはしきとすべく、敬稱でないときは唯「あり」とすべきである。これを混同してはならぬ。

時制の上から時を示す副詞の性質により叙述もこれに應じて過現未の三つの使用が約束されて「將に」があれば、未來豫想を伴ふべく、「嘗て」「先に」等があれば過去を伴ふべきことは既に説いた。

叙述の上にも、若し又假に如き副詞があれば假定を、須らくとか當に等の副詞があれば肯定を、「否定を覆した」「ざるべからず」の類もこれに屬する（よもや又はゆめゆめをさをさ等の副詞があれば否定を用ゐること、假定の條件には未來的の推度を、確定の條件には確定又は過去の叙述を用ゐ、上下の呼應、首尾の一貫を期せなくてはならないのである。

第十七章 係結法

主語・對象語若しくは裝用修飾語の下に強意・詠嘆・疑問の助詞を添へるとき、それに應じて述語の體を變更する一種の呼應がある。これを係結といふ。而してその上にあるをかゝりといふ。古くはかゝへとも呼んだ。下に應ずるをむすびといふ。

古くはおさへとも呼んだ。この係結は平安朝時代に發達完成した表現形式の一種であつて爾來盛に襲用されたが、現代に於ては韻文並に擬古文以外に於ては昔のまには用ゐられない。この係結法は本居宣長の紐鏡以來整頓されたが、今日はその一部分を除いて説くものが多い。

まづ強意の助詞ぞの添加から考へて見るに、強調しようと思ふ詞の下に助詞ぞを加へる。特に一つをぬき出して一層強調しようと思ふときは助詞こそを加へる。さうしてぞのかゝりに對しては、述語は用言の名詞を修飾する語尾即ち連體形を以て收束し、こそのかゝりに對しては確定條件を形つくる語尾を用ゐる。詠歎のなん、疑問のや、かも、ぞと同じ語法を取る。以上の助詞を用ゐない場合には通常用言の終止形で收束する。用言の連體形で收束するものを第一種のかゝりむすびといひ、確定條件形の語尾にて收束するものを第二種のかゝりむすびと名づける。

〔備考〕紐鏡には三種に分ち、はも徒（助詞の加つておないもの）の類を第一種、ぞのや何の類を第二種、こそを第三種となし三段と分けてある。

對立を示す助詞は、並列を示す助詞も等の場合に尋常の終止で收束したものがぞ、なん等の加はつたとき、收束の語尾を變へるに至つたのは何故であるか、反言すれば、

係結法の發起と展開とは何に由るかは考究すべき問題である。顧ふにその始はかりことばだけを用ゐたものと思はれる。例へば

君はさきがけて戦場に赴くべきぞ。(一)

といふ文の戦場といふ語を強調しようとするときは、最尾にある助詞ぞを戦場の下に移し

君はさきがけて戦場にぞ赴くべき。(二)

となし、若しさきがけてといふ装用修飾語を力強くあらはさうとするときは、

君はさきがけてぞ戦場に赴くべき。(三)

とし、多くの人の中で君といふ詞を強くあらはす場合には、はの助詞を除き

君ぞさきがけて戦場に赴くべき。(四)

とあらはしたのであらう。疑問のかに於ても同様に

私はいづこへ行くべきか。(五)

といふ文のいづこを強調する場合には

私はいづこへか行くべき。(六)

とし、誰が行くべきかといふ文の誰れを強調する場合には、誰か行くべき。

誰か行くべき。(七)

とする。やも同様に、例へば「君はこれを知るや」といふを

君はこれをや知る。(八)

君やこれを知る。(九)

との如く、その強調する調の下に移動させる。やは有りや無しやのごとく用言の下にあるときは終止形に連るが、強調する爲に移動した場合には收束する用言は終止形を改め、連體形を以てする。これはかの收束法に引かれて同様の形をとつたものであらう。而してぞでもやかでも主語の下に移す場合にははもの添つてゐたものを推しのけて、その地位にすわるのである。

なんは古くはなもといつた。もとはなともと二つの感嘆の助詞が結合して一つになつたものと見える。歌にはあまり用ゐない。

こそその如きも奈良朝以前に於ては「衣こそ二重もよき」の例に見る如く、ぞと同じ收束を用ゐてゐたが、平安朝時代に至り、異なつた收束をとるやうになつた。一體こそにはその一つを特別に指す意があるから、自然にその他にはそれと反對のものがあつたことを暗示する傾向がある。飛驒の奥地には「君こそよけれ」の如き表現を今も用

ゐてゐるが、その裏には「私には悪い」といふ意が籠つてゐる。古くから反對の意を連ねた文も少くない。ど又はどもの動詞によりて連結される時の語尾が残つて結びとなつたやうに思はれる。「人こそ見えねど秋は來にけり」のどの省かれた形などはそれを證するやうに思はれる。

以上のかゝりを置いても結ばずに下に連續させるものも少くない。

常盤なる松が浦島へ渡りてぞ心ゆくかぎりなるべきを。

に於けるが如し。またかゝりだけでむすびを略する文も少くない。例へば

異論を好むは浅才の人の必ずあることなりとぞ。

得がたき貨を貴ますとも書にも侍るとかや。

鯉の羹くひたる日は鬢そゝげすとなむ。

膠にも作るものなればねばりたるものにこそ。

に於けるが如し。

強調を示す助詞には以上に説いた外にしがある。

夢にし見ゆる。

雁しとしも

等に於けるが如く、種々の詞に添ひて強調を示すが、後世には結びには影響をしない。このしに助詞もの結合したしもも強調する意に用ゐられるが、その結びは

折しもあれ。

必ずしも然らじ。

の如く一定してゐない。今地方言に「山へゆく」といふを「山さアゆく」といふ。以上のししもぞはこのさ」と連絡があつて一方から他方に轉じたものゝやうである。

現代語には強意を示すにこそを専ら用ゐてぞなんし等は用ゐない。さうしてこそ結びは別に中古文の型によらない。

第十八章 文章成分の省略

文章の各成分はいづれも必要なるものであるが、表現の形式や文章の種類や種々の場合により、その中の或るものを備へることを要としないことがある。

陳述體の文に於て、尋問・希求・命令・禁止などは呼び掛けるもの、呼び掛けられるものが、明に分つてゐるので、特示の必要のないかぎり、主語を擧げないのを本體とするものと。記述體の文に於ても、日記・紀行の如き自家を主體とするものには、これも特示の

要のないときは、我は余はの如き主語を擧げないことも既に説いた。^②また重文には起首節に主語を置き、以下の節にはこれを要しないこと^③提示語の下には主語を略する場合のあることも述べた。^④また述語によりて主語の何たるかが明かであつて、特にこれを擧げる要のなきとき、^⑤主語が或者を指さないで、一般の人々にかゝるときはこれを略する。^⑥合文に於て、一方から他が推知されるときは省略する。^⑦

けふは行くな。^①

今夏日本アルプスに登る。同行は三人。^②

狩野守信は探幽と號す。幕府の繪所となる。よく龍をゑがく。^③

議長は會員中よりこれを選擧す。^④

明治二十三年十月三十日教育勅語を發布せらる。^⑤

世にこれを爆彈三勇士といふ。^⑥

何月何日までに所得税を納むべし。^⑥

一斗の玄米を精げば九升五合の白米を得べし。^⑦

次に述語に於ても、格言、歌謠等にはこれを略することが常で、特に名詞と共に述語を作るなりを略することは頗る多く、^②副詞を置いて述語を略する場合も少くない。^③

係辭を置いて述語を略するものには、にやに對してはあらむ、とかやに對して云ふな
る、とぞに對していひ傳ふる、なんに對してある、こそに對してあれを略する類は中古
以降の文に數へ切れない程ある。重文に於ても上の節に照して明かなるものは下
の節に省き、連文に於ても對象語は異なつてゐても述語が同一であるときはその一
方を除き、合文に於ても、原因を擧げると結果は當然明かである場合には條件節を擧
げ判定の述語を略する場合がある。人と應答するに方り、前後の關係によりて述語
がなくてその用を達し得る場合に略することが少くない。助詞とにて受ける場合
には省略のあることが多い。

花は櫻木、人はものゝふ。 ①

千里の道も足もとより。 ①

鶯の宿はと問はゞ如何答へむ。 ①

人麿は歌聖、芭蕉は俳聖。 ②

その理由はいかに。 ③

諺に云ふ、論語よみの論語知らず。 ③

希はくは御指教あらむことを。 ③

いづれの時にや。徳の至れりけるにや。④

かく語りたりとかや。⑤

感涙をのごはれけるとぞ。⑥

いとも嬉しきことになむ。⑦

心すべきことにこそ。⑧

事なくて今日は暮しつ。あすもまた。⑨

春は花、秋は紅葉をめで來る。⑩

この過なからましかばと彼は悔みぬ。⑪

過のなきは常に反省したればなり。⑫

いつもお匆々で。⑬

次に對象語に於ても、述語によりそれと察知されるものは省略し、所相使役相の對象語で特に區別の要なきものはこれを除き、提示語を受ける「これを」の如きも時に擧げないことがあり、連文に於て上下同一の對象語をとるときはその一方を省く。⑭

一の矢ははづれ、二の矢はあたる。①

橋桁によりて防ぎ、涸ぐものを射さすな。①

重衡は奈良にて斬らる。②

楠木は敵の士卒を勞らせむ。②

理事は會員中より選ぶ。③

中納言も法師になりぬ。惟成の辨もなりぬ。④

次に修飾語は省略されることは無いが、被修飾語は略される場合が少くない。中にも装用修飾語即副詞を置いて述語を略する場合のあることは既に説いた。装體修飾語を置いて被修飾語を略する場合がある。の若しくはがの助詞を具する装體語の下に來る語を略するものがある。

第二篇 韻文の文法

第一章 和歌の文法

和歌は散文と異なつて、文字の數、正しく云へば音の數に制限があり、且高潮した思想感情を律動的にあらはすべきであるから、人に呼掛ける文や事を記し留めて置く文とはその表現形式に多少異なつたものがおのづと生じたのである。

第一 音調を整へる爲に一定の音數に恰適するやうに語句を構成する。反言すれば既に定まつた歌體により詞を排列する。

一、片歌といふ體。五七七、または五七五といふ音數に詞を連ねる。

若草のみどりひたして春雨の降る。

新草に小馬の口の青みたる。

一、混本歌といふ體。五七五七、四句から成つてゐる。

朝顔は世にはかなげに散りやすき花の名ぞかし。

一、旋頭歌といふ體。五七七、五七七または五七五、五七七等があるが、中に片歌を二つ

合せた五七七、五七七が軌範になつてゐる。

氣比の海 庭よしとてや 蟹の出でけむ

ほのぼのと 霞む月夜に 梶の音する

一、短歌といふ體。五七五七七

一、佛足石歌體といふもの。五七五七七、七にて短歌の末の一句を繰返すもの。

善き人のまさ目に見けむみ跡すらを我はえ見すて

石にゑり附く、玉にゑり附く

一、長歌といふ體。五七を幾つも重ね、末を五七七にて收束するを正しきものとし、五

三七、若しくは七七等のものもある。句數には奇數のものと偶數のものがある。

而して末に反歌として五七五七七の歌を添へるのが普通である。

つぎねふ山城路を 人づまの馬よりゆくに

おの夫^{づま}のかちよりゆけば 見るごとに音^ねのみし泣かゆ。

そこ思ふに心し痛し 垂乳根の母が形見と

吾が持たる眞澄鏡に 蜻蛉^{あきつ}領巾^{ひれ}おひなめ持ちて

馬買へ吾^せが夫。

泉河渡り瀬ふかみ吾が背子が旅ゆき衣裳ぬらさむかも。

一、今様といふ體。七・五・七・五・七・五を準とし、これを長く連ねるものもある。

花より明くる三吉野の春の曙見せたらば

もろこし人も高麗人も大和心になりぬべし。

一、小唄といふ體。七・七・七・五中に入れる拍子の詞はその外にある。而して口語を用ゐるものが多い。

木曾の御嶽夏でも寒い

裕やりたや足袋添へて

この唄には「ナンジャラホイ」の如き拍子を入れる。

一、新體詩といふ體。舊詩形にあきたらない人々によりて試みられたもので、七五調が最も多く行はれたが、自由律の唱へられるまでには種々の形式が試みられた。泣菫の八六調十四行詩の如き、鐵幹の五行詩、またその他の人々によりて試みられた五五調、七七調、六四調、五四調、五七五調、四四四六調、七五七調、十十調等一々挙げられないが、二三の例を載せる。七五又五七調のものも交錯したものが多い。

琥珀にかくるゝ、羽蟻が身の

きたなき縁しを 逃れいでて

透き入る眞玉の　宮に眠る

不滅の命を　知るか君は。

泣董の琥珀の一節、八六調。

杳の音、きぬすれ　たち花の、樹蔭に

靜なる、眞晝を　式神に、參れと

うなだれて、卜問へる　庭上の、白砂に

もの怖づる、老師や

胡夷の史詩の一節、五四調

青蜥蜴、つと這ひ出でて　茅が根を、走りすがへば

ほろ／＼に、乾ける土は　ひとしきり、岸をすべりぬ

有明の晝の思の一節、五七調

來しかた、運命さだめの、氷雨を、凌あぎかねて。

詩歌の、小笠に、紅の、緒結びあへず。

うれひの、谷をし、辿りて、足あしなやみつかれ。

啄木の人に聲こゑぐの一節、四四四六調

日の本と、誰が呼びそめし、新なる

日の本の歌、あらたなる

大圓輪の、讃歌ふべく

晩翠の五七五、七五、七七、三行四十三文字の歌。

これらの形は詩人の一時の試であつて、舊來の歌の如く固定してゐない。随つて爰には短歌に關するものを主と説く。

第二表現を力強くする爲に語句を反覆することは散文にあるが、和歌には定まつたものがある。その中には第二句を第五句で反覆するのがある。

多治比野に寝むと知りせば防壁たごりも持ちて來ましもの

寝むと知りせば (古事記)

に於けるが如し。これは四句で意義が一とほり完結してゐるのを、更に第二句を反覆して意を強めてゐる。

足引の山の雫に妹まつと吾が立ちぬれし

山の雫に (万葉集)

の如きも同じで、これらは四句の混本歌に一句を添へたものとも見える。反覆は句

上ばかりでなく、語の上にも行はれる。さうして聲調を助けてゐる。

北山にたなびく雲の青雲の星さかりゆき

月もさかりて

の如きは雲の青雲の、またさかりゆきさかりてと反覆してゐる。更に進んでは、或る語を引き立てる爲に類音の語句を前にする。而してそれは句の音数の制限を受けて、五音が若しくは七音から成立する場合が多い。例へば縦しやといふ詞を引立てる爲に吉野山とか吉野川とかを置き、いかゞとか、いかにといふ副詞を引き立てる爲にいかご山とか伊香保の沼などと置く。これら先行の語は後の語を呼び出す爲に用ゐるが、意義上には緊密な關係は持たないものが多い。現代的な例でいへば商店のマネキンのやうなものである。古人はこれを枕詞と呼んだ。冠辭と名づけた學者もある。枕詞には尙いろいろの種類もあるが、この場合に於ては、下の實義的な語が主で、枕詞は従であつて、従で起したものを主で反覆してゐる。要するに特殊な反覆の一種と考へて然るべきである。この反覆には前行する語句に更に叙述が加はつて長いものがある。三音乃至七音までのものを枕詞といひ、それ以上のものを序詞と名づけて區別する。器械的の區分であるが、リズムの關係からさう分けた方

が便利である。例へば

(知草の)人皆知りぬ

(さ々なみの)ながらの山の(な)がらへて

君が八千代に遇ふよしもがな (二)

(二)の知草のは枕詞で、(三)のさ々なみのながらの山の二句は存へての序である。枕詞や序詞は修辭學上のものであるが、文法的に考察すれば特殊な修飾語と見るべきである。

一體枕詞は一方から見ると修飾の意義もあるが、他方から見ると諧調の必要もあつて、五七調とか七五調とかリズムの上にも重要な役目をもつてゐて、無用の長物のやうに取扱つてはならない。謠ふ上の緩急といふことにも關係がある。特に中世以降の短歌には枕詞が全首の上に活躍してゐて、擇詞上の注意を促し、首尾相應の關鍵となつてゐるものがある。例へば

吉野川よしや人こそつらからめ

はやく言ひてしことは忘れじ (古今集)

の中の吉野川は縦よやといふ副詞の先行的の枕詞であるが、單にそれに止まらないで、

下の句に於て先に言つたといふ先きの代りに「はやく」といふ語を擇ましめるやうに活いてゐる。また

吉野山よしやつれなく忍ばれむ

耳なしの山の知らず顔して (忠岑集)

の吉野山は縦よじやといふ副詞に先行してゐる點は吉野川と同じことであるが、こゝにては耳なし山と相對的の關係をもつてゐて、作者が大和地方で詠んだとすれば、讀者の心を引くものがある。枕詞の尙特別の意義を有するものは後に述べる。

音の反覆にも枕詞の頭の音をくり返すと末の音をくり返すとの別がある。吉野川よしやの如きは頭韻反覆で、花かつみ且見る、濱ひき楸久しくの如きは脚韻反覆である。この他に同音語を重疊する表現もある。

花ぐはし櫻のめでこためでば

はやくはめです吾めづる子等 (古事記)

よき人のよしとよく見て好しといひし

よし野よく見よよき人よく見つ (萬葉集)

これ等は稀な例である。

反覆の一種に疊語疊句といふ類がある。散文にもありとあるとか、生きとしいける、待ちに待つの如きは多少用ゐられるが、歌には特に多く使用する。「夏の夜は眞木の戸たゝき門たたき人だのめる水雞なりけり」の如き、石にゑる、玉にゑるとか、「朝川わたる、夕川わたる」の如きはそれである。

第三、兼詞を用ゐて内容を豊富にし且は局面の急轉回をなし單調を破ることである。秋と飽ち憂うきと浮、菊と聞、霖雨なみどと眺、寄ると夜漏ると守る、松と待つの如き同音異義語を利用して歌を組立てるもの、また駿河と爲る、難波と何は、山川と止む、などの如く語の一部との類似をたどつて用ゐるもので、古今集だけに二百四十一種もある。

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年の蔭にすまむと思へば

の如き待つに松を云ひかけてあつて、萬代を待つといふ中に松のことを聯想し、やがて枯れないで長く榮える松を以て祝賀の意を表してゐる水際立つた表現は、思想の轉換と内容のひろさを十二分に示してゐる。道行文には屢、用ゐられ、謠曲にも多く襲用されてゐるが、その源は歌から發したものである。

人知れぬ思をつねにするがなる

富士の山こそ我が身なりけれ

(古今集)

の如きは常に爲るといふより駿河に轉じたもので、下の詞の一部分と兼用させてある。この第三句は相分れて一方では第一第二句の述語となり、一方では第四句の修飾語となる。語を省いて兩義を兼ねさせ、急速度で轉換するところに讀者聽者をして快味を感じさせるのであるが、上の事を説述したところに休止がなく直に流動させるので、輕快味は十分にあるが、莊重味は乏しくなつて來る。併し上例では重要な成分となつてゐる。尤も

津の國のなには思はず

山城の鳥羽にあひ見むことをのみこそ

(古今集)

の如き歌になると、なにはには難波と何はとを云ひ懸け、とはには鳥羽と常久とほにとを云ひかけてあるが、津の國の山城のは下の地名にかゝるときは一種の修飾語であるけれども、何は又常久とほに對しては同音から聯想するだけで、歌の義理には關係はないのである。随つて文法上では重要なものではないが、試に云ふならば音の聯想的修飾語と命じて然るべきであらう。

第四、歌の修飾語はリズムの關係から五つの音より成るものが多數を占め、先進の用ゐた修飾語がふさはしいものであるときは後人はこれを襲用することが屢で、終

に固定して一種の成語が生じた。櫻は花の最も精妙なものと感じから花細しと讃詞を着け、橘は香味の最も優れてゐるので香細しと修飾する。これが成語となつて枕詞といふものの多數が成立した。

甲、相似のものを舉げて比喩的に修飾する。散文に於ては如しといふ特殊の形容詞を用ゐて何々の如きと修飾する代りに、ののすなすじものの如き辭を帶びてゐる五音の語句を被修飾語の上に置く。

(い) さゝ蟹の 蜘蛛 ぬば玉の 黒駒

蟬の羽の うすく(情意)若草の 妻

の如く、色でも形でも性質でも状態でもものといふ助詞を用ゐて修飾語とする。

(ろ) 冬木のす 枯木 鶉なす 道ふ(人)

入日なす 隠る 水鴨なす 二人並び

の如くのすなすを用ゐて修飾する。のすは古形で用例が少く、なすは多く用ゐられた。ものなも似も同原と考へられる。

(は) 鹿兒じもの 唯一人 馬じもの 縄取附け(人に)

犬じもの 道に臥し

の如く動物の動作や状態を人間の上に喩へて修飾語とする。じものは^{さまの}状之の義といふ。

(に) かきつばた 匂へる妹 夏衣 うすく(人情)

眞木柱 太き心

の如く、助詞を用ゐないで比喩的に修飾する。

乙、人の徳をたゝへたり、物の質を褒めたりする爲に、形容詞や動詞を修飾語となすやうに、五音から成る成語を用ゐる。

(い) 八隅しゝ 我大君 高光る 日の皇子

玉ちはふ 神 ちはやぶる 神又人

の如く、大抵動詞を末にもつ五音の成語を名の詞に冠らせて修飾する。

(ろ) 花ぐはし 櫻 香ぐはし 花橘

名ぐはし 吉野 いす細し 鯨

の如く、くはしといふ形容詞を末にもつ五音の語で修飾する賞詞である。
丙、汎稱の語を置いて殊稱の語を修飾する。

庭つ鳥 かけ 野つ鳥 雉子

鳥つ鳥 鶉 沖つ鳥 かも

の如く、雞雉子、鶉、鴨を云ひあらはす爲に、それらが屬してゐる大きな種類をまづ擧げて修飾としたと見做される。古に於ては人の目に入る鳥も少く、家禽としては鶏が代表し、野禽としては雉子が代表してゐたやうに思惟されてゐたので、斯ういふ修飾語を置き、次の小さい名稱を引出すやうにした。殊語の方を主としていへば一種の修飾法と取扱ふべきである。

丁、兼詞を利用した聯想的の修飾語もある。これらは修辭學上から説くべきであるが、一面からいふと、同音異義語を利用したり、またはそれを基點として發展させたものとも説き得られる。例へば「天飛ぶや、か」といふ連續した語句の中のかるを、鳧の一種の名と見るときは、天飛ぶやはその修飾語である。然るにこのかるを大和の輕といふ地名に用ゐたとすると、天飛ぶやとの關係は直接には説けなくなる。これを説明するにはどうしても一旦は同義語の鳧の名に復して説かねばならぬ。「青柳のいと」といふ連續に於ても、いとを絲の義にとれば一方は修飾語として取扱はれるが、いとを副詞の最の義に用ゐたとすれば最と青柳のとの關係は直接には説かれない。斯ういふ聯想的の修飾語は文法と修辭學と兩面から説かなければならぬ。

和歌にはこの同音異義語から出發し更に展開させた聯想的の修飾語が澤山に使用されてゐる。例へば

ともし火の 明石の浦 (一)

うみ苧なす 長柄の宮 (二)

たかゆくや 隼別命 (三)

眞髪ふる 櫛名田姫 (四)

焼太刀を 礪波の關 (五)

我妹子に 逢阪山 (六)

をとめ子が 袖布留山 (七)

等に於て、(一)は燈火の明るいといふを地名の明石にうつしたもので、(二)は續み紡いだ苧は長いといふを宮の名にうつしたもので、續み苧^ひ如すは宮そのものには關係がないが、名の一部份の長といふ語の修飾語である。(三)の高行くは高く飛ぶことで、隼の動作を修飾したもの、固より皇子の名全體には關係はない。(四)の眞髪ふるは髪を梳くことで、櫛の使用の目的を擧げて修飾とし、櫛の同音異義語の奇^くにかけたもの。(五)は焼太刀をとぐといふとの音からその音を頭にもつ地名に、(六)は我妹子に逢ふといふ

より逢ふを頭にもつてゐる逢阪山に、(七)は乙女子が袖を振るといふより大和の布留^{ふる}山にうつしたもので、袖といふ語を隔てゝ連續してある。

以上は技巧的のものであるが、一面からいへば(三)は装用語として、(二)(三)(四)は装體語として(五)(六)(七)は對象語のやうな状態に置かれた特殊の修飾語と見做される。さうして修飾される語の頭には修飾語をことわる述語またはその一部分を含んでゐるとの思念から連接されてゐる。

一體短歌は小さな形であるに、中古の歌人は多くのことを含ませやうとし、兼詞を用ゐたが、更にそれと結合した語を別の用に充てるといふ如く、二重三重に複雑にあらはす法を用ゐた。それらは一々分析して文法上の關係を考察すべきである。

別るれば人に心をつくし櫛

さして逢ふべき方を知らねば (拾遺集)

のつくし櫛は一方では上の「人に心を」の對象語に對しつくすといふ述語となり、更に櫛と結合し、他方では下位の「さして」といふ動詞の對象語となつてゐる。さうして筑紫櫛といふ中にもクシの音を反覆して音調の美をもたせてゐる。音調美のことは文法上の範圍外であるが、一語で述語や對象語を兼ね、文法上の二重奏をなしてゐる。

音に聞く人に心をつくば嶺の見ねども思ふ思はんや君 (拾遺集)

のつくばねは上の「心」に對しては付くといふ述語の用をなし、下のみねに對しては修飾語の用をなし、みねは嶺の意から同音の見ねの意に轉じさせてゐる。見ねどもと筑波嶺のとの間には直接の關係はないが、つくばねのは文法上二重奏三重奏をなしてゐる。

立ちわかれいなばの山の峯におふる松とし聞かば今かへり來む (古今集)

のいなばは往なばと因幡との兼詞であつて、上に對しては往なばといふ述語の用をなし、下の詞に對しては國名を示す修飾語となつてゐる。更に因幡の山の峯におふるは松の修飾語である。而してまつはまた兼詞で、松と待つとの義を兼ねてゐる。

松は因幡の山の峯におふるの被修飾語であるが、待つは聞かばの對象語である。待つと因幡の山の峯に生ふるとは別に直接の關係はない。一首の主旨は「待つとし聞かば今かへり來む」の末二句にあるが、都の友に立別れ因幡の守となつて赴任するとの作であるから、唯無意味の序ではない。從來の歌學者が唱へた有・心・の・序である。君なくてよるかたもなき青柳のいとゞ浮世に思ひみだるゝ (新古今集)

の青柳のは絲の修飾語であるが、いととは絲・最いとと同音異義語であるから、最・最いとのつゞま

つたいとゞにうつしたのである。いとゞは思ひみだるるを修飾してゐる副詞であるが、青柳のには直接關係はない。青柳のもいとゞ浮世に思ひ亂るゝ」といふ一首の主旨には直接の連絡はない。而して第一第二句はなきといふ語尾で連結してゐるから、第三句の修飾部のやうに見えるが、意義上の關聯は緊密に存してゐない。唯よるといふ動詞は依るの義であるが、また榎^て手にの同音異義語である。こゝも兼詞に使つたのであつて、依るの義にとれば第一第二句第四句第五句主旨の原因をあげたものとして有意義であり、榎の義にとれば第二句第三句と連結し、第四五句の絲亂ると連絡がある。併しこの絲といひ、榎といひ、亂るといふは縁語上の連絡であつて技巧に關する副次的のものである。縁語は相關の語を配置するもので表現が流暢になるが、文法上直接に取扱ふべき對象ではない。

第五、和歌は緊張した表現をなす爲に感動體を用ゐることが多い。ゑかもはやかな等の感嘆詞を以て止めたものが多く、その中には主として歌に用ゐられるものと文にも用ゐられるものとの別がある。

山の端にあぢむら騷ぎ行くめれど

我はさぶしゑ君にしあらねば

(日本紀)

のゑの如きは古い形であつて、文にはあまり用ゐない。

大海の磯もとゞろに寄る浪の

われて碎けて裂けて散るかも

(金槐集)

の如く、かもは強い感嘆に用ゐ、奈良朝以前に多く使用し、後世には擬古詞を好む人ばかりこれを用ゐ、かながひろく使用されるやうになつた。かもに反語又は疑問に用ゐるものもあるが、それはかにその義があつてもは歎辭として添へてあるのである。文の末尾以外にあるかもは感嘆を示さないのが常である。

足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を

ひとりかも寝む

(百人一首)

の如きもそれである。「誰をかも知る人にせむ」のかもも同様である。

をとめの床のへに吾が置きし劍の太刀はや (古事記)

のはやの如きは文にも用ゐるが、和歌に於ては修飾語を具した體言に添へ、述語の動詞を用ゐないでとちめとなるものが多い。

君こそずて年は暮れにき

立歸り春さへけふになりけるかな

(後撰集)

のけるかなの如きはけるとかなとが連結して感嘆を示してゐる。文にも多少は用例を見るが、歌の多きとは比較が出来ない。香川景樹の如きは特にこれを好んで用ゐた。

直き木に曲れる枝もあるものを

毛を吹き疵をいふがわりなさ

(後撰集)

秋風にたなびく雲のたえまより

もれ出づる月の影のさやけさ

(新古今集)

の如く歌にはの又がの係に對し、形容詞の語幹にさの辭を加へて結びとする習である。文には多く用例を見ない。

第六、力強く緊張した表現をなす爲に語句を倒裝することは散文にも少くないが、和歌には特にそれが多い。音數に定限があり、句に五七等のリズムを具へねばならぬ必要から、散文とは異なつた排列を餘儀なくさせる。随つて短歌の句切れや排列の種々相が生じる。

(一)第四句で意義切れ、その上にあるべき句が第五句に置かれるもの。

萬代に語りつげとしこの嶺に

領巾ふりけらし『松浦佐用姫（二）

（萬葉集）

潮早み磯回到に居れば

漁する蟹とや見らむ『旅ゆく我を（三）

（同）

駒の音のとゞともすれば

松蔭に出でてぞ見つる『もしも君かと（三）

（同）

古にこふらむ鳥は郭公

けだしや鳴きし『我が戀ふること（四）

（同）

山の端にあち群さわぎゆくなれど

我はさぶしゑ『君にしあらねば（五）

（日本紀）

（二）は主語が、（三）は對象部が、（四）は裝用語部が、（五）は確定條件節が第五句へ置かれ、いづれも第四句へかゝるのである。これは古廣く行はれた形である。

（二）意義が第二句で斷止し、上にあるべき句が第三第四第五句に置かれたもの。

折りて見ば落ちぞしぬべき『

秋萩の枝もたわゝに置ける白露（六）

（古今集）

誰れしかもとめて折りつる『

春霞立ちかくすらん山の櫻を（七）

（古今集）

我のみや燃えて消えなん＝

世と共に思ひもならぬ富士の嶺のごと（八）

（後撰集）

残りなく散るぞめでたき＝

櫻花ありて世の中はての憂ければ（九）

（古今集）

（六）は主部、（七）は対象部、（八）は装用の修飾部、（九）は確定條件節が、斷止した第二句の下に第三第四第五と置かれたものである。

（三）意義が第三句で斷止し、その上にあるべき語句の第四第五句に置かれたもの。

心さへむすぶの神やつくりけむ＝

とくるけしきの君に見えぬは（一〇）

（詞華集）

くれなるのこぞめの衣うへに着む＝

戀の涙の色やかはると（一一）

（同）

白菊のかはらぬ色もたのまれず＝

うつろはで止む秋しなければ（一二）

（同）

（一〇）は主部、（一二）は対象部、（三）は確定條件節が第四第五句に置かれてある。

(四)意義が第一句で斷止し、その上にあるべき語句が下に置かれるもの。

明けぬるか『川瀬の霧のたえぐ』に

遠方人の袖の見ゆるは (一三)

(金葉集)

知るらめや『木の葉ふりしく谷水の

岩間にもらす下の心を (一四)

(新古今集)

聞くやいかに『うはの空なる風だにも

松に音する習ありとは (一五)

(同)

消えねたゞ『忍ぶの山の嶺の雲

かゝる心の跡もなきまで (一六)

(同)

歎かずよ『今はた同じ名取川

瀬々の埋木朽ちはてぬとも (一七)

(同)

(二三)は主部、(二四)(二五)は対象部、(二六)は装用の修飾部、(二七)は假定條件節をそれぐ
第二句以下に置いてある。

以上の轉置は

一二三五四——第四句切

三四五一二―第二句切

四五一二三―第三句切

二三四五一―第一句切

の四つであるが、この他にも種々な倒置がある。

今ぞ知る苦しきものと

人待たむ里をば枯れすとふべかりける

(後拾遺集)

の如きは第二句で切るべく、二一、三四五の排置である。苦しきものとの下に休止を入れないと意義が混亂に陥る。

散るまでは旅寝をせなむ木のもとに

歸らば花の名立てなるべし

(同)

の如きは第三句で斷止しそこで休止をなすべく、一三二、四五の排置である。

吹く風をなきて恨よ鶯は

我やは花に手だに觸れたる

(古今集)

の如きは三一、二四五といふ順序であるべく、第三句の鶯はで切るべく、二句の終は小休止となる。

誰とてか「荒れたる宿といひながら

月より外の人を入れるべき

(後拾遺集)

の如きは二三・一四五と次第して見るべきである。

世の中は夢かうつゝか

うつゝとも夢とも知らず。ありてなければ

(古今集)

の如きは四句の歌に理由をいふ一句を添へたとも見られるが、五句の歌としては一・二・五・三四と順序して考ふべきであらう。

忘れては夢かと思ふ

思ひきや、雪ふみ分けて君を見むとは

(伊勢物語)

の如きは一二・四五三と轉置されてある。

いかならむこよひの雨に常夏の

けさだに露のおもげなりつる

(後拾遺集)

の如きは一句で切れてゐるが、三・二・一・四五と次第して見るべきである。

たねづね來ていかにあはれとながむらむ

跡なき山の峯の白雲

(新古今集)

の如きは五句の末にをを略した形で、一四五二三と次第して見るべく、

ことわりやいかでか鹿の鳴かざらむ

こよひばかりの命とおもへば

(後拾遺集)

の如きは四五二三、一と並べ換へて見るべきである。

とへかしな幾日もあらし露の身を

しばしも言の葉にやかゝると

(後拾遺集)

の如きは四五三一と切つて次に二を置いて順に見るべきである。

つらきかなうつろふまでに

八重櫻とへともいはで過ぐる心は

(新古今集)

の如きは三二四五一と次第して見るべきである。この他五また七の句の中間で切つて倒置したのも少くない。

玉藻刈る敏馬を過ぎて

夏草の野鳥が崎にいほりす我は

(萬葉集)

の如きは第五句の中で「我は庵す」といふを轉置してある。

はらひかねさこそは露の繁からめ

やどるか月の袖のせばきに

(新古今集)

の如きは四五と倒置したばかりでなく、第四句は月の宿るかといふを「宿るか月の」と轉置してある。

我ながら思ふか物を

とばかりに袖にしぐるる、庭の松風

(新古今集)

の如きは第二句で「物を思ふか」といふべきを「思ふか物を」と轉置してある。

聞くやいかに、うはの空なる風だにも

松に音する習ありとは

(新古今集)

の如きは二三四五一と排列し、第一句に於ては「いかに聞くや」を倒装してある。句の轉換と一句中の中の倒装と二つを兼ねたものもあつて、散文とは異り各種の倒装の著しいことが分る。

第七句の斷止に就ては散文と同様なるべきも、轉倒法を用ゐることが多く、且は音數の制限があるので、述語を省いたり、その一部を略し、或は名詞で止めるものが少くない。

おしなべて花は櫻になしはてゝ

散るてふことの無からましかば

(續後撰集)

の如きは判定をあらはすべき述語の全部を略したもので、散文にも時々見るが歌には特に多い。

うちはへて苦しきものは人目のみ

しのぶの浦の蜃のたく繩

(新古今集)

の如きは拷繩の下に助詞を省いた例である。

年經たる宇治の橋守こととはむ

いく世になりぬ水のみなかみ

(新古今集)

の如きは句の倒装によつて體言止めとなつたもの。

あすよりは志賀の花園稀に來て誰かはとはむ

春のふるさと

(新古今集)

の如きは第五句がとはむにかゝるやうであるが、上の四句で歌意が一通り了つてゐる。それを第二句の反覆する形を少しかへて再び出したものである。

ともすれば花にまがひて散る雪に

梅が香さむき二月の空

(六帖詠藻)

の如き全首が修飾語を加へた一つの體言のやうに感動體にあらはすものが多く、體言止まりの形になつてゐる。少數の歌人に由つて企てられた小刻みに終止形をとるものもある。

美まし『さも我胸のさわぐかな』

(和泉式部集)

いかなる人の身かは動かぬ』
いかにせん『いかにかすべき』

世の中を背けば悲し『住めばすみうし

(玉葉集)

この頃の鴛のうき寢ぞあはれなる』

上毛の霜よ『下の氷よ』

(千載集)

の如きは各部が十分の終止をなし、意味も明かであるが、語の省略から、各部の連鎖が十分でなく、文法上殆ど遊離したやうに置かれたものが少くない。

これ聞かむ『巨勢のさ山の杉が上に雨もしみみに

くきら啼くなり

(散本棄歌集)

の如き第一句は一つの叙述となつてゐて、第二句以下とは文法上の直接の關係はない。

第八、助動詞助詞の慣用にも散文とは多少異なるものがある。強意を示すなんの如きは歌には一首の外用例がないくらゐである。

第二章 俳句の文法

俳句は十七音から成る國民文學であつて、江戸時代に榮えたばかりでなく、現今に於ても盛に行はれてゐる。我が韻文に於ける最短詩で而も多くの内容をもち、一首の和歌乃至は一篇の小品文にも匹敵する程豊かな含蓄ある詩想をこめたものであらねばならぬ點から、その表現に非常な緊張味を具すべく、特殊な語法が或立してゐる。第一には語句の省略といふことである。述語の一部分を略する如きは

早稻の香を分け入る右は有磯海

芭蕉

等一々擧げられない。これはなりを略したことは云ふまでもない。全部を略するものも少くない。

狂亂の稽古の中に時鳥

丈草

の如きは鳴くの述語を略してある。

野の梅や折らむとすれば牛の聲

鳴雪

の如きは爲るとか聞ゆの如き述語を省いてある。言語を示す助辭も擧げてない。次には主語の如きも理解されるかぎりは省略するものが少くない。

送られつ送りつ果は木曾の秋

芭蕉

の如きは主客共に點出されてないが述語でそれが自ら分る。

時雨けり走りけり晴れにけり

惟然

の如き三つの述語にいづれも主語は擧げてないが、理解は出来る。

吹倒す起る吹かるゝ案山子かな

太祇

の如きは主語も對象語も擧げてないが、述語の姿によつて曉られる。即ち風が吹き倒す。私がそれを起す。案山子がまた風に吹かれることはつきりと理解される。

次に内容を豊富にする爲に出来るだけ形式語を除き、概念語を連ね、聯想によりて結合させることである。

梅なづな・鞠子の宿のころゝ汁

芭蕉

の如き、鞠子・驛頭の景物や名物を臚列するだけで、一つの動詞も形容詞も用ゐてない。

大夫櫻・大鼓熊谷・笛敦盛

可遊

の如きも主語・對象語とを三つ連ねてあるだけで、

目に青葉・山時鳥・初鰹魚

素堂

の如きは目に青葉の句により、次に耳に山時鳥、口に初鰹魚をと初夏に於ける快適のものゝを連ねた名句で、一の用言をも著けてない。感情提示の素材のみを並べ主観的述語を省いてある。

次に内容を豊富にし表出を緊張させる爲に句を小刻みに切りて仕立てることである。これが爲に切字を用ゐ來つた。この切字といふはかなけりなりや等の助動詞・助詞及動詞・形容詞の終止となる形をいふ。この他に名詞で切るものもある。前に挙げた素堂の句は山時鳥でも初鰹魚でも切れてゐる。これらは普通の文と異なるところである。この切字等によりて、僅々十七音から成る句が、二つ三つ四つに切れたものさへある。よりて二段切・三段切・四段切となつてゐるものがある。

冬近し、時雨の雲もこゝよりぞ

芭蕉

の如きは二段切で、

文もなし、口上もなし、粽五把

嵐雪

の如きは三段切で、

柳散り、清水涸れ、石ところ／＼

蕉村

元朝や、一系の天子、富士の山

鳴雪

の如きも同じく三段切で

梅雨晴れや、水の面、野の面、寺の屋根

季風

の如きは四段切で、

水涸れて、夢かあらぬか、蕎麥か否か

蕪村

の如きは五段切に見る人さへある。此の如く、小さく切することは他の文には比較すべきものがない。而して小刻みにするにつけ、ある語の如きは遊離するが如きものもあるが、それは配合により聯想によりて統制を有つてゐる。

俳句には切る切らぬといふ上に重きを置く。中にもかなけりたり等を用ゐて斷止する場合は紛れないが、係がなくて、動詞形容詞で體言に連る語尾で斷止し、その直下に別の名詞を置くことが多く、下の名詞の修飾語と混じ易い表現を用ゐる。例へば

蜻蛉や狂ひしづまる三日の月

其角

さゝれ蟹足はひ上る清水かな

芭蕉

に於て靜まるは三日の月の修飾でなく、追ひ上るも清水かなの修飾でない。そこで

斷止してゐる。かう云ふ類は歌や他の散文には用ゐない。かゝる場合には主語を補つて見るべきである。て又にての助詞は斷止にならないのが一般の文法上の定まりであるが、俳句にはそこで休止をするものがある。

唐崎の松は花より臍にて

芭蕉

の如きは餘韻があるやうに言さして半途で留めてある。これは句末であるが、句中に於てもさういふ類がある。

田一枚植ゑて立去る柳かな

芭蕉

の如きは立去るで斷止するばかりでなく、植ゑてで切らなくては意味をなさぬ。清水の流れるほとりの柳に見とれ、早乙女の田一區植ゑてさて後作者が立去る意である。これらは中心が一つでなく動もすれば統制を缺き易いが俳句には往々見る姿である。

月の雨、團子を喰うて將棋かな

の如きも喰うての主語は雨ではなく喰ふ人を補はなくてはならぬ。而して將棋かなとの間には小さい斷止がなくては叙述の相が揃はない。

またやといふ切字を用ゐ、ある客觀を句はせ、次にその叙述をなすことが多い。

古池や蛙とびこむ水の音

芭蕉

夏草やつはものどもが夢の跡

同

春や今水に影ゆく鳥と雲

去來

朝霧や打つ杭の音丁々たり

蕪村

に於ける如く。さうして名詞で叙述するものが多い。また主觀的の語を提出し助詞やを加へ、その下に名詞で叙述したものもないではない。

また緊張した表現をなす爲に同じ語句を疊み重ねる。これは文にも歌にも存することであるが、俳句には別趣のものがある。

見渡せば詠れば見れば須磨の秋

(一)

芭蕉

青し青し若菜は青し雪の原

(二)

來山

蟬あつしはや蟬涼し蟬かなし

(三)

蕪村

梅柳さぞ若衆かな女かな

(四)

芭蕉

いろ／＼よ花よ園子よ上戸や下戸

(五)

西友

に於けるが如く、主語を反覆したり(三)、呼格を反覆したり(五)、述語を反覆したり(三)、條件句を反覆したり(一)、述語の助詞を反覆したりする。(四)而して同音を並べて聲調を整

へることが多い。例へば次の例のやうに。

名月や海も思はず、山も見ず

(六)

去來

山蔭や、菜の花咲きぬ、春過ぎぬ

(七)

大魯

起きて見つ、寝て見つ、蚊帳の廣さ哉

(八)

千代尼

俳句には句に生氣あらしめる爲呼格を用ゐることが多く、且音數の關係から助詞よを加へないものが少くない。

雀の子、そのけ／＼御馬が通る

(九)

一茶

花の雲、鐘は上野か淺草か

(一〇)

芭蕉

納豆きる音しばし待て鉢叩き

(一一)

同

ほろ／＼と山吹散るか瀧の音

(一二)

同

(九)の如きは正しき呼格なれど、(一〇)の花の雲は雀の子と同じく呼格とは見られないで、提示語のやうにも考へられる。(一二)の鉢叩は呼格とするも待ては別の人に呼びかけた命令である。(一二)の瀧の音は普通の呼格でない。下にする提示語とも云へない。これらは普通文法にはない一種で、聯想的のものである。随つてこれを相關的呼格といふか、配合的呼格といふ名に従ふか、或は別の名稱を立てるか未定で

ある。而してそれらの中には語と見るべきか、文と見るべきか、いづれとも見られる類が多い。

尙俳句には音數の關係から修飾形に用ゐる動詞の語尾の一音を略したものが少くない。これは中古文法に照せば破格であるが、俳句としては認めねばならぬ。

ほとゝぎす横たふ聲や水の上

芭蕉

頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲

同

一本の梅に遅速を愛すかな

蕪村

に於ける横たふ死ぬ愛すはいづれもるの語尾を缺いである。

俳句は民衆化といふ點から口語法をとり入れた句が少くない。二段活の動詞を一段活の口語であらはしたものがあつた。昔存在しなかつた新活用を用ゐたものもある。

秋を経て蝶もなめるや菊の露

芭蕉

麥蔴や百まで生きる貌ばかり

蕪村

殘暑しばし手毎にれうれ瓜茄子

芭蕉

助動詞むの連續上うとなり、助動詞たりのは行の動詞に結びてふたるとなつたも

の爲の打消の「せず」のせいでとなつたもの、動詞のみの語尾にんの添ひてんでとなつたものなるたるの略されたものもある。

吉野にて櫻見せうぞ、檜木笠

芭蕉

たかしむろ鯨食ふたる坊主かな

同

そよりともせいで秋立つ事かいの

鬼貫

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

芭蕉

化さうな傘かす寺の夕時雨

蕉村

瓜の皮むいたところや蓮臺野

芭蕉

に於けるが如し。

條件を示すならばたればのばを省いたもの、指定のなりをじやといふもの、にてでといふもの、にといふもの、にといふもの、やらむをやらといふもの、禁止の助詞なの接續の異なつたもの等が見られる。特に口語を好んで用ゐた鬼貫や惟然の輩の作にはそれが特に多い。

我子なら供にはやらじ夜の書

とめ

朝貌やだまつて居たら天窓へも

一茶

涼まうか星崎とやらさて何處じや

惟然

蕎麥はまだ花でもてなす山路かな

芭蕉

鰻汁や鯛もあるのに無分別

同

我に似な二つに割れし眞桑瓜

同

餘韻をあらしめる方法として述語を中止法にて收束することも俳句に於ける表現の一形式であるが、古い句にはさほど多くはない。現代の俳士はこれを好むものが少くない。

湯の山へあやめあやめが咲き上り

亞浪

梅をちこち南すべく北すべく

燕村

酢をおす石上に詩を題すべく

燕村

これが川柳になつては最も重要な表現形式となつた。

居候三杯目にはそつと出し

井端で身振りがすぎて下女すべり

源左衛門甲を着ると犬が吠え

等に於けるが如し

俳句にも係結法は屢用ゐられてゐるが、音數の制限や古い格を破らうとする試みなど、中古の文法に合しないものも時に見る。

南無佛草のうてなも涼しけれ

芭蕉

更衣母なむ藤原氏なりけり

燕村

朴の木の花こそ白し晝の雨

瓶一

窓下の打つ田の音や石多し

雷鳴

の如きはそれであつて、こそぞなむやの係を置きながら、はもなどの結びと同じく尋常の終止形を以て收束し、或はこそその係がなくて、形容詞の確定條件形で結ぶが如きものが時々見られるが、これらは定法とは出来ない。

第三篇 品詞論

第一章 名詞

國語に於ける名詞は本邦固有のものと支那または西洋より傳來したものとを問はず、性や格や數の如何によりて語形を變ずることはない。特にそれを指すときには、この、その等の指詞を名詞の頭に加へて區別はするが、歐印語の如く冠詞はない。性に關しても人倫には父母夫妻兄弟姊妹祖父母伯父叔母從兄從妹爺嫗等男女兩性を分つ語が存在し、動植物にも雌雄の如く男女兩性を區別する語があるが、無生物にはこれらの別はない。格に於てもがのにを等の助詞を名詞に添へるだけである。數に關しても必要ある時に限りて、名詞の上または下に數詞を加へて精細に示し、また單に多數を示すには附加辭を名詞の下に加へたり、語によりては人々、國々、所々、品々の如く國語を重疊したり、諸とかもろとか衆の如き語を名詞の上に結合してあらはすが、疊語や複合語は慣用があつて汎くいづれの名詞にも適用されぬ。而していづれにしても名詞の語形は變らない。多數を示す附加辭にはども、たち、ども、なみ、が

た、輩等がある。

ども 人にも物にも用ゐる。子供、ものども、車ども。

たち 人に限る。親たち、君たち、御たち。

どち 人動物に用ゐる。友ども、思ふども、犬ども。

ばら * 人に限る。數稱には用ゐない。殿ばら、法師ばら、奴ばら。

なみ * 吾なみの如く慣用に限がある。漢字にては吾儕と書き、誰稱に用ゐる。

がた 皇族がた、殿方、皆様方、御婦人方の如く敬稱に用ゐる。

輩 吾輩、汝輩の如く代名詞につける。

ら 子ら、少女ら、人ら、家らの如くひろく用ゐる。

(* 卽は古語)

元來名詞は語尾變化しないものであるが本來の語が、二つ結合して複合語を作るに方りて、連聲の音便に由り、上位の語の末の音の變化するものがある。例へば

酒屋 さかや、 風上 かざかみ、 舟乗 ふなのり、

上部 うはべ、 雨水 あまみづ、 冷水 ひやみづ、

荒波 あらなみ、 聲色 こわいろ、

といふが如く、いづれも五十音のエ列の音がア列の音に轉じゆくのである。漢字ばかりで記すときはその變化があらはされないが、假名書きにするとときは轉じたまゝに記すべきである。

また本來の二名詞が連結するに方り、下位の語頭の音がか行さ行た行は行から成るときは、濁音に轉することである。例へば

山川 やまがは、釣竿 つりざを、目高 めだか、

梅鉢 うめばち、舟人 ふなびと、

と呼ぶがやうである。これらの連濁音は從來假名書きの場合にも濁音符を加へない慣例であつたが、今後はなるべく加へるを善しとする。以上連濁の場合には上下の二語が渾然一體となるのであつて、二者別々とならない。もし山川をやまかはと清みて呼ぶときは山と川と二つのものとなり、やまがはと濁りてよむときは山の間を流れる川の義となる。舟人の如きも清みて呼べば舟と人と二つになる。ふなびとは轉音と連濁とを兼ねてゐる。

漢語にて組立てたる複合名詞には君臣とか父子とかの如く上下相對するものと、盛徳とか鴻業とかいふ如き上位の語が下位の語を修飾するものとの二種がある。

支那語では動詞と見るべき研究、蒐集、發布、獎勵とかいふが如きは國文にてはこれを動詞と見倣さないで、一つの名詞として扱ひ、これに爲^すといふ動詞の結合したものは動詞として取扱ふべきである。

名詞は他の名詞と直接に結合するばかりでなく、助詞を介して他の名詞と結合する。例へば

月の世界、天つ神、君が代

に於けるが如し。中には使用が古く用例が極めて少く、かはつほどにはないが、これも制限がある。一般にひろく用ゐられるのはのである。こののがつの介助により上下の語は合して一團となるのである。(尙くだもの、けだもの、のだ及みなとのなどの如きも、語原的にいへばつ及のと相通するものがあるが、その用例は極めて少い。)がとの區別に關しがは上の語に重きを置き、のは下の語に重きを置くと説くものもあるが必ずしもさうでない。

東の空、後の山、左の道、端の家

の如きは上位の名詞は下位の名詞を修飾するものと見られ、下の語が複合語の中心である如き語感をもつてゐるが、

坂の下、驛の前、町のはづれ、水の中

の如きは上位の名詞が主で、下位の名詞はそれを制限するが如き語感をもつてゐる。一つの助詞でその差別を示すといふよりは上下の語の一つ一つが吾等の心に映する感から來たもので、心理上の差別に由ると見るべきであらう。以上の名詞を連結する助詞の中、用例の少きものは古く、多きは新しい。(試にいへば、がは入鼻音となればなに通ひ、なからのに轉じたもの。またくだもののだとなとも變轉の脈絡があるやうである。)

名詞を構成及職能により細かに分類することは從來行はれて來たが、邦語にてはさほどの必要はない。まづ成立上から本・來・轉・成の別を立てることがある。味はひは動詞から、芥は辛しといふ形容詞から、あはれは感嘆詞から轉成したもの、天とか地とか人とかは本來のものといふが如きはそれである。名詞は大部分漢字を使用する上から、本來のものはそのまゝでよいが、轉成のものには送假名を附けるか否かといふ實際上の問題が生じて來る。送假名のことは後にいふ。

次に普通名詞・固有名詞の別を設けるが、外國文典のやうに必要なものでもない。前者は汎稱で後者は殊稱である。花が咲くの花は普通名詞であるが、人の名に附け

たものは固有名詞である。大閤や黃門は官名などで本來は普通名詞であるが、豊臣秀吉や徳川光圀の別名の如く用ゐられた時には固有名詞に轉じたものと見なくてはならぬ。あながち適用上の廣狹によりて區別も出來ない。源平藤橘四姓は人名の如く固有名詞であるが、源氏には清和、宇多、村上の諸流がある。武藤、内藤、佐藤、甲藤は藤原の流である。日や月や一つしかなくても固有名詞ではなく、八幡宮や天神様は所々に祀つてあるが普通名詞ではない。仔細に論ずると分りにくいものが少くない。併し國語では固有と普通とで形體に少しの變りもない、記載の上にも一方を大きく書くとか小さく記すこともない。唯漢文を読むときには、古人は朱で漢字の右側や左側に單縦線や複縦線を加へ、固有名詞中の人名官名年號地名を區別したが、今は一般には用ゐない。唯外國の地名人名の如き固有名詞を假名書きにするときは線を施したり勾「」を加へたりして混雜を防いでゐる。假名を用ゐないで漢字で、英吉利、佛蘭西、華盛頓、奈勃翁など書くのは支那の影響であるが、これらも制限する必要がある。邦人の簡單を好む性質から、外國の地名人名の首の一音に漢字を宛て、これに人物市邑に關する語を加へ、桑港、壽府、沙翁など用ゐることも行はれてゐる。斯ういふ記載に就ては尙研究を要する。

第二章 代名詞

代名詞は人事物を指示する詞で、指詞と稱するが適當かと考へられるが、今姑く慣用の廣きに随つて置く。すべて述者を中心とし基準とし、その他のものを定めて指示する。自己のことを自稱といひ、呼びかけられる對手を對稱といひ、説述の上ののぼるものを他稱といふ。我に屬する自稱、汝に屬する對稱は時代により身分により男女によりてその種類は甚だ多いが、他稱には彼れ、あれ、それ等二三の語があるに過ぎない。

自稱にはあ、あれ、わ、われ、まろより、こち、おれ、身ども、手前、それがし、私、拙者、僕、及私の變つたわたし、わたへの類がある。あ、あれ、わ、まろの如きは古代語で、身ども、それがしの如きは近古語である。これらの古語は今多く用ゐられないが、その他は一般に使用されてゐる。

對稱にはみまし、いまし、なむぢ、きむぢ、ぬし、わぎ、み、わどの、そち、おの、し、あなた、君、こなた等がある。中にみまし、いまし、なむぢの如き古代語、わぎ、み、わどのの如き近古語は廢れ、あなた、君、こなた、文語には汝等が今も廣く用ゐられてゐる。

自對他三稱に通じて用ゐられるものにおのれがある。今對稱にこれを用ゐるときは卑稱となるが、古は一つさまに用ゐたかと思はれる。おのれはおのといふ語に等^ちの添ひて轉じたものと覺しく、各をおのもと訓み、おのおのと訓むも同語にて、これも三稱に通じ用ゐる代名詞と見るべく、副詞とするは誤である。みづからといふ語もこれと同じく三稱に用ゐられる。但しこれは近古時代には身分尊き婦人の自稱に用ゐられた。詞の構成上から見ると、副詞のやうであるが、こゝに編すべきかと思はれる。(おのの三稱に通用するは或は三稱の區別がまだ十分に成り立たなかつた時代の遺物と見るべきかも知れぬ。)

事物を指すには述者に近いものをこといひ、これといひ、こちこちらといひ、こなたといひ、こゝといふ。方位場所いづれも同じく、述者に近接しないものをそといひ、それといひ、そちといひ、そなたといひ、そこといふ。離れたものにはかれといひ、あれといひ、かなたといひ、かしこといひ、あしこ、あそこといふ。これによりて近稱・中稱・遠稱の別を立てる。

人、事物、方位、場所のいづれを問はず、その確實でないものを示すものがある。これを不定稱といふ。人には誰古くはた、事物にはいづれ、方位にはいづち、いづら、いづく、

場所にはいづこを用ゐる。現代語には誰をだれといひ、いづれをどれ、いづこはどこを用ゐ、いづち、いづらは用ゐない。いづこととこの間をつなぐいどこも鎌倉時代には行はれてゐたが夙く廢語となつた。これこゝにの如きは以上指示の外、文をも指す。例へば教育勅語の

我が臣民克ク忠ニ克ク孝ニ、億兆心ヲ一ニシテ世々、厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我が國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス。

に於けるコレ及コゝニは單語を受けたのではなく、上文を指してゐる。

大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの

に於けるこれも上文を受けてゐる。(例中のこのは彼の義と云はれてゐる。上のこの音に引かれたものでないとするなら、このとかの共用された時代があつて、その時の名残りかも知れぬ。)

指示のこ、そ、あ、か等に助詞の結合したこのそのあのかのの類はそれと修飾するもので、主語また對象語として用ゐられることは全くない。されば、装體語の中に編入しても宜しい。

その古い形にしがある。古事記に見えてゐるしが花のに於けるし、土佐日記の目には一文字を知らぬものしがのしはそれである。これは夙く廢語になつた。

數詞

數詞は修飾語の條に述べたから茲には省く。

名詞代名詞數詞は體言と總稱し、用言に對する語の一部門をなしてゐる。

第三章 動詞

動詞は動作狀態及存在を示す語であつて、文の述語となり、事を言ひ切り、また複雑な事を言ひあらはす爲の條件を示し、また時には修飾語となる。これら種々の表現をなすには語の末の一部を變へる。これを動詞の語尾變化といふ。今行くといふ動詞につきて見るに、

終止態
尋常のもの 行く 行く (1)
命令のもの 行け 行け (2)

意は切れて詞は半ばであるもの 行き 行き (3)

條件態
假定するとして 行か(ば) 行か(ば) (4)
現實するとして 行け(ども) 行け(ども) (5)
* この他に終止態に助詞ともを
加へて假定條件をあらはす。

修飾態——體言を修飾するもの 行く(人) 行く(人) (6)

の如く、意味によりて語尾が變つてゆく。蓋しそれは區別する爲に自然にさうなつたのである。今これを記憶に便利なやうに五十音圖により排列して見ると、次の如く四段となる。

行 かゝ きこ くこ けこ。

一綴音を父音と子音とに分ち、共通の父音を去つて見ると、ア、イ、ウ、エの四段に變化する。この形式に變化する動詞は頗る多く、全動詞の半數以上に及ぶばかりである。これを第一類の動詞とし、古來四段活用と呼んで來た。而して變化する各語尾に對し記憶の爲にそれぞれ名を附ける。

かゝ 助詞^ばを加へると假定の條件となり、助動詞^ずを加へると否定となり、^むを加へると未來となり、^るを添へると所相となり、^すを添へると使役相となるが、他詞を添へないでは用を達しない。從來これを未然形また將然形と呼んで來たが、假定條件形、未來形、否定形と呼んでも差支ない。

きこ そのまゝで中止形となるが、助動詞^きや^{けり}が加はると過去となり、^{つぬた}りが添はると完了となり、^{けむ}が附くと過去の想像となり、また他の用言と連結しては活用連語を作る。從來これを連用形と稱し來つた。中止形又は連用形と呼ぶ。

く_三 そのまゝで終止形となり、また現在形ともなる。助動詞らむべしめりが加はると推度となり、まじが加はると否定の推度となる。助動ともが加はると假定條件形の一種となる。終止形また斷止形と呼ばれてゐる。

く_三 名詞の上に置かれるときは修飾形となる。體言に連る點から、連體修飾形であるが略して連體形と呼ぶ。行く等四段に活く動詞は終止形と連體形と同一であるが、動詞によりてはその形を異にしてゐるものがある。

ける そのまゝで命令形となる。時によといふ助詞を加へることもあるが、四段活用ではよを加へないのが規範となつてゐる。

ける これにどもばといふ助詞を加へると確定の條件となり、助動詞りが加ると繼續現在となる。從來已然形また既然形と云つて來たが、假定條件形に對比して考察する便宜上から今確定條件形と呼ぶことゝする。以上を圖にして見ると、

假定條件形	連中 用止 形形	終 止 形	連 體 形	確定條件形	命 令 形
否定條件形					
未來形					
行か (むすば)	行き (歸る)	行く	行く (人)	行け (ども)	行け

の如くである。行くと同じ變化をなすものは頗る多い。話すでも勝つでも食ふでも住むでも知るでも行は異なつても同一の語尾變化をなすのである。

以下の表には假定條件形・否定形・未來形は三つを擧げないでその一二を載せる。口語にては行くは次の活用をもつ。

行く (ない) (う)	否定形 未來形	行く (ちがふ)	中止形 連用形	行く	終止形	行く (人)	連體形	行く (なら)	假定條件形	行け (ば)	條件形	行く お行き	命令形
-------------------	------------	-------------	------------	----	-----	-----------	-----	------------	-------	-----------	-----	-----------	-----

文語の四段活は口語では未來を發音のまゝに「行く^ゆこお」とするなら五段活となるが、未來の助動詞むが動詞の語尾かに連るとき、父音の落ちてうとなつたものであるから、矢張四段活とすべしだと主張する説がある。今文語と對照する便宜上それに從つて置く。次に條件形行けばは假定にも確定にも用ゐる。また別に假定條件形には連體形の下にならを加へてもあらはし、中止形の下にてもを加へ逆應の判定を誘起する條件も示す。以下の口語活用圖中には試みに擧げて置く。

以上規則正しい四段活用に類する動詞がある。死ぬ往ぬの二語もその一である。

假定條件形	中止形	終止形	連體形	假定條件形	命令形
死な(ば)	死に	死ぬ	死ぬる(命)	死ぬれ(ども)	死ぬ

の如き活用を有し、連體形と確定條件形とが四段と異なつてゐる。尤も近古以降に於ては死ぬを以て連體形に使うてゐる例もある。從來奈・行・變・格・活・用と呼び、或は六段活用と立てる人もあるが、これに屬する動詞は外にないから、これを四段活用に屬する不規則動詞と扱ふのが便である。

次に有りといふ動詞も四段に活用するが、普通の四段活とは異なる。

假定條件形	中止形	終止形	連體言	確定條件形	命令形
有ら(ば)	有り	有り	ある	あれ(ども)	あれ

の如く、中止形と終止形とが同一であつて、終止形と連體形とは同一でない。随つて助動詞との連結にも他の四段活の終止形の下に連るべきものは連體形の下に連る差がある。これと同じ活きをしてゐるものは居り、侍り、いまそかりの三語しかない

ので、從來これを良・行・變・格・活・用と稱へて來たが、一派の學者から形容動詞と呼ばれてゐるものゝ全部が

善かり、惡しかり、然かり、盛なり、凜々たり

等悉くこれと同一の活用をなすが故に、變格と稱するのは不適當である。而して他の一切の動詞はいづれも動作状態を示すのに、この一類は存在を示すのであるから、存在性の四段活用と命名する。世には動作詞存在詞と相對的に立てる人もあるが、四段に攝するのが便がある。

次に生きるといふ動詞は口語では

否定形	中止形	終止形	連體形	假定條件形	條件形	命令形
生き(ない)	生き(て)	生きる	生きる(力)	生きる(なら)	生きれ(ば)	生き(よ)

の如くきの一段に^レ及^レその他の詞辭が添ひて種々の表現をなしてゐる。文語にては

否定形 假定條件形	中止形 連用形	終止形	連體形	確定條件形	命令形
生き(ばず)	生き(て)	生く	生くる	生くれ(ばも)	生き(よ)

の如く變化する。これはるれまでを語尾の變化も見れば、

Ki, Ku, Kuru, Kure

となり、別種の四段活であるが、從來るれは尾辭とか複語尾と見做し、切りはなして考へ、二段活と呼んで來たので、今姑くその稱を襲用する。かくて文語の二段活用は口語では一段活用となつてゐる。

次に受けるといふ動詞の活用は、口語では

否定形	中止形 連用形	終止形	連體形	假定條件形	條件形	命令形
受け(ない)	受け(て)	受ける	受ける(人)	受ける(なら)	受けれ(ば)	受け(いよ)

の如き活用で一段にるれ及その他の詞辭が添ひて種々の表現をなし、文語にては

假 定 條 件 形	中 止 形	終 止 形	連 體 形	確 定 條 件 形	命 令 形
受(は) け(ず)	受(て)	受く	受くる(人)	受くれ(は) (ども)	受け(よ)

の如く變化する。これもるれまでを語尾變化と見做せば

Ke, Ku, Kuru, Kure,

となり、別種の四段活用となるが、生きるの例に倣ひ、二段活用とする。以上二種の二段活用の中生くの方は五十音圖の第二列のきから始まり、きくと活き、受くの方は第四列のけから始まり、けくと活いてゐるので、便宜上、前者を上二段活用といひ、後者を下二段活用と呼ぶ。四段活用の第一類に對し、これを第二類とする。下二段活用に屬する動詞は四段活用に次ぎて多く、上二段活用は約五十語に過ぎない。

次に着るといふ動詞は口語では次の圖のやうにきの一段にるれの添ひて變化し、文語もこれと同じ活用をなしてゐる。これもるれまでを語尾と見做せば、

Ki, Kim, Kine,

の三段に活用するが、前例によりるれを切り離して、從來一段活用と呼んで來た。

着 (ば ず)	否定 条件形	中止 形	終止 形	連 體形	確定 条件形	命令 形
き(て)			きる	きる(人)	きれ(ば ども)	き(よ)

き (ない ぬ)	否定 形	中止 形	終止 形	連 體形	假定 条件形	条件 形	命令 形
き(て)			きる	きる(人)	きる(なら)	きれ(ば)	き(よ ろ)

前表は文語、後表は口語の圖である。これを動詞の第三類とする。

文語に於ける一段活に屬する語は着る・似る・煮る・乾る・曬る・簀る・見る・射る・鑄る・居る・饅る・率ある・用ゐる・及試みる・鑑みる・顧る・後見る・等十數語に過ぎないが、口語に於てはこの外文語の上二段活は全部上一段となり、下二段活用もエ列の一段活用となつてゆくので、一段活用は大に殖えて來た。文語の蹴るは從來下一段活用と云はれてゐるが、古くはくゑといひ、上二段活用であつた。口語では四段のやうになつてゐる。

次に爲すといふ動詞を考へて見るに、文語では

假定條件形 否定形	中止形 連用形	終止形	連體形	確定條件形	命令形
せ(ば) ず	し(て)	す	する	すれ(ば) (ども)	せ(よ)

の如くでるれまでを語尾變化と見れば

She, Shi, Su, Suru, Sure,

五段活となるが、るは前例に倣ひて尾辭と見做し、切り離せば三段活用となる。古くはこの活用に屬したのは爲の外おはすだけしか無かつたといふので佐・行・變格と呼んで來たが、欲・す・物・す・閱^ひみ・す・罪・す・嘉^よみ・す・無・み・す・安・ん・す・輕・ん・す・重・ん・す・疎・ん・すの如きもこの活用である。命・ず・信・ず・賀・す・議・すの如く漢字を音のまゝ動詞とするものは皆この活用によるが故に、その類例は年を追うて頗る多くなつて來た。隨つて變格といふ名はふさはしくない。これを第四類の動詞とし、佐・行・三段・活用と呼ぶのが妥當である。この活用に屬する動詞の口語になつたものは種々に分れて變つた語尾變化をとげてゐる。即ち

一、文語と同じく三段に活用するもの

勉強する、出席する

但し終止形は文語のすにるの尾辭が添はりて連體形と同一の形を用ゐる。

二、四段活用となるもの

譯す 議す 略す

三、上二段活用となるもの

信ずる 決する

四、上一段活用となるもの

高じる 判じる 談じる

のやうに。漢字を音のまゝ動詞にするには以上のやうに活用を異にし、關東關西によりても差異がある。まだ分化の行はれてゐる過渡期のものと考へられる。

この活用に似たものに來るがある。口語では次の圖のやうに活用する。

い(ない)	連中止形	終止形	連體形	假定條件形	條件形	命令形
や(ハ)						
くる						
くる(時)						
くる(なら)						
くれ(は)						
い(さ)						

文語に於ても粗々同一の活用をなすが、古文には終止形にるの語尾を取らないで、く

だけである。また命令形にはこだけてよの助詞を添へないものがある。るれも語尾とするならば、

Ko, Ki, Ku, Kuru, Kure,

の五段活用になるが、これも他の例に準じてるれを切り離すせば三段活用となる。これに屬する動詞は來の一語しか無いので、從來これを加・行・變・格と稱へ來つたが、今加・行・三・段・活・用と呼ぶ。

動詞活用の古今

動詞の活用は以上に舉げた種類でつきののであるが、動詞によりては古と今とで活用が變つて來たものがある。道行觸とか[人の耳に怖り]などいふ使ひ様を見ると誤謬のやうにあるが、これらは上代には四段活用であつたのが中世以降下二段活用になつたのである。たとひも中世以降下二段活に使はれるが古くは四段に活いた。用ゐるはわ行上一段活用であるが、中世以降は行上二段に用ゐられた例もある。試みる後見みるは上一段であるが、近世は上二段に用ゐられる傾がある。侍り居りは近世普通の四段に使用するものが多くなつた。恨むの如きは上二段活であるが、これも近世は四段に使ふものが殖えて來た。先年文部省はこれを許容することを認

めた。斯ういふ類はまだ他にもある。

動詞の活用 of 假名遣

四段に活用する行はかさはまらがばの八行、上二段に活用するはかたはまやらわがざだばの十一行、下二段は五十音十行の外、がざだばの四行を合せ十四行、上一段はかなはまやわの六行である。

假名の中あやわの三行、ざだ兩行、はわ兩行、あやわ三行とは行との間には類似の音があつて互に紛れ易い。即ち次のやうである。

あ行	い	う	え	お
は行	ひ	ふ	へ	ほ
や行	い	ゆ	え	ほ
わ行	ゐ	う	ゑ	を
ざ行	ぢ	ず		
だ行	ぢ	づ		

備考。あ行のえとや行のえとは今は區別しない。

◎ 語頭に紛れるもの

・ 語中又語末に紛れるもの

動詞の語尾中紛れ易いものを辨別するには何行何段の活用であるかを知りて類推し、また類音はその少い方を記憶し、他はそれ以外と曉るべきである。イと發音す

るものに就きていへば、や行は老い、悔い、報いの三語、わ行は率ある用ゐるの二語で、他はは行のひと心得べく、中に老い、悔い、報いは終止形にゆを用ゐれば、や行上二段活用であつて、用ゐる率あるはわ行一段活用である。

えゑへの別に就きていへば、ゑはわ行に植ゑ、飢ゑ、据ゑの三語、えはあ行に得の一語、や行に肖え、甘え、癒え、嘶え、おびえ、覺え、消え、聞え、越え、凍え、聳え、冴え、榮え、煮え、費え、冷え、殖え、吠え、見え、燃え等二十語で、これらはえゆと下二段に活くものである。その外はは行四段に活くはひふへのへ、は行下二段に活くへふのへと知るべきである。例へば云へば掃へば等皆へを用ゐる。

うふゆに就きていへば、うと書くべきはあ行及わ行下二段の得、植う、飢う、据うの四語と、てと連りて音便になる場合とであるが、ふと書いてうと讀むのは言ふのふ、考ふのふの類が少くない。それらはは行四段や、は行下二段である。また上二段の強ふの如きは、は行下二段の支ふの如きは、や行下二段の榮ゆなどと混することがあるが、ゆは前に擧げた肖ゆ以下二十語で、他はは行のふと知るべきである。

じずとちづとに就きていへば、辯ず論ずの如きはざ行三段活で、辯せん論せんともいひ、じを用ゐるべく、怖づ、閉づ、恥づ、攀づはは行上二段活で、ぢを用ゐるべく、出づ、撫づ

秀づの如きはだ行下二段で、出で撫で秀でと活きつを用ゐねばならぬことを知るべきである。

第四章 形容詞

形容詞は時間に關係なく事物の性質狀態をあらはす詞であつて、語尾變化をなすものを指す。文の述語となり修飾語ともなることが動詞と同じ様であるから、共に用言の名に攝する。但し命令の形はもた無い。今、強し、正し、同じの三語に就いて見るに、條件形中止形・終止形・連體形を有し、條件形には假定と確定と二つの場合を示す形をもつてゐることは動詞と同様であるが、否定形や所相使役相等は存しない。文語に於けるその活用は次のやうである。

假定條件形	中止形	終止形	連體形	確定條件形
強く(ば) 正しく(ば) 同じく(ば)	強く(て) 正しく(て) 同じく(て)	強し 正し 同じ	強き 正しき 同じき	強けれ(ば) 正しけれ(ば) 同じけれ(ば)

にて強しは *ku, shi, ki, kere*, となる。よりてく活とかくしき活とか呼び、正しは *shiku, shi, shiki, shikere*, と活用するのでしく活とかしくしき活とか呼ばれてゐる。近古以降の文にはこのしく活の終止形に正しゝの如くしを重ねて用ゐるものが時々見られる。これは誤であるが、もしそれを認めるならば、これもく活と一つになるのである。また同じくは從來しく活に攝して來たが、その語尾は *Ziku, Zi, Ziki, Zikere*, と活用するから別にじく活を立てるのが宜しいと信じ、表中に入れた。

中古時代には形容詞の中止形連用形のくしくじくの父音が落ちて早う、うれしう、いみじうなどに於けるが如く、うしうじうと音便を用ゐ、連體形のきしきじきの父音が落ちて、白いもの、苦しいこと等の如くいいじいを用ゐることが流行した。宮廷官女の間にはかどの立つ詞を嫌つた爲であらう。近古時代には善くんば楽しくんばに於けるが如く、假定條件形に「くんば」の如く、んを挟むことも行はれた。現代文にはこれらのいうんの音便は大方行はれない。唯大いなる物、悲しいかなの如き類にいの音便が使用されてゐる。

次に口語にては次の如き活用をなしてゐる。

否定形	中止形	終止形	連體形	假定條件形	條件形
強く(ない) 正しく(ない) 同じく(ない)	強う(て) 正しう(て) 同じう(て)	強い 正しい 同じい	強い(力) 正しい(人) 同じ(人)	強い(なら) 正しい(なら) 同じ(なら)	強けれ(ば) 正しけれ(ば) 同じけれ(ば)

中に連用形は關東地方ではございますの附く場合の外は文語と同じ形をとる。否定形は實は連用形にないといふ形容詞を連結して代用するのであつて、表には假りに載せて置いたのである。随つて否定の助動詞ぬは續くことはない。

形容詞中特異のものに無し及如し等がある。無しは語尾變化の狀は他と異ところはないが、有りの反對で非存在の義をあらはし、如しは確定條件形を缺くばかりでなく、名詞に連るには「花の如く」のやうに助詞のによりて連結し、連體形の動詞に連るには耳の「鳴るが如し」のやうに助詞がによりて連結せられ、いづれも物を比擬するに用ゐられ、また古くは語幹だけで「……するがごと」のやうに中止形にあてたものもある。博多方言には今尙これが残つてゐる。

く活の語幹を重ねるときはしく活に變化するものが多い。長々し、遠々し、白々し

等に於けるが如し。また形容詞の語幹にみといふ辭を加へ、瀬を早み、野をなつかしみの如く動詞を作ることが古文には行はれたが、近古以降は漸く少くなかつた。さうして、なつかしむの如きは四段に活用した例が明かに存してゐるが、筈をあらみの荒み、瀉を無みの無みの如きは他の活用の例が見當らない。恐らくは中止形などの外は十分に發達しなかつたものかと思はれる。

形容詞に時を具せしめやうとするには、その連用形に存在動詞の有りを結合させる。例へば強からむ、強かりき、正しからむ、正しかりき等に於けるやうである。既にこの形にうつしたのものには存在性の四段活と異なることはない。これを形容動詞と呼ぶ。その活用を表にして見ると。次のやうである。

語例	變化	假定條件形	連用形	終止形	連體形	確定條件形
強し		強から(ば)	かり	かり	かる(人)	かれ(ども)
正し		正しから(ば)	しかり	しかり	しかる(人)	しかれ(ども)
甚じ		甚じから(ば)	じかり	じかり	じかる(事)	じかれ(ども)

第五章 助動詞

動詞は他の動詞と連結し、いはゆる活用連語を形づくることは既に述べた。さうして、その結合するに方りては上位の動詞は必ず中止形を用ゐる。「あの道を我はいつも往き還る」の往きに於けるが如し。この場合には中止形といふよりも連用形と呼ぶ方を妥當とする。二動詞の連結されるに方りては、往き還るの如く上下對等の意義を有するものと然らざるものがある。例へば

相成る、さし置く、かき曇る、うち過ぐ、立て直す、

等に於けるあひさし、かきうち、たての如きは、下位の動詞にある趣を添へるだけに過ぎない。その性質からいふと、恰も副詞に似てゐる。これに反して

讀みさす、爲^しおほす、いひしろふ、いひかぬ、取りあへず、

の下位の動詞の如きは上位の動詞の意義を制限する用をなしてゐるが、これを上位に置いて他と結合することは出来ない。また單獨にも用ゐられない。而して個々の意を調べて見ると、さすは動作を半途にする意、おほすは遂ぐる意、しろふは共にする意、かぬは出来がたき意、あへは強ひて爲す意で、それ／＼上位の動詞に或る意義を

添へるがいづれも從屬的である。この從屬的の動詞がもう一步を進めて全く形式語となつたのが助動詞である。

助動詞は叙述の時に關するもの、叙述の法に關するもの、叙述の相に關するものに大別することが出来る。

第一 相に關するものは

能相 これは動詞ひとりであらはし助動詞の力を借らない。

所相 る らる

使役相 す さす しむ

被令相 せらる させらる しめらる

可能相 る らる

境遇相 る らる

であつて、すべてが動詞の假定條件形の下に連り、動詞と同じやうに語尾變化をなす。るらるせらるさせらるしめらるは行下二段に、すさすはさ行下二段に、しむはま行下二段に活用する。中にとすととは四段活の如き第一類の動詞に限り、らるとさすとはその他の動詞に連り、しむは一切の動詞に連る。奈良朝以前にはらるの代り

に忍ばゆ、忘らゆの如くゆらゆといふ助動詞も用ゐられてゐたが、平安朝に至りて夙くも廢つて了つた。所謂、あらゆるの如きはその名残である。而して以上の助動詞は口語に於てはいづれも下一段活用にかはつた。尙らるやさすがさ行三段活に連結するときは、せから續けないでさから續けるものが近世以降の文語に起つて來た。「養育されて」の如きはそれである。口語にはその系統を受けて、推撰される、投票させるの如き形が廣く行はれてゐる。このるるせるさせるしめるはまた夙くより敬稱にも用ゐられてゐる。

以上の中るるるすは口語にも用ゐられるが、しむは全く用ゐられない。但し狂言記にはゆるりと休ましめ「早う行かしめ」の如き例が澤山に見えてゐて、しめはよの助詞の助けを借らないで命令や希望をあらはしてゐる。

第二 叙述の法に關するものは、文語にては

法		肯定	
否定		なり	べし
じ	ざり	ず(ぬね)	
	で		

推度		希望	
まし	べし	まし	たし
らし	めり	まほし	

等であつて、肯定のなりは一般の動詞の連體形に、べしは存在動詞には連體形に、その他の動詞には終止形に連り、否定はすべての動詞の假定條件形に連る。推度はけらしが連用形に連る外は肯定と同じさまに接續し、めりは終止に續くが勝ちめりの如く連用形に續いた異例もある。希望はたしが連用形に、他は假定條件形に連る。但し古文に於てはらむ及べしが上一段活に連るに「雪ふれば花とや見らむ」「我に似べきは誰ならなくに」の如く連用形に續けた類がある。

以上の中、なりざりめりは存在動詞と同じ語尾變化をなす。(但しめりは假定條件形を缺いてゐる。さうして今は多く用ゐない。)べしたしまほしは形容詞と同じ變化をなす。らしはこれと同性質のものであるが、條件形を缺いてゐる。古文には終止形のらしと連體形のらしき外活用諸形が具はつてゐない。けらしはけるとらしとの約まつたものであるが、他の活用の語形は見えない。らむは終止連體兩形

共に同じやうにらむ、確定條件はらめと活用するが、助詞どと連るばかりであつて、ははその下に來ることはない。す及ましは次の如く特別な變化をなす。

假定條件形	中止形連用形	終止形	連體形	確定條件形
す(ば)	す(て)	す	ぬ	ね(ば)

すはまたその間にんを挿入してすんばと音便にてあらはし、すては約まりてでとなる。その他、古代には知らなく、知らにの如き否定形も存在してゐたが、夙く亡んで了つた。

假定條件形	連用形	終止形	連體形	確定條件形
ませ(ば)	まく	まし	まし(もの)	まし(か(は))

肯定のなりは口語ではだじやちややまたであるともいふ。だは關東地方に行はれ、關西地方にてはじやぢや及やが行はれてゐる。これよりも稍丁寧にあらはすに

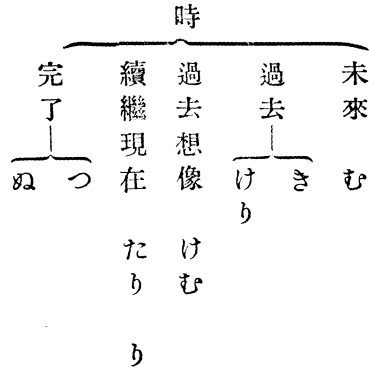
はですを用ゐ、口演體にはであるを用ゐる。であるはだやじやなどと同じく敬意を含まない。

京都にてはどす、大阪にてはだすなどとも使ふが、これらは統制するの必要があり。またことぢやをこっちやそうぢやをそうやなどいふが如き方言はなるべく改定するを宜しいとする。

否定のすは知らずに「飲まず食はず」の如く使用する場合も多少あるが、それらは文語にたよつたもので關西地方には一般に終止形にはぬ(ん)を用ゐ、關東地方にはないを用ゐ、連體形や確定條件形は文語と同じくぬ及ねを用ゐる。但し關西地方にてはぬはんと撥音に唱へる。次にでは云はないで知らいで、音もせいでの如くいの音を挿入して口語にも使ふ。

推度のめりやけらしは今日は使はない。らしはらしいと終止形にいの音を加へて用ゐ、らむはやらうまたじやらうといひ、まじは終止形にまいを用ゐ、連體形もこれで兼ねさせる。べしは關東地方の人々はべいと用ゐるが、新しい教育を受けた人は普通には用ゐない。唯然るべき方、起さるべき時などの如く、連體形にべきを用ゐる。但しこれは少しかたくなるしい用法である。

第三 時に關するものは、文語にては



等で、未來は假定條件形に、その他はりを除く外連用形の下に連る。りは四段の確定條件形及さ行三段活の假定條件形の下に連る。隨つて下二段活用の連用形に連ねて「受けり」「考へり」など用ゐるのは誤である。而して「けり」「たり」は存在動詞と同じ變化をなし、つは下二段に、ぬは死ぬ、往ぬと同じ活用に、むとけむとは次の如く特別な二段に活く。

終	止	形	連	體	形	確定	條件	形
---	---	---	---	---	---	----	----	---

む	む	め
けむ	けむ	けめ

終止と連體とは同形である。次にきは次の如くせきししかと變化す。

假定條件形	終止形	連體形	確定條件形
せ(ば)	き	し(こと)	しか(ば)

またつの變化なるててつつるつれの中の連用形で及ぬの變化のなにぬぬるぬれの連用形にと過去のき及けりと結合した複合形及にとたりと結合したものには次のやうな類がある。

終止形	連體形	確定條件形
てき にき てけり にけり にたり	てし にし てける にける にたる	てしか にしか てけれ にけれ にたれ

これらは過去完了のやうに説く人もあるが、和歌に於ては調子を強める爲に用ゐたものが多い。尙つぬの假定條件形てなと未來を示すむの結合したてむなむは終止形と連體形とは同形で共にてむてむ、なむなむで、確定條件形はてむはてめなむはなめと變化することむらむけむと同様である。

過去を示すきししかの三段活用と連接するさまは大に他と異なるものがある。

即ちか行三段(來)にはきは續かないで、ししかは假定條件形と連用形との二つに續き、來し、來しか、來し、來しかと兩様に用ゐられ、さ行三段(爲)にはきは他の動詞と同じく連用形に接してしきとなるが、ししかは爲し、爲しかの如く假定條件形に續きて連用形には接しない。

口語では未來のむは四段に連るときは父音の落ちてうとなり、その他の動詞に連るときはよの音を挟み、ようを用ゐ、過去は一般にたを用ゐ、打消しの過去を示すには關西地方では「なんだ」とたを用ゐ、關東地方では「なかつた」を用ゐる外、文語に於けるやうな細かい區別はない。

第四 敬稱の助動詞は

一、らる

敬

せらる、

させらる、

しめらる

ます

たまふ

に於ける如く、可能のらる及使役の連用形せさせしめにらるの結合した被令のせらるさせらるしめらる及動詞から轉じたますや給ふ等がある。ますと給ふとは四段に、その他は下二段に活く。

口語ではるらるはれるられると下一段活になる。例へは行くを「行かれる」「起きるを「起きられる」といふやうに。尤も命令形にはろは附けられない。

否定形	連用形	終止形	連體形	條件形	命令形
れ (ぬない)	れ(て)	れる	れる(時)	れれ(ば)	れ(よ)
られ(ぬい)	られ(て)	られる	られる(時)	られれ(ば)	られ(よ)

これより一段敬つていふ場合には動詞の連用形に「お」といふ接頭辭を加へ、これになさるといふ活用連語を加へる。例へば「御出なさる」「お越しなさる」に於けるやうに。

このなさるは上方地方にてはなはるとも轉じてゐる。なさるのるは受身や可能の
ると同一で、れれるるれるれと變化する。入らせられは「いらっしやる」となる。この
つは促音便で、「しやる」は「せらる」の轉である。仰せらるを「おっしゃる」といふはおの音に
おほをかね、つは促音便で、しやるはせらるでの轉ある。その活用はれれるるれ
れであるが、命令形には「入らっしやい」「おっしやい」の如き形が用ゐられる。狂言記には

まづ待たっしれませい

(吟聲)

殿の待ちかねさっしれう

(烏帽子折)

道連れにならっしい

(宗論)

の如き例が多く見える。

ます ひろく用ゐられてゐる。狂言記には「是非に及びませぬ」只今戻りました「下
されます」などの例があつて三段活用のやうであるが、また抄物には

我ハ誰ホドノ天子ソト問シマス

天子ノ子デ人ヲ殺サシマスヲバ

の如く終止連體に「の」附かないのがある。従つてその活用は

ませ(う) まし(て) ます ます ませ ませ

ませ(う) まし(て) まする まする ますれ まし

の二種になる。このますはいますのいの落ちて出来たといふ説が行はれてゐたが、近時參らすの義のまらすの約まつものといふ説が起つた。室町時代には自分の上に用ゐた數多の例がある。それからいふと後説が正しいと思はれる。その活用を見るにるの附かない四段系に近いものと純粹の三段形とがあつて、るのつく方が鄭重な義に聞える。

遊ばす、給ふ、まうす 等の敬の動詞から敬の助動詞になつたものゝ中遊ばす及まうすなどは「御覽じ遊ばせ」とか「お待ちまうす」教へまうす」などに於けるが如く今も用ゐる。中に遊ばせは最も鄭重な場合に用ゐる。

助詞の下に連る動詞が助詞を吸収してかはつた動詞のやうに見えるものがある。助詞とと動詞いふと結合しててふてへとなり、更にちふと轉じたものや、助詞ぞと存在動詞ありと結合したざりざれの如き、助詞もと有ると結合したまるの如きは、まだ動詞の本質をもつてゐるが、

思ふてふことは言はでも思ひけり

(兼盛集)

我のみや子持たるてへば……………

(拾遺集)

心さだかに解けずまるかな

(菅家萬葉)

の如きはやうやく依屬的のものとなりかけてゐる。これと同じやうに助詞とと佐行三段のすると結合したずするずれの如きはもとのとするとといふ意は失はれ、唯上位の動詞を力あるやうに表現するものとなつた。例へば

さる所に罷らむするも侍らず。

(枕草子)

の如きは一つの助動詞と見做して差支がない。このずは行かうず云はずなと愛知地方の方言に今も存してゐる。

活用連語

助動詞は動詞と連結するばかりでなく、助動詞相互の間にも連結していはゆる活用連語を作る。活用連語は相重なる下のものが次第に上位の語を支配してゆく。

例へば

言はざらしむ

(一)

知らしめず

(二)

受けられぬなり

(三)

思ひしなるべし

(四)

に於て、(一)は言はざりといふにしむを加へたもので、言はずに居るといふことは他より使令してゐる。(三)は知らしむにずを加へたもので、知らしむといふことをしない、

つまり使役を否定してゐる。(三)は受けらるゝといへば可能と見るべく、これにぬを加へて可能を否定し、次のなりによりて出来ない事をさうと肯定してゐる。(四)は思ひしはその事實の過去に屬することをいひ、それになりを加へるとそのことを肯定し、更にべしを加へると上のことを推量する義となるのである。

この活用連語の連接には定まつたものがある。ある助動詞は連結するものもあれば連接の不可能なものもある。左に主要な規則を掲げる。

(一)相の助動詞は否定のざら指定のたらに使役のしむが連結するの外、他の助動詞の下には連ならぬ。

(二)敬の助動詞は相の助動詞の下にのみ續き、他の助動詞の下には連ならぬ。

(三)過去の助動詞は相敬肯定及否定のざりの外には續かない。

(四)未來の助動詞は推度希望過去の助動詞きけり、否定のすでじには連續せず、その他には連る。(但し推度のべし希望のたしがありと結合した場合には續く。)

(五)希望の助動詞は相と敬の助動詞に續き、時及法の助動詞の下には連ならぬ。

(六)推度のべし及めりは相敬完了否定のざりに連り、過去及未來及希求の助動詞には續かない。

(七)推度のまじは相及敬の助動詞に連り、その他には續かない。

(八)推度のらしは相敬及否定のざる、過去のけるに連り、その他には續かない。

(九)推度のらむは相敬否定のざる、完了の助動詞に連る。

(一〇)ずるはむの下にのみ連る。

第六章 助詞

助詞は他の品詞に従屬して文法上重要な職能を示す形式語であつて、語形は小さく、語尾は變化しないで、單獨には用ゐられることなく、必ず他の詞の下に附く辭である。古くはこれをてにをはと稱へ、近世には辭をあてたり、また助辭といふ中に攝したり、或は動助辭に對して靜助辭と稱する人も少くない。

その範圍も人によりて多少廣狹の別がある。近來名詞に附する接尾辭をもこれに入れる人もあるが、一語の構成に關する附加辭は接頭と接尾たるを問はず、これを別に取扱ふのが一般である。

これを分類するに、接續上から名詞に附くと動詞に附くと種々の詞に附くと分類するもの、構成上から單用と複用と分けるもの、性質關係によりて分けるもの等があ

る。今文章との關係を主として

一、格に關するもの。

二、法に關するもの。

(い) 條件を示し、接續をなすもの。

(ろ) 判定を示し、斷止するもの。

三、表現の強さに關するもの。

(い) 係辭となり述語を拘束するもの。

(ろ) 強調しながら述語を拘束しないもの。

四、限局を旨とするもの。

の四つとし、一語の構成に屬するものを附録とする。

第一 格に關するもの

格といふ語は種々の義に用ゐられるが、爰には述語に對する名詞・代名詞・準名詞・數詞の職能を指すこととする。

甲、主語を示すもの

が 指す意。古は主語に全く助詞を加へないものもあつたが、現代の口語には「大

陽が昇る。」「野が廣い」の如く、必ずこれを添へる。主語が準名詞から成るものには古くからがを用ゐた。例へば「行くが楽しい」に於けるやうに。現代に於てはかゝる場合には行くのが楽しいに於ける如くのがといふ。がは體言と體言とをつなぐもの、即ち連體格を示すと説く人が多い。

の 指す意。單文には文語ばかりに用ゐる。「清水の流るゝ」附屬文には口語にも用ゐる。「瀧の落ちる音が烈しい。」

は 對比しまた區別する意があつて、「土は黒く、雪は白し」の如くに用ゐ、單獨にも「鳥は飛ぶ」の如く用ゐる。中古にはhaと發音したが、今はwaと發音するので口語文にわを用ゐる人があるが、助詞の如きは古例によるが善い。

も 並べ舉げる意。「人も我も喜ぶ。」の如くにも、「道もひらける」の如く單獨にも用ゐる。はもは主格以外にも廣く使用する。

い 奈良朝以前に用ゐた。強く指す意がある。例へば「仲麿い」に於けるが如く。

乙、述語の對象となるものを示す。

を 述語の作用を受けるものを指す。「富めるが貧しきを濟ふ。」の貧しきといふ準名詞は救ふといふ作用を受けてゐる。この場合の動詞は能相で、主語から働きか

けてゐる。「親が愛子を旅立たせた。」この例の「愛子を」は使役の對象となつてゐる。旅立つのは愛子であるが、さう仕向けたのは親である。「彼は故郷を立出づ」この故郷をは故郷よりの意で、立出づの對象語であるが、うつりゆく動作の行はれゆく所を示し、上記二つのをとは異なつてゐる。

に 動作の目標になる。述語の對象語であることはをと同様であるが、をは動格的には靜的に屬する。

子は親に似る。 (一)

小包を友に送る。 (二)

正行、病におかさる。 (三)

小包を友に送らす。 (四)

今宵は中秋に當る。 (五)

明月天心にあり。 (六)

町は山に近い。 (七)

甲は乙に等し。 (八)

(二)は自動詞即ち能相と所相との中間相、(三)は働き掛即ち能相、(三)は受身即ち所相、(四)

は使役相の動詞の目標であり、(五)(六)は時及所を示し、(七)(八)は形容詞の對象語を示してゐる。(五)の中秋に、(六)の天心に、(七)の山にの如きは特に場所の副詞と見るのは宜しくない。

相手が女に子供である。(九)

柳は綠に花は紅なり。(一〇)

(九)のには列擧する意がある。同じ列ねるにも、月に叢雲といへば加はる以外に別箇の感じを伴ひ、雨が降りに降るといへば重ねるによりて強さが加はる差がある。

(一〇)の綠にのにはなりといふ肯定の助動詞の中止形であつて助詞ではない。

と 指示をなしましたは共同する義を示す。「酸素は水素と化合す」に於ては水素とは主語と合同すべきことを示すが、その中に酸素は主となり水素とは客となる。また「酸水二素が水となる」の水とは述語の對象語となり、指示の目標を示してゐる。同じ指示をなすにも

「新井君美は號を白石といふ」の如きはとによりて指示する對象語はをを具する對象語と同物異名であつて、同格のものと見做される。

「彼は兄を父と敬ふ」のとは父としてとか、父の如くといふ意であるが、兄をと共に

述語の對象語をなし、二つが同じものゝやうに見られる。

「諺に論語讀みの論語知らずといふ。」のとは引用を示すもので、叙言と叙事とを區分けるのもまたこの助詞による。

「風の吹きと吹く。」の如く同じ動詞を重ねると、その意が強くあらはれることは「吹きに吹く」と同じやうである。このにととは相似てゐるが、には主として自然的のことに、とは異常的のことに使用する。とはに比して音調の強い點から自づとさういふ語感がある。また彼と是との如く二つ並べ舉げるときにも用ゐられる。近世文には下のとを略することも少くない。併しその爲に意義の明瞭を缺く場合には省いてはならぬ。

へ 動作の方向を示す。「船は南洋へ向ふ。」の南洋へは向ふの對象語である。にと相似たところがあるが、には歸着する所を示し、へは方位を指す。

より 動作の起るところを示し、また比較の標準を示す。「友遠方より來る。」は前例で「親の恩は山より高し」は後例である。よりは古代にはよともゆともゆりとも使用したが、平安朝以後には古形は亡んだ。この他に古文には「かちよりゆく」の如き例がある。これはにての義である。

から 動作作用の基點を示すことよりに同じ。

まで 動作の終局到着する所を示す。

にて 動作の原因・材料・手段・時處などを示す。

「木は風にて倒る」。「墨は松の煙にて作る」。「一ヶ年にてこれを完成す」等に於けるが如し。口語に於てはにての轉成したでを用ゐる。

が、の、つ、 この三つは名詞・代名詞を承け、他の名詞の上に連りて、連體言をなし、また修飾もする。天が下、國のはて、沖つ浪に於けるやうに。但しこれらは名詞と名詞との關係であつて、名詞と動詞・形容詞との關係ではないが、從來領格又は所有格など、稱へ來つたことも久しいものであるから爰に併記する。又花の顔の如く、のには修飾として用ゐられるのもあり、唐の大和のもに於けるやうに、のの下に名詞を省略したことを暗示するのもある。名詞が助詞のと結合するに方り、その尾音がりの音であるときは、んに轉じる。件のをくだん、のといひ、残りのをのこん、のといふが如き、盛りを盛ん、といふもこれと同じである。

第二 法に關するもの

(甲) 條件を示し接續をなすもの

文は説述が完結するときには斷止する。斷止に到るまでには連續する。條件を示すものなどは接續式のもので、これに屬するものに、ば ども とも が に を 等 がある。口語にはこれらの中使用しないのも少くない、また別にのところがけれども等古文に無いものもある。

は 順に應ずる判定を誘起する條件を示す。これに「力を盡さば」の如く假定條件を示すものと、「力を盡せば」の如く確定條件を示すものとの別がある。口語に盡さばといふ形は亡んで別な詞であらはす。形容詞に於てもよくばよければの中よければの方を多く用ゐ、宜しくばの如きは堅くるしい表現に用ゐる。

ど **ども** 逆に應ずる判定を導く條件を示す。「問へど答へず、見れども見えず」に於けるが如し。口語ではこれを使はないで、「問うても答へない」「見ても見えない」の如くてもを用ゐる。

と **とも** 逆接の判定を誘起する條件を示すことは前者に同じいが、これは假定で、ど ども は事實に即していふ差がある。「譏らるとも志はかへじ」「命長くとも百歳の壽は有ちがたからむ」に於けるやうに形容詞にはくしくの語尾に、動詞には終止形に連る。と は とも に攝せられて近古以降には用例がない。口語ではてもを用ゐ

る。

も 述語の連體形に連りて反對の判定を誘起する。「期限は切迫したるも準備はまだ整はず。」このものは近世文に多く用ゐられる。

が に を この三つは反對の事項を接ぎ合せるか、或は上の文に順意でないものを接ぐ意などに用ゐられる。

春は既に來れるに花は未だ咲かず。

我は三たび諫めしを友は聽かざりき。

商品は多く仕入れたるが賣行き捗々しからず。

に於けるやうである。口語にては「は」といひ、をは用ゐず。がは上下連接が主で「浪は高いが天氣は好い」の如く上下の文が合同的でないのもあれば「私も知つてゐるが親切の人だ」の如く、上下が離反しないものもある。

口語にはがを附した句を二つ重ねて假定の條件をあらはすことがある。「聞かうがきくまいが捨てはおかれぬ」に於けるやうに。

と ときはの義で「私が言ふと弟はよく聽く」に於けるがやうに。これは口語ばかりに用ゐる。も以下皆用言の連體形に連る。

けれど けれども 口語に用ゐる。述語の連體形に接し反對の判定を誘引する

條件を示す。「雪はちらづくけれども多くは積るまい」の如く、けれどもが上文の末につくのが本體であつたが、後には下位の文の頭につくものも生じた。このけれどものけれどは形容詞の語尾から分立したものであらう。

て 用言の連用形に連り、一の動作から他の動作に移ることを示す。もとは完了のつの連用形であつたのが分立したものである。「材料を集めて整理して報告を書いた」の如きては動作の連續を示すが、「雲がかりて富士は見えず」の如きては現實の條件を示してゐる。「姿はひじりに似て心は濁にしめり」の如きては反對のものを接合してゐる。見て見ぬ振をするの如きはてはながらの意に通つてゐる。強ひて言ふの如きは装用語即ち副詞を構成してゐる。

ても ても 上のてにものの結合して反對を引起す條件を示す。「いかに頼みても聽かれぬ」に於けるが如し。上位の音に引かれてもとなることがある。よく頼んでも駄目であつた」に於けるやうに。

み 動詞の中止形に連り反對のものを二つ並べ舉げる用をなす。降りみ降らずみ、照りみ曇りみ等に於けるものはそれである。これは動詞のみから來たものであ

らう。

たり だり 動作を並べていふ。繼續現在のたりから分離したものと思はれる。中止形(連用形)に連り、上に撥音があるときはたりとなる。

鎧の上に重き物を負ふたり抱いたりして

(平家物語)

御姿が見えたり見えなんだり致すが

(狂言記)

の如く鎌倉時代から行はれてゐたが、現在は口語ばかりに用ゐられる。

し 並べ用ゐて動作を列擧することはたりと同じく、「朝は早いし夜は遅いし、暇がない」の如く、口語にばかり用ゐる。このしはもと動詞すの中止形から轉成したものであらう。

つゝ 文語にては始めは同じ動作の重る意に用ゐ、それより二つの動作を同時に行ふときに用ゐる。口語に於ても「夜が更けたので、書を見つゝ眠る。」に於けるがやうである。このつゝはながらと同じ義である。

以上の助詞はその性質から接續性のものと云へる。但し名詞と名詞の接續でなく、述語の接續を旨とし、條件を示すもの、中止法を示すものを總べてある。

(乙) 判定をなし、斷止をなすもの

文の斷止には種々の體がある。感嘆にて結ぶもの、願望にて結ぶもの、疑問にて結ぶもの、命令禁止にて結ぶもの、肯定して結ぶもの、或は否定して結ぶもの、推度して結ぶもの等がある。中に肯定・否定・推度は助詞の助を要しないで收束するが、願望や命令には助詞の力を假るものがあり、感嘆疑問禁止はこれなくば文の成立が出来なくなる。以上の中の文の收束となる助詞を法の助詞と名づける。

(1) 感嘆に屬するもの

か かも かな かなは體言また用言の連體形に添ひ感嘆をあらはす。かもは助詞の下にも附く。かなはかになの結合したものの、かもはかにもの添うて出来たもので用例が古く、かなは後れて平安朝に發生したが、後世全盛を極めてゐる。口語にはチャナなどゝうつすべく、詠嘆を深くする場合にはけると結合して「けるかな」と用ゐることが多く、特に歌にはその例が多い。かもはもが詠嘆し、かは疑問を示す場合が多い。例へば

白露を玉にもぬける春の柳か。(古今集) 三笠の山に出でし月かも。(土佐日記) 年月の射るが如くもおもほゆるかな。(古今集)

かもの疑問の意強きものは收束となるも文の末に來ぬことがある。例へば誰を

もか知る人にせん。(古今集)「長々し夜をひとりかもねん」に於けるやうに。

も 用言の終止形に連る。口語にはマアと譯す。蟹の小舟の綱手かなしも。(金槐集)阿波の山かけて漕ぐ舟泊り知らずも。(万葉集)

かも、やも、はもと結合して用ゐられるか、いづれも咏嘆の意を有す。

な 形容詞及助動詞の終止形また終止となつてゐる語句の下に接す。餘情のこもる意があつて、口語ではナアと譯する。

「水を賜へな」。(萬葉集)「花の色は移りにけりな」。(古今集)「見せばやな」「さればよな」の如くやなよなかなと結合して用ゐる。さぞなうべなのなもこれと同じ辭であるが、それらは副詞に添つたもので文の終を結ばない。

や 用言の終止形及命令形の下につきて感嘆を示す。「あはれいと寒しや」。(源氏)「うてや懲らせや」終止となる語句にも添へる。「それはさきらめけども曇り易くぞあるや」。(大鏡)やは用途ひろく、他にも用ゐられ、これに専屬のものではない。

は は 用言の連體形に加へ詠嘆して文を結ぶ。はやはこのはに感嘆のやの加はつたもので、體言及用言の連體形に添ひて感嘆にて文を結ぶ。ふりかへつて咏嘆する意が多い。「いかゞはせむは」(伊勢物語)「吾妻はや」(記)「君がすむ宿の梢をゆ

く／＼も隠るゝまでに顧みしはや。(拾遺集)

ゑ 用言の終止形に附く。古い時代に用ゐられたもので、平安朝以後には用例がない。我はさぶしゑ。(記)

よ の一辭は命令の條に附記する。

口語に於ては感嘆詞は多く發達してゐるが、文のとちめになるのはさである。「それはどうしてもよいさ」「事柄が珍しいさ」の類である。

(2) 願望をあらはすもの

が がな がも 希望をあらはしてしにししを介して動詞形容詞の連用形に連り、助詞もを介して體言及用言の連用形にも連りて文を結ぶ。「そことも云はぬ旅寢してしが」(古今集)「心憂し深き山にも入りにしが」(好忠集)「甲斐が嶺をさやにも見しが」(古今集)「老いず死なすの薬もが」(古今集)「世中は常にもがもな」もに續きたる場合には述語の動詞を略する。

このががなはてしにしに連る中、て及には語勢を強める爲に完了の助動詞てに用ゐたものである。但ししがしがなまでを一つと見るべきかは尙研究を要する。
なん 希望を示す。動詞の假定條件形に連り、自他兩様に用ゐる。助動詞のやう

でもあるが、語尾變化しないから姑く助詞に入れておく。「苔の衣を我にかさなん」。
〔後撰集〕「はや夜もけ明なん。」〔伊勢物語〕

なん なんに同じ。「立田川秋は水なくあせななん。」〔後撰集〕 なんも助動詞のやうにも見えるが語尾の變化がないからなんと同じく姑く助詞に入れておく。中古に用ゐられたが、後には用例が見えぬ。

ばや 希望を示す。ばとやと結び付いたもので、用言の假定條件形に連る。口語にたいと同じ義である。「一見せばや。」もとは一見せばと假定條件を擧げ、次にさうなれば善いといふやうな順態の判定を略したものであつたのが、一つの助詞になつたと見るべきである。

(3) 疑問をあらはすもの。

か 體言また用言の連體形に連り疑を示して文を結ぶ。幸か不幸か。有るか無きか。

や 用言の終止形に連り文を結ぶ。「有りや無しや。」この二つは文の末を結ばないで疑問をあらはすことがある。これは文の全部に於ける疑問からその中の特に強調すべき部分に疑問の助詞をうつしたもので、さうなると文の結びにはならない。

それは係助詞となつたのであるから、更にその部に詳説する。

ぞ え い 不定稱の代名詞また疑問の副詞を上₁に置くときはぞを以て文を結ぶ。「彼は何する者ぞ」「結果は如何になるべきぞ」に於けるが如し。口語にてはぞの代にえを用ゐる。「それは誰だえ」「君はそれからどうしたえ」の如くえを以て結とする。このえはまたいといふこともある。いの方はえの方より強い感がする。

(4) 命令禁止に屬するもの

命令にはよの助詞を用ゐ、禁止にはなを用ゐて文を結ぶ。

な 動詞の終止形の下に連り禁止をあらはす。もとはなにぬねと否定の助動詞があつてその名残りかと思えるが、禁止として用ゐられてゐることが久しい。「龍の首の玉とり得ずば歸りくな。」口語にては「こゝへ來るな。」の如く連體形の下に加へる。古文には禁止を強くあらはす爲にこのなを動詞の頭に移し「雲な棚曳き」とも、動詞の下にそを加へて「雲な棚曳きそ。」ともあらはした。このなはもとは連用形に連接してゐた動詞の痕跡がそこに遺つてゐるとも考へられる。禁止のなでとぢめた文にはその下によを加へて「忘るなよ」の如くあらはすことも少くない。

よ 命令をあらはす爲に用ゐる。第一類(四段活用等)の動詞には要しないことも

あるが、一般に動詞の命令形に添へる。水車水のまに／＼環れ^よ。我が行を省みよ。朝とく起きよ。快く受けよ。善をせよ。速に歸り來よ。に於けるが如し。(但し古文には加行三段にはこれを加へないで唯ことだけで命令をあらはした例外もある。)よは動詞に添へて文をとぢめるばかりでなく、動作をなすべきものに呼びかけて、それによを加へることもある。

苔の袂^よかわきだにせ^よ。友^よゆけ。

に於けるが如し。この場合に於ける友^よ、苔の袂^よの如きを呼格と名づける。

口語に於ける命令は、關西地方に於てはよの代りにい^いを添へる。見^い、起^いき^い、受け^い、來^い、爲^いいに於けるが如し。また丁寧に述べるにはお行き^い、お取り^いの如くおの接頭辭を加へる。但し來^いなどには加へない。これらは慣用に由る。關東地方にては一段活用二段活用及さ行三段活用には見^ろ、起^ろき^ろ、受^ろけ^ろ、し^ろの如くろを加へて命令をあらはすが、四段及加行三段活用にはろを附けない。

因にいふ。よは命令以外に咏嘆して文を結ぶ。

我こそは日本一の剛の者^よ。敵の大將を討ち取りたる^よ。頃は元暦元年のこ
とかと^よ。

に於けるか如く、體言、用言の連體形またその他の詞にも連る。「更にものいはぬ人ぞよ。」「吾が心中を知つて不如歸となくげなよ」の如く、ぞやなの下に連ねて用ゐる。

(5) 力を添へて文をとぢめるもの

ぞ 強く指して文を結ぶ。體言及用言の連體形の下に加へる。「これは一大事ぞ。」「風はなぎたるぞ」に於ける如し。口語の「風は止んだぜ」のぜはこの轉である。ぞの下によを加へ感嘆で結ぶもの、また助詞かしを添へて強めるものもある。

を 強く抑へて文をとぢめ、餘韻を存せしめるものにて古文に用ゐた。「終にゆく道とはかねて聞きしかど、昨日今日とは思はざりしを。」に於けるが如し、

かし 念をおし力を添へる。命令形の下、動詞の終止形及ぞにて終止してゐる下などに連る。「あれかし。」「まことにあはれなりかし。」「事ぞかし。」「但しぞのやうに直接に文をとぢめることはない。

のみ 限局する意があつて、漢文口調の文にては「誤れるのみ。」の如く強く指して終止となる。

とも 口語に於ては用言の終止形の下に添へて、確認する意に用ゐる。「承知したとも。僕も行くとも。」「

第三 表現の強さに關するもの

(甲) 係辭となり述語を拘束するもの

表現に力の加はるを旨とする一群の助詞がある。さうしてそれを主語・對象語及裝用語などに加へるにより述語の形に影響を及ぼすものを係の助詞といふ。こそぞなん(な)もやかはも等がこれに屬する。

は 格を示すにも用ゐられる。これが主語に添へられてあるときは述語は普通の終止形を用ゐる。對象語を示す助詞をの下に接するときにはばとなる。「これをば望みて止まず。」に於けるやうに。

も 並列或は他に同じ事物のあることを示す。主語につきては述語は普通の終止形を用ゐる。「松も杉も常磐木である。」「人をも身をも恨まず。」はもも詠嘆の助詞から強意を示すに轉じ、更に格を示すものに兼用されるに至つた。

ぞ 強く念を推す。主語・對象語・裝用語に添ひては述語は普通の終止形を用ゐないで、連體形を以て終止形となす。例へば「不二の高根に雪ぞ降りける」に於けるやうに。

なん 詠嘆して指す。古くはなもを用ゐた。もよりむむよりんとなつたもので、

これを上に置くときはその如く連體形を以て收束する。「形よりは心なん優りたる。」大臣の御代重ねて明き淨き心もちて仕奉ることに依りてなも天日繼は平く安く聞召しくる。」(貴命)

や 疑ふか又は尋ねる意。この係に對しては述語は連體形を以て收束する。「夜や暗き。」物や思ふ」に於けるやうに。

か 疑ふか尋ねる意。これに對し、やと同じく述語は連體形を以て收束する。「雲は秦嶺に横はり家いづくにかある。」

やかはほゞ同様に用ゐられるが、上に不定稱の代名詞及疑問の副詞のあるときは「誰かある」の如く、かを用ゐてやを用ゐないのが古例である。但し近世に於てはかと同じやうにやを用ゐるものも漸く多くなつた。

や及かはまた反語に用ゐられることがある。「世の中は何か常なる」に於けるが如し。特にはと連結してやはかはを用ゐるときは一層その意を強くあらはす。例へばさる事やはある。「いつかは雪の消ゆる時ある。」に於けるが如し。またもと連結してやもかもと用ゐることもある。「君に二心あらめやも。」「長々し夜をひとりかも寝む」に於けるが如し。やもかもものはいづれも詠嘆である。やもは例に示すが如

く文の末に置く場合が多い。

こそ とり分きて提示するに用ゐ、これに對し、述語は確定條件形を以て收束する。「物のあはれは秋こそまされ。」こそはその物を特に指すが故に、他はさうでないと反對の意を豫想されるものがある。「人こそ善けれ」といへば、その裏には「我こそわるけれ。」の如き意が含まれる。従つて終止の下に然れどもとか併しながらなどの接續詞が連ることがある。感嘆の助詞よにて文を結ぶときは、この係りの助詞があつても「我こそは日本一の剛のものよ」に於けるが如く、用言一般の結びによらない。口語にはこそは係は用ゐるが、述語の用言に對する拘束はない。

以上の係りの助詞を置くに隨ひ用言の終止法にそれぞれ區別が生じた。これを係結の法といふ。第一はもの尋常形のもの、第二ぞやかなんの強調型のもの、第三こその最強型のものとし、第一は普通の終止形、第二は連體形を終止とし、第三は確定條件形を終止とする。格を示すがも第二型に入れて説かれた時代もある。第一型のは普通のものとし、これを除き、強調型と最強型との二つに限る説も行はれてゐる。これらの係の助詞が置かれても、文を結ばないで條件的に連續するときはその結法は一定の則によらないこともある。またこそは強める助詞を以て文をとち

めることがある。「望ましきことにこそ」の如きそれで、これは「あれ」といふ述語を略してある。とぞまたとかやにて文をとちめたるは、その下に「云ふなる」また「云ひ傳ふる」の如き述語を略したもので、これも常套語のやうになつてゐる。

(乙) 強調しながら述語を拘束しないもの

はもと同じ類にしがある。これも強調する意で、

雁しともしも。 君が御言を聞くしよしも。

夢にし見ゆる。 鶯の鳴かむ春べは明日にしあるらし。

君にしあらねば、 ありとし見つて、

花をし見れば、 我が背子し斯くしきこさば

の如く、主語對象語裝用語にも加へられ、用言の結は普通の終止形のものが多く、稀に連體形で終止としたものもある。また結ばないこともある。(東方の方言に山へゆくといふを「山へさアゆく」などいふさあはこのしの訛かも知れぬ)。このしにもの結合したしもはこれと似て同じく強調するに用ゐる。而してその結びは折しもあれとか、鶉にしもあれやの如くこそと同じ収束をとるかと思れば、また時しも分かぬとか、必ずしも然らずの如き例も見えて、収束する用言に特別な拘束はないやうである。

ばし 強く指す。用例が鎌倉末期よりのものに見える。助詞ばに強めるしの結合したもの。例へば人に頸ばし切られうとてとか「その人に二の名ばしあるか」「選者を知らずとばし仰せらるゝか」等に於けるが如く、述語の收束には別に定まつたものはない。今各地の方言にこればい、あればいなどいふはこの訛と思はれる。

を 咏嘆して力を加へる。今も昔も知らずとを云はむに於けるが如し。これも述語の用言に拘束はない。

以上係りの助詞は咏嘆から來たはもしなん、入念に指すそぞのみ、疑問のやか、特指のこそはいづれも(しは例外)一方に於ては文の結びとなつてゐる。これは一方より他方へ轉じたもので、恐らくは結びとなつたものから、係の方に轉じたと見るべきであらう。尤も述語の用言を拘束しないをの如きは自由で、いづれにも附いて感嘆の意を示す。これらの助詞は最初感嘆に用ゐたものから分化し、勢調を添へるものとなつたり、收束するものとなつたり、種々に轉移したものであらう。

第四 限局を旨とするもの

助詞の中には事物を限局するを旨とする一群がある。口語に「これしか無い」「古いことほか知らぬ」「これすら容易なことではない」に於けるしかほかすらの如きは否定

の述語を誘起する。この點からいふと係助詞に編入してもよろしいやうである。併しこれに類するものに、でもばかりさへ等があり、文語にはすらさへたにのみ等があり係辭と多少の差異もあるから、別にかゝる一目を立てゝおく。

すら 我身すら容れられず。

さへ 限ある貢さへ免さる。

だに 苦の袂よ乾きたにせよ。

この三つの中、だには口語で「せめてこれでも」と譯し、さへはまでと譯す。随つてだには消極的で、さへは積極的であり、だには不充分で、拒否を伴ふことが常で、さへはある上に加る意で十分の意がある。併し近世にはさへをだにと混用してゐるものもある。すらは一方を擧げて他を類推させる。暗示的と説く人もあり、積極消極の中間といふ説もある。このすらは鎌倉時代にはそらともいつたが、そらは廢語になつた。この三つの助詞は格を示す助詞と連ねて用ゐることがない。その點からいへば格の助詞とも見られ、語勢を添へる點からいへば、強意即係助詞とも考へられる。

のみ これのみは人の國より傳はらで、

ばかり 名ばかり留め置く。

この二つはその物の範圍を限定する。のみは口語には使はず、ばかりは口語にも用ゐるが、この場合にはのみと同じくだけとうつしても善い。のみは體言及用言の連體形並に副詞に連るばかりでなく、荒れのみまさるに於けるが如き活用連語の間にわりこむこともあり。ばかりは體言及用言の連體形及副詞に連り、また用言の終形にも連る。

文語のすらだにさへばかりは文の終止には用ゐないが、のみは漢文訓讀體のものには迷へるのみに於けるが如く終止に用ゐることは既に法の助詞の條に述べた。ばかりには程度分量を示すことが多く、死ぬばかり思へり。一年ばかり經ての如きはそれである。この場合にはぐらゐ又はほどと口譯すべく、これらは上述のものと異なり、上位の語と結合して副詞を形づくる。口語に於けるこれつばかりし、これつばかりはその訛である。

まで までは一面に於てはより又からに對し、到着の範圍を示し、格を示す助詞となるか、また程度を示すことがある。「月と見るまで吉野の里に降れる白雪」のまでの如きはぐらゐと譯すべく、月と見る全體を修飾部となす。

など 例を擧げた後、猶その他のに異類があることを示す。例へば机上には本硯箱、

文鎮などを載す。に於けるが如し。どもは同じ物の數多きを示し、などは種類の列舉に關係する。「覚えある人の子どもなどは雑色などおりて馬の口などしてをかし」の如くどもと相重ねて用ゐた例がある。これらは多くの子どもとその他の人とを指してゐる。

やら 文語のやらむより來つたもので、口語に用ゐる。不定または疑を存して推量する意をあらはす。例へば、「何やら見える」どこやら似てゐる」に於けるが如し。

第七章 副詞

副詞はその種類が頗る多く、中にはいと、唯、尙、甚だ、稍、漸くの如く助詞の助けを借らないで、それ自體で副詞となつてゐるものがある。今、昔、古まことの如く、名詞からそのまゝ轉じたものもある。ととか。にとかいふ助詞をとりて成立してゐるものもある。常に信にの如きは名詞に助詞にの加はつたもの、頻に、盛に、假に、の如きは動詞に助詞にの加はつたものである。擬聲語や感嘆詞にはとの助詞を取るものが多い。あつと、きつと、さつと、どつと、ぼんとの如き類は頗る多くして枚舉することが出来ない程である。また同語を重ねてとと受けたものには、さら／＼と、から／＼と、はらは

らとの如きがあり、らの下にりを添へたもの、更にとを加へたものには、ふらり、だらり、ちらりと、すらりと、の如きがある。

形容詞は一般に中止形そのまゝで副詞の用をなすものであるが、その他に語幹だけで副詞となるものもある。「はや行け」のはやの如きはそれである。蓋し、の如きは古蓋しくとも用ゐた例があるから形容詞の終止形で副詞になつたものと見える。縦をよしといふも同例である。

動詞の中止形のまゝで副詞になつてゐるものには、たとひ、あまり、つまり(口語)の如きがある。その連用形に助詞てを加へて副詞となつてゐるものには總べて、敢へて、強ひて、決しての如きがある。またての連續に方り上の語尾をのどめていと呼ぶ類には尋いで、況いての如きがある。語勢を強める爲に語尾を促音に呼ぶ類には却つて、達つて、依つての如きがある。またんと撥ねたものには喜んで、勇んでの如きがある。この場合にはてはでと濁音にかはつてゐる。

また動詞の連體形に助詞にを加へたものには、案ずるに、願ふにの如きがある。條件形に助詞ばを加へたものには、譬へば、言はゞの如きがある。くといふ附加辭を具し、或はその下に更に助詞はを加へたものには、恐らく、謂へらく、願はくはの如きがあ

る。終止形の下にらくはの結合したものは乞ふらくは、疑ふらくはの如きがある。名詞や動詞や形容詞の語幹などにかにやかにらかにににの附加辭をとりて副詞となるものも少くない。平かに、花やかに、冷ややかに、のびやかに、のどやかに、めづらかに、老いらかに、高らかに、甘^{うま}らに、つぶさにの如きはそれである。

副詞の原形をたづねて見ると、名詞とも副詞とも形容詞とも分らないものがあつて、それから分化したやうに思はれる。例へば「しづ」といふ語があつて、それに「けし」といふ語尾が附いて形容詞となり、かが附いて名詞となり、かにといふ附加辭が附いて副詞となつたと見るべく、さやけし、のどけしの類も皆これと同じ類である。このさやでも、のどでもにの助詞だけを取り、のどに、さやにの如く用ゐるものもある。

副詞を調べて見ると一つの詞が漸々に變つていつた跡が明らかになるものが多い。つぶ^(粒)といふにらといふ附加辭がつき名詞(人名に古)となり、にといふ附加辭をそへてつぶらにと副詞になし、またこれを重ねてつぶらつぶらとなし、にの附加辭を添へてつぶらつぶらとなし、一方ではつぶにさにを添へてつぶさになし、他の一方に於てはつばらに、つばらかに、つばらつばらに、つまびらかなどと變つてゐる。

また同語を重ねて副詞となすことは名詞代名詞・數詞・動詞・形容詞・感嘆詞また副詞自身にさへも互つて廣く用ゐられてゐる。をさく、それく、一々、たえく、かねく、ゆくく、返すく、長々、しぶく、かさく、ごとく、うつらく等はその例で、更にてとにも助詞を加へたものには行きく、て、ありく、て、しらく、と、ほのく、と、返す返すも、呉々も、うつらくに、からくに等がある。

動詞に助動詞を加へたり、或はその上に更に助詞を添へたりして副詞としたものもある。絶えず、成るべく、云はんやの如きはそれで、必ずしもの如きは假とならずとしもとの結合である。

附加解を名詞動詞に加へて副詞となすには以上の外、ごとによ、ばかりながらすがらづからがてらからがねがにがり等がある。

ごと ごとに 名詞及動詞の連體形に連り一つ一つを示す。漢字は毎にの字をあてる。一事のことといふより來るか。人毎に、日毎に、行くごとになど用ゐる。

づ、 箇の字の重疊して成るもの。一度に限られた數を示す。一人づ、十づ、。少しづ、に於けるが如く、漢字は宛の字をあてる。

ばかり 計るより出で、ほど、またぐらゐの意を有す。さばり、斯くばかり、とばかり

等に於けるが如きを指す。古文には頃といふ意に神無月二十日ばかりなど用ゐてゐる。

からに 故にの古語かれの轉じたものににを添へたもの。吹くからに、行くからにの如きはそれである。

ながら のと故と合したもので、そのまゝ「(一)とか、[なれども]」(二)とか、二つを兼ねる(三)意に用ゐる。枝ながら、(一)憚ながら(二)行きながら(三)

すがら さながらより來る。に沿ふの意を有す。道すがら、夜もすがらの如きはそれである。

づから そのまゝの意、づは菓物獸のたと同じく、の古語か。手づから、心づから、おのづからの類がある。

がてら がてり 加へる意の様かたの義にらまたりの加はつたもので、がてりは萬葉に見がてりの如きがあるが、後には例が見えぬ。がてらは花見がてらの如く、今も散歩がてらなどと用ゐる。

がてに まさる意、後世がちにといふに同じ。雪がてにの如く、今は御無沙汰がちになど用ゐる。

がに 之^{ガニ}の義か。ばかりにと似てゐる。「紛^ニふがに」などに於けるやうに。但し中世以降は廢れた。

がね 之^ガ根^ネの義ともいふ。の爲にの意に用ゐる。語りつぐがねなど萬葉集に例がある。かは連體詞をつくるがにて、ねはなと同じ感嘆辭であるが。尙研究を要する。

むた と共にの意にて、助詞の又はかを介した名詞に連る。天地のむたとか風のむたなど古文に少數の例があるに過ぎない。

まゝ 通りにの義。我がまゝ、思ふまゝに於けるやうである。

まに 間にの義。行くとせしまに。接續詞と通するものがある。

まにま 同上。御言のまにまの如くに從つての意に用ゐる。

まにく まにを重ねたもの。神のまにく。隨ふとか、任せる意がある。

なへに に伴つての義。動詞の連體形に連る。吹くなへに、鳴くなへにの如き用例が中古にあるが、後廢れた。

さうに 様子を示す。動詞の連用形、形容詞の語幹等に付き、現今ひろく用ゐられる。勝ちさうに、暑さうに、嬉しさうに、行きたさうに等に於けるやうである。このに

はなとも用ゐて形容動詞の如き活用である。

第八章 接續詞

語句文章をつなぐ詞であつて、語句の間に置くもの、次の文の首に置くものがある。また前の節の末に置くものは助詞として取扱はれる。

語句の中間に置かれるものは又、及、並に、且等である。及、並には接續性の助詞と同じやうに體言を接ぎ合せ、且は用言を接ぐ差がある。これらは動詞から轉成したもので、並には多くは二つのものを列ね、及は列舉するとき、金銀銅及白銅は皆貨幣に用ゐるに於けるが如く、最後の體言の頭に置くことが多く、然らざれば戸主及家族使用人はの如く、次位に相當するものを一纏めにしてその上に置く。

「又」は山又山の如く體言を列ね、山を越え又谷を渉るの如く句を列ねる。普通には附け加へる意に用ゐるがその一を撰ぶ意に用ゐられることもある。

都の外に移さるゝか又命を失はるゝか、この二つにはよも過ぎじ。(平家物語)

この又は若しはと同義である。又にはの助詞が附いた時は多少撰ぶ意が生じて来る。

又^に類するものにはたがある。「雨降りはた風吹く」のはたは重なる意で、はたまたと連ねて用ゐることもある。「霞か雲かはた雪か」に於けるはたは或は又若しくはの意に通ふもので増加の意はない。而して又よりも一層強い語感をもつてゐるやうである。

以上の外或は、若しは、さてはの類も語間に置かれる。中に或はあるはともいふ。あるといふ動詞に指す辭のい^及區別する助詞はの加はつたもので、あるひはと書かれた例もあるが、いの方が正しいやうである。古くはあるいは百騎あるいは二百騎押寄せ々々」の如く二つ並べて書いたが、後には百騎或は二百騎と中間だけにおく例が生じ、それが多く用ゐられるに至つた。

もしはは又もしくはといふ。撰ぶ意がある。古くは或はと同じく、若しは猿猴若しは鼠の如く用ゐたが、後には猿猴若しくは鼠の如く中間ばかりに置くものが多くなつて來た。さてはは然而のさてに助詞はの加はつたもので、向島さては上野の花もに於けるが如く、一つを挙げその次にはとの義に用ゐられる。且の如きも且はとの助詞を加へたり、或はその間にうの音を挟みてかつうはとも用ゐられた。且は且又と複合して用ゐられることも書牘文には屢見ること、近代に於ては且の代り

にその上を用ゐることも少くない。且が一方よりなどの義に用ゐられるときは副詞となつたのである。

次の文の頭に置かれるものはその種類が多い。累加するもの(一)、順應するもの(二)、逆應するもの(三)、制限するもの(四)等がある。

(二)に屬するものには、さて、而して、さうして、尙、然のみならずの如きがある。中にさての如きは叙説を轉換する時に用ゐられる。

(三)に屬するものには、然らば、然れば、されば、さらば、かゝれば、かれ故(古語)、故に、かるが故に、随つて、そこで、それだから、だから等がある。

(三)に屬するものには、されど、されども、さるに、然れども、然るに、併しながら、さりながら、ところが、だが、ですが、それでも等がある。

(四)に屬するものには但し、尤も、併し、しかも等がある。

累加のものには助詞のて、順應には助詞ば、及故の古語かれより轉じたから、逆應には助詞どもに附加辭ながら、撰擇には助詞はが活いてゐることが了せられる。

文の末尾に於ける接續は助詞の力によること法の助詞(甲)の部に述べた如くであるが、後にはそれを切離し、けれども、なれども、たが、ですがの如く次の文の首に置く傾

向の著しくなつたことである。特に現代の口語には

して、で、すると、だから、が、だけれども、でも、のみならず、

の如きを獨立體のものとして次の文の首に置かれるやうになつた。

室町時代に五山の學僧の講説した抄物類には然る、ある、する、なる等の動詞にばてにをがども等の助詞が活いて、澤山の接續詞を發生した跡を見られる。その中には今日使用しないものが少くない。

然系統の中に然るがの如きがある。

長幼ノセツヲ知レリシカルガ君臣ノ義ヲバ知ラズ。(史記抄)

然るに、然るをの如きは普通であるに、この例は珍しい。さる系統にはさうあらば、さあるほどにの外、而しての代にさうて、さる故にの代にさるまへはの如きがある。

往モ還モ皆興也サウテ興ノ盡ルト云コトハナイゾ。(若木抄)

夜行スル者モナイゾ、サルマヘハ犬吠エ盜ホドノセ、リ盜デコリ何カ有ラウゾ。

(史記抄)

有る系統のものには、斯うあるにの外、唯、あるに、あるを、あれども、あるがの如き接續詞を用ゐてゐる。

孔子モイカイカツヨチャゾ、アレドモ德ニ隠レテ人ガ不知ソ。(史記抄)

このあれどもはなれどもと近接してゐる。

なり系統のものにはなれども外なればを獨立の接續詞として使つた。

昭儀ハ何程ノ位ゾ、ナレバ大納言ホドノ位ゾ。(蒙求抄)

またなりの口語チャにガを加へた獨立のものもある。

始皇ノ事ハ其威勢アルコトチャホドニ一代ハナントセウゾ、チャカ二世ノ其材ハ足モトマデモヨライデ云々。(史記抄)

爲^スる系統のものにはすれども、するときは、すれば、するが、するに、するを等があり、したれば系統にも同様のものがある。

陸機ハ吳人カ旅人ゾ、スルニ我等カ上ニイテ云々。(蒙求抄)

掃除スルモノガイサカヒヲシテ死ダ者ガアルゾ、シタニ一言モ何トシタ事ゾトワヌゾ。(蒙求抄)

これらにもば^バどもがに^ニをの助詞が大きな役目をしてゐる。

一體接續詞は歐洲に於ては古は副詞の中に入れられてゐたが、後學者の力によりて分立させたのは随分久しいことである。我が接續詞は動詞に助詞の加はつてな

つたものが多い。而して形の上では副詞と違はないで、用法によりて相分れるものも少くない。例へば

彼また来る。今はた同じ。それはさて置き。

紅葉がつ散る。或は然らむ。尤道理に合へり。

の如きはいづれも副詞である。形ばかりによつて強ひて品詞を分けるのは國語の本體に合はないことがある。斯く相近似するものがあつても職能が異なつてゐるから一方に攝せしめるのは妥當でない。

第九章 感嘆詞

感嘆詞は感情に伴ひ自然的に發した叫聲が社會に言語として認められるに至つたもので、單獨に發した叫聲ばかりでなく、人に對して呼びかける音聲及これが應答の聲をも含んでゐて、言語の母胎である。具象的ではないが、短い音聲の裡に全感情を吐き出した點からいへば、特殊の文ともいふべく、形體からいへばまた單語とも見らるべく、文章的單語と名づけた人もある。外國に於ても古は品詞に入れなかつたが、その後加へることになつてから多くの年月を重ねてゐる。今一般に隨ひ品詞に

加へる。

感嘆詞の最も始に成つたのは驚異すべき自然に對し、知らず知らずに發した叫聲であるべく、次に喜びや悲しみの感情が心裡に溢れたときの聲であるべく、

あ、あな(文語)、あら、あれ、ああ、

おう、おや、

の如きは以上の場合に生じたものといふべく、人に對して呼びかけたり勧誘するときのものには、

さあ、いざ、もし、もしく

注意を與へるものには、

そら、しい、これく

應答に用ゐるものには、

おう、はあ、はい、へい、

いな、いや、

等がある。時代により、男女により、身分により、場合によりて種々の差別があつた。

古代にあなといつたのを近古以降にはあらといつてゐる。中古にいなといつたの

を後世にはいやといふ。おうと答へるのは男子で、ええは女子の使ふのが普通である。主人が太郎冠者に向つてやい 太郎冠者と呼びかけると、はあ御前にと答へる。やれ は驚きの後少し胸おし撫でながら發する聲、へえは感じて聞いてゐる時に發するといふ風に、それ かはつてゐるのである。心裡の狀態と音韻との間には必然的の關係が存してゐる。あ行音が多いとか、お列やお列の音が多いとかいふことも發音機關と流出する感情との間に交渉があるに相違ない。もとは文章の上に關係はなかつたが、後には多少意識の加はるものも生ずるやうな傾向となつた。いでに對しては次に力強い決意が伴はれ、いざに於ては他を誘ふ意味が存し、いなには否定が豫想され、こら といへば叱り制するもの、いよう といへば囃し立てるものが考へられといふ如く、文に全く交渉が無いとは云はれぬのである。述語に添ふものは感嘆性の助詞として取扱ひ、茲には説かない。

第十章 單語の轉成

品詞の中、最も始に發生したのは感嘆詞であるべきは嬰兒の言語發達狀態で察されるが、形容詞が始に成つたか、名詞がそれに先だつたのか、動詞がそれに續いて成

つたかは容易に斷定は出来ない。また語原を説くのは文法の領域ではないが、既に成立した語またはその語幹より或は語幹に附加辭などを加へて他の品語に轉化させることは常に行はれてゐることで、その跡も明にたどられる。

名詞

本來の外に動詞形容詞等から轉成したものが少くない。動詞は光・氷・行・遊・釣等連用形から來るものが多い。人の一字名には渡・競・融等終止形を用ゐた。形容詞は白・黒等語幹のまゝで名詞となるものや、それにさみげの如き附加辭を加へて、高き、厚み、嬉しげの如く名詞となすものもある。川・淀のよど、人のとまる宿、歌ふうたの如きは動詞の語幹が名詞に成つたのか、或は名詞に語尾を加へて動詞に成したのか判然しない。次に、あはれなど感嘆詞の名詞に成つたものもある。名詞の中轉成したものを漢字であらはすときは、附加辭は勿論、その他にも紛れ易いものには、假名を送る必要のあるものが少くない。掛の字にもかけとかゝりと兩訓があり、行はおこなひとゆきと兩訓があるごとく、紛れ易い場合には振假名をささないとすれば、一方に一字だけ假名を送りて混雜を防ぐ便法が必要となるのである。

動詞

名詞に語尾を附けて動詞となしたと思はれるものがある。草木が芽ぐみとか、木の葉が黄ばむとか、柱も蝕みてとかの如きは名詞に動詞の加はつたものであるが、一語の如くに考へられ、繋ぐ、跨ぐ、及孕むの如きは一語の如くであるが、綱股腹といふ名詞にぐ又むといふ語尾を加へたものと見るべきである。鄙ぶ、訪なふ、嫌がるの如きも鄙・音・嫌の名詞等にぶなふがるの加はつたものに違ひなきも、それらは動詞の語尾と見ないで、附加辭と見做されてゐる。中古より近古にかけては少數ではあるが、名詞の末尾の音を同行の音にはたらかして、動詞としたものがある。ひとりごとをひとりごとと四段活に、まつりごとをまつりごちと働かせ、裴束をさうぞきてと働かせ、彩色をさいしくと働かせ、料理をれうるとなす類がある。

形容詞の語幹にみむの如き語尾を加へて動詞となすものもある。悲し、樂しを悲しむ、樂しむとなすが如き、早しを早み、早むと用ゐるも同例である。これらは慣用がありてすべてに互るといふのではなくても轉換の一現象である。また形容詞の語幹にありといふ動詞を加へ、一つに結合して、善かり、惡しかり、さやけかりの如き存在動詞に轉換するのは一般的であつて、芳賀博士の命名以來これを形容動詞と呼んでゐるが、形容詞から轉成した存在動詞であることは云ふまでもない。

また同じ動詞の中でも所謂自動他動によりて活用を異にする類は相當に多い。成ると成す、遣ると遣す、倒ると倒す、崩ると崩す、増ると増すの如きはるの語尾のあるは自動で、すの附いてゐるのは他動(能動)である。これらは語幹は同一で、すは爲す、るは有るが結合して出來たやうにも考へられる。また動くと動かす、起くると起こす、盡くると盡くす、過ぐと過ぐすでもすの語尾のあるは他動(能動)である。これらも溯つて見ると語幹は名詞であつたか、感嘆詞であつたか、疑問がそこに湧いて來る。動詞の語尾と動詞を形づくる附加辭との區別は親和抱合の如何によるか、動詞の語幹といふは語義は明瞭でないもの、附加辭と共に動詞を形成するものはその語義が單獨で使用されるといふぐらゐの差異に過ぎない。動詞を形づくる附加辭といふは、めくめかすたつづくなふばむがるぶぶるさぶやくはふらふを數へる。この外口語にはじみるなどがある。

春めく、ほのめかす、かどだつ、おとなふ、氣色づく、黄ばむ、うれしがる、ひなぶ、かんさぶ、花やく、若やく、味はふ、恥らふ、老人じみる、

動詞を漢字を以て記すときは語尾の變化する部分のみを假名がきするを原則とするが、附加辭は全部かながきする。形容詞が存在動詞にうつされるときは善かり、

惡しかりの如く、ありと合して約まつた部分から送る。

形容詞

名詞副詞にくしきしくしきの語尾を附して形容詞を形づくるものがある。おとなし、甚だしの如きはその例である。同じ名詞・動詞・副詞を打重ねてしくしきしに活かせるものがある。女々し、雄々し、花々し、ばれ々し、げに々し、ほと々しの如きはそれである。字音もしふねく(執念)さうく(騒々)の如く活かせた例もある。

情趣を示すゆたかに、さやかに、のどかに、あざやかに、あきらかに、はるかにの如く副詞の原形ゆたさや、のど、あざや等にけくけしけきの語尾を加へてゆたけくさやけくのどけくなどと形容詞を形づくるものもある。露けしは名詞に同じ語尾が附いて成つてゐる。

動詞から形容詞に轉じたものもある。なつくより懷かしく、騒ぐより騒がしく、勇むより勇ましくと轉じた如きはそれである。(なつかしむの如きはそれから更にまた動詞に轉じたものである。)

また附加辭を加へて成るものがある。名詞副詞感嘆詞にらしを加へる。子供らし、わざとらし、嫌らしの如き、動詞の連用形にたしがはしを加へ、終止形にかしを加へ

て形容詞を仕立てたものもある。めでたし、亂りがはし、恥づかしの如きはその例である。形容詞の語幹にかまし、名詞などにがましなどを添へて形容詞とするものもある。厚かまし、嗚呼がましの如きはそれである。口語に於ては名詞にどいを附し、動詞の連用形形容詞の語幹または名詞にばい、若しくはばいを附して形容詞を作るものがある。惡どい、際どい、忘れっぽい、濡れっぽい、辛っぽい、仇っぽい、酸っぱいの如きはそれである。

副詞

前に述べたやうに、副詞は名詞・代名詞・動詞・形容詞・感嘆詞・助動詞・助詞等殆ど各種の品詞から成つてゐる。今、昔の如き名詞のまゝで副詞となるばかりでなく、今は昔の如く、二名詞を助詞でつないだ文章のやうな構造の副詞もある。彼れ此れ一時間に於ける彼れ此れの如き代名詞を重ねて成るものがある。動詞の連用形に助詞で、連體形に助詞に、假定條件形にくば、確定條件形に助詞が附いて副詞をつくるばかりでなく、たちまち、いきなりの如く動詞を重ねて副詞となるものもある。形容詞の中止形終止形語幹で副詞となるばかりでなく助詞を伴ふものもある。各種の詞に附加辭を結びて副詞を形づくるものに就いても説いた。尙左に構造の複雑な副詞の

構成につきて附け加へる。

生憎あやど 感嘆詞に形容詞の語幹の結合したものの。

辛うじて 形容詞の音便となつてゐるものに、助詞してが結びて更に濁音となつたもの。

慙に 接頭辭なまが強ひといふ動詞に加はり、これに助詞にを伴つてゐるもの。
焉んぞ いづくといふ方位を示す不定稱の代名詞に助詞にとぞが添ひ、にが撥音となつてゐるもの。

取敢へず 取りといふ動詞にあへといふ半助動詞の動詞が連りそれに否定の助動詞の加はつたもの。

況んや 言ふといふ動詞に時の助動詞んが加はり、更に助詞やが添うたもの。

動もすれば やゝといふ副詞に助詞も及動詞のすれ、助詞ばの加つて成るもの。

然のみならず しかといふ副詞に、助詞のみ、助動詞なら及ずを具したものの。

程なく 折あしく 主語述語を具し文章のやうな副詞の構成である。

接續詞

接續詞は副詞と同源のものも多少あるがその多くは然といふ動詞及その種類の

動詞にばどどもがにを等の助詞が結合して成ることは既に接續詞の條下に述べたから茲には略する。

助動詞及助詞

助動詞は大體動詞形容詞から轉成したものと見るべく、まじはましじから、ますはまらずから來たことは近來に至つて漸く明かとなつた。すぬねの如き一系統に考へられ來つたものが、すはざら及びと同系で、ぬねは知らなくのな知らにのにと同系であることもやうやく明かとなつた。尙、きししかのきは來より轉成したものであるが、ししかに就ては未だ定説がない。爲の動詞から來たか、指詞から來たか尙考究を要すべきである。

助詞の多くは感嘆詞から來たと考へられるが、今概括して斷言することは困難である。

結語

我が國語は三千年の悠久な傳統をもつてゐて、その間に語形や内容の變遷してゐるものもある。また他の長を取る國策上より古くは三韓及支那の文化を容れ、近世

に於ては歐米の文化を移し、我が固有の文物をして一層の光彩を添へ來つてゐる。随つて外邦の言詞の我に輸入されたものが少くない。然れどもそれらの言語は國語の法則に支配されていつてゐるのである。世界の言語は夥しいものであるが、大別して單綴語と漆着語と屈曲語と抱合語とに分けると、國語は漆着語に屬し、助辭を以て名詞代名詞數詞を動詞形容詞と結びつけたりして種々の事相を表すことが出来るのである。歐印語と異なり名詞代名詞數詞に語形の變化をもつてゐないことが、文法を簡單にさせるうへに異常なものである。併し一面には動詞形容詞及助動詞には屈曲語のやうに語尾變化を有してゐて、支那の單綴語のやうに細密の敘述に不便な點はない。この點から考へても兩者の中間に立つてゐる。随つて體言の細かい研究よりも用言や助詞の研究に力を盡すべきである。語の排列に於て支那語や歐洲各國語のやうに述語を對象語の上に置くことは普通にはない。述べる通りの順に語を排列する。疑問の場合だといつて述語の一部分を分けて主語に先だゝせるやうのことではない。助動詞が幾つも連結される、さうして最後のものがその上位のものを支配しその意義を變更してゆく。されば「彼は行かむ」といふ如き極めて短い文でも、むの一辭は「私は想像する」の義に相當する。この連續に際して語尾が

變つてゆく。この點が歐印語などと變つて特に注意を要するのである。活用連語の接續の方則を舉げたのもその爲である。

日本人は簡易を好む國民性をもつてゐるので、數に關する表現に方り特に限定してあらはす必要のあるときは、それぞれ精密にあらはす道は備つてゐるが、さうでない場合には名詞でも數詞でも數を超越してあらはす習である。ものを指すにも冠詞はないが指詞がある。併しそれも特にことわる必要のないときは使はない。關係代名詞はないが、それに似たものに「もの」の類がある。禮節を重んずる國柄として敬稱に屬する語法は發達してゐて、代名詞に動詞に助動詞に接頭辭に接尾辭に相關聯して總合的に使用されてゐる。一知半解の徒が外國の文に比し敬語の多きを誇るが如きは國語の眞體を知らないものである。

動詞の相に於ても外國文法とは自ら異なるものがある。他に倣ひて目的の有無によりて自動他動を分けるが如きは國語には恰當しない。その別は外國語に於けるが如き絶對のものでない。むしろ希臘文法にミッドル、ヴォイスを立てゝあると同じく、能相と所相との中間相を立てるのが宜しい。外國文に於ける如き何でも受身になすやうな表現は國文法にはゆるされない。文の構造に關しては今後大に研

究せねばならぬものがある。また口語法と文語法の關係をいかに調節すべきかも重要な問題である。

文法の新研究の續々と起つて來るのは至極結構な事であるが、一般に弘通するやうにならなくて、互に異を張るのを以て能事としてゐるのは取らざるところである。今や我邦は非常時に際してゐると云はれてゐる。今後東洋の盟主として東方文化の指導者として立つ上からは、國民が一層國語を愛しこれを大陸各地に植ゑ付けなくてはならぬ。文法學者も十分にこれが研究を遂げ學徒をして學習を容易ならしめることを努力しなくてはならぬ。

附 錄

一 假名遣

假名遣といふは假名を以て言語を書きあらはす方法をいふ。假名の出來た時代には發音のまゝに書き綴つたものであるから、假名遣の法規は別に問題にならなかつたが、言語は時代を経るにつれて漸く變化を來たしたに關らず、文字は固定的となつてゐるので、發音との間にくひちがひを生ずるに至つた。そこでこれを一致させる爲に假名遣法が必要となつて來たのである。

昔の音で變化したものとや新に發生した音をあらはすに新しい文字を制作すれば、假名遣法は一向むづかしいものではないが、舊い文字を全く廢て、新しい文字に取り換へることは舊い文化を有つてゐて傳統を重んずる國家社會に於ては中々容易く行はれない。そこでこれこれの語は發音が違つてゐても、假名は昔のまゝにあらはすといふ風に規定を設ける。この場合に於ける假名遣は餘程むづかしくなつて來るのである。

爰に假名遣に發音によるものと、舊章によるものと、の二つが生じるのである。前者を標音假名遣といひ、後者を史的假名遣といふ。文字の教育の乏しい大衆には標音假名遣が便利であるが、古い文獻を見る人には史的假名遣でないと大に不便を感じる。この不便といふ外に發音は人により地方により變つてゆくから、それに應じるやうに假名を變へてゆくと、統制といふことが出來にくくなる虞がある。そこで今では保守説が勝を制してゐるのである。

海外に於ても獨逸では標音的に改正する運動がその宜しきを得た爲に功を奏し、今日綴字が極めて容易であるが、英米などには史的によるより仕方がない狀況である。米國にはこれに一時指を染めて見た人があつたが物にならなかつた。國民が大勇猛心を起し、天下の碩學が協同し、最善の方法を考へ、凡そどれだけの期間の間は上下皆これを遵奉するといふ風に導けば、いづれの國語に於ても不可能事ではないのであるが、一部では舊きを守り一部では新しきに據るといふ如く區々であつてはならぬ。今根本問題に觸れることは避けることとする。

我が國の史的假名遣には二流あつた。その一つは定家卿假名遣と呼ばれるもので、これは鎌倉時代から徳川時代にかけて行はれたもので、皇室を始め公卿などの間

には維新前まではひろく行はれた。古い短冊や懷紙や古寫本などを見ると

榮　さかふ

祝　いはる

薰る　かほる

押　をし

遂に　つゐに

猶　なを

のやうな假名遣を見るのは定家流の假名遣である。これも中古の物語などに據られたと見えるが、古典には合はないものが多く、特にあ行のおとわ行のをとの區別の如きは語勢に據つたらしく、親の字は一字のときはおやと書くが、親子の場合にはをやこと書いてある。

今一つの流は圓珠庵契冲によりて唱道された尙古的假名遣で、契冲は古典研究に心を盡し、古學を開いた人で、元祿中に和字正濫抄を著し、原據を古典に求め、定家の假名遣を排斥した。後輯取魚彦等が出てその研究を繼述し、尙古的假名遣は民間の學者に用ゐられ、明治の御代に至りては、上下共にこの假名遣に一定された。

この假名遣の中にも漢字音の假名遣と國語假名遣と二つに分かれる。國語假名遣は國訓を主とし、夙く國音化された漢字音の假名遣をも多少は含めて云ふ。

字音假名遣はもとは支那の音を傳へたものであらうが、彼國の音とは大分異つてゐる。而して今日は一つに字音と唱へてゐる中にも漢音吳音の別がある。吾人が

今日同じやうに發音する音にもさまざまの別がある。例へば^不と發音する中にも

交際の交はかう。

公用の公はこう。

甲乙の甲はかふ。

永劫の劫はこふ。

光明の光はくわう。

のやうに差異があつて、一々記憶するのは困難である。他の多でも^不でも同様である。漢字を用ゐる以上、振假名などには一々古のやうに書分ける煩を避けて、現今發音するやうにしたらば便利だと多くの人は考へてゐるが、假名遣改正案の頓挫でこれも昔のまゝに據ることとなつてゐる。随つてこれらの假名遣を知るには本居宣長の字音假字用格やそれを訂正した書などによりて學習する。尤もむづかしい字音でも學習の方法はある。例へば公の如く吳音でくと呼ぶものは漢音はこうと書くとか、甲の如く一方で甲胃の場合に於けるやうにかつと入聲に呼ぶものは一方ではかふと書くとか、交の字をもつてゐる咬咬絞絞郊の類はかうと書くといふやうな便法はないではない。また字音で古く地名になつてゐるものには、

信濃

しなの

因幡

いなば

難波

なには

信夫

しのぶ

讃岐

さぬき

平群

へぐり

愛甲 あいかは 安宅 あたか

當麻 たいま

の如く音が轉じてゐるのが少くない。これらも一々理論上から考察することが出来る。

國語の假名も名詞はなるべく漢字を用ゐ、動詞はなるべく假名を用ゐるとせば、その勞を省くことが少くない。動詞は活用により、また少い方を覚えおきて他は多い方を推定する法などを用ゐる。また記憶すべき方を五七又は七五調の韻文などに仕立て、諷詠するとか、或は語原を考へてこれを分ける法なども古人によりて種々に試みられた。

中に紛れ易きは動詞の章に述べたやうに、あやわはの四行で、語頭に紛れるのはいえお、ゐゑをの六つで、語の中下にて紛れるのはいひゐゑ、ほを、はわ、ゆふうの十三で、この他に濁音のぢじづの四つがある。

今動詞に就て云へば、入るは居ると異なつてゐる。引き入ると牽ひきゐると混じてはならぬ。織おると折をるとも別であつて、絶えずと堪へずとを間違へてはならぬ。理非を分ける方はことわるで、謝絶の方はことほる、食をすと押おすとも假名を異にする。與はあたふ、厭いとはいとふでこれも紛れ易い。

名詞に於ても葛はくず、屑はくづである。氏はうち、蛆はうじ、小路はこうぢ、麴はかうぢ、藪柑子はやぶかうじで、望月はもちづき、餅好はもちずきであつて誤り易い。漢字にたよつてゐるものはこれらの假名に無頓着になり易いが、正しい使用を知らぬときは大きな誤を生ずる。

動詞形容詞の語尾は活用によりて區別すべきことは既に第一篇第三第四章に述べた。

一般的に注意すべきは、複合した語は單獨の形に準據することである。例へばわの假名遣に就ていへば

輪、業、綿、分、蔵は皆わの假名であるから、

曲輪、埴輪、仕業、眞綿、腸、小分、野分、早蔵等に皆わを用ゐるべく、はを用ゐてはならぬ。

他に於てもこれと同様である。

次に音便によりいに呼ばれるものも、うに呼ばれるものもさう改めて書くべく、これをひやふと書いてはならぬ。悲しひかな。久しふして。完ふすの如きは皆誤である。これは悲しきのきの父音が落ちていとなり、久しくして、完くすのくの父音が落ちてうとなつたものであるからその通りに書くべきである。従うて、纜を解いて

の類を従ふて、解ひてと書くも誤である。解いては解きてのきの父音が落ち、母韻のみが残つたものであるからひと書く理由はない。咲きて書いて掃きて、蒔きての類を咲いて、書いて、蒔いて、掃いてと口語に呼ぶのは皆同様である。名詞に於ても埼玉縣、衝立の如きはさき、つきのさい、ついとなつたもので、透垣をすいがい、髪搔をかうがい、朔をついたち、序をついでと書くべきもこれに準ずるのである。従うての類は従はん従ひ従ふ従へとは行に働く動詞であるから、従ふてを正しと思惟し易いが、長呼音にかはつたのであるからうと書くのである。枕を高くしてを枕を高うしてと長呼音に呼ぶと同一様に扱ふ點から、さうして統一させるのである。

動詞の語尾のびみにに助詞ての結合する場合にはその語尾は撥音となり、てはでと轉じ、喜びては喜んで、悲しみては悲んでとなるのを喜むで悲しむでと書いてはならぬ。これらは撥音便となつてゐるからである。

またふといふ語尾を有する動詞の中にはあ列の音に連るものとお列の音に連るものとが紛れ易い場合がある。

まがふ(紛)とのごふ(拭)、さゝふ(支)とさそふ(誘)

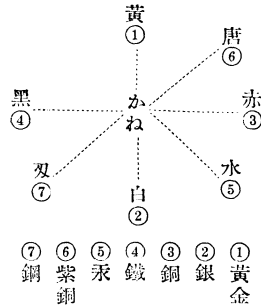
こたふ(答)といとふ厭、やしなふ(養)ととゝのふ(調)

いはふ(祝)ときほふ(競)、かまふ(構)とおもふ(思)

もやふ(艤)とかよふ(通)、ねぎらふ(勞)とうつろふ(移)

の如きはそれであるが、この類は活用させてその正否を擇ふべきである。

次に言語は一つの基本になる語があつて、それに他の語を加へて一單語となつたもの少くない。例へばかねに種々の種類がある。それを區別する爲に他語を加へ



て黄金白銀等を生じたことが上圖に於けるやうである。斯の如き言語の構造から假名遣を察知すべき道もある。例へばゐの假名に於て居を基本として成立してゐる語は同一の法で違のないやうにすべきである。鳥居鴨居、敷居芝居、圍居居合術などはいづれも居の字を用ゐてゐるから紛れはない。尙基(本居、

位(座位)、宿直(殿居)等もわ行のゐを用ゐるべきである。また井みどを基本とし成立した

井筒、井堰、井守、堰、田舎

など皆ゐを用ゐるべきである。斯ういつたやうにをに就ても男や雄や尾や緒や小

の假名はをであつて、これらを基本とし夫、益良雄、風流男、薩男の類から尾花、尾上、塔尾、陵、玉の緒、緒環、緘、下緒、小野、小川、叔父、弟などの假名は基本のものに準じて知ること

一つの法である。中には文部省の疑問假名遣に見えてゐるやうな何れとも決しかねるものもあるが、大體その正しきものを記憶して思想發表に誤のないやうに努むべきである。

二 送假名法

國語を書きあらはすには漢字と假名とを交へて記するのが一般の慣例であるが、漢字は語尾の變化もなく、書き下すときは詞の所屬も不明で紛れ易いから、それを防ぐ爲に送假名を附する。送假名は便宜を基とするもので、決して一々動かすことの出來ないものではないが、その大綱は一般に通用するものでなくてはならぬ。

一、名詞は送假名を附けない。動詞形容詞は語尾の變化する部分より送るのを原則とする。

一、一の動詞から他の動詞または形容詞に轉じたものは本の活用の語尾より送る。

治む―治まる。 驚く―驚かす。

喜ぶ―喜ばし。 懷く―懷かし。

但し慣用により本の語尾を送らないでも明かなものは便宜上除外例を定め

て差支はない。

一、形容詞から動詞に轉するものはくしき活用は語幹に動詞となる語尾を送り、しくしき活用はしの語尾より送る。けくけきけしの活用はけの音より送る。

高——高む。 早——早む。 善——善かり。

樂——樂しむ。 苦——苦しむ。 惡——惡しかり。

長閑けし——長閑けかり。

一、複合の動詞形容詞は一つ一つ送假名を附す。

流れ出づ。 流し去る。 知り難し。 知れがたし。

(注意)書簡文には申し上げ候ふの如きも送らずに申上候と書く。奉存候を書下しにするときは存じ奉り候と書いて宜しい。

一、附加辭の添ひて成る動詞形容詞は附加辭を送る。

春めく。 鄙ぶ。 黄ばむ。 赤らむ。

嗚呼がまし。 厚かまし。 男らし。

一、動詞のきちにひびみりの語尾にての助詞の加りて、音便となりたるものは、いうつんの音より送る。

書いて。 習うて。 立つて。 坐つて。 喜んで。

二、複合した動詞中、慣用も久しく且間違ふ恐のないものは、差出す、受取る、賣捌く、取扱ふの如く、上位の動詞の語尾を送らぬ便法に従ふ。

三、助動詞はすべて假名書きとすべく、随つてその活用連語も送假名の必要はない。但し書簡文に限り可の一字は漢字を用ゐ、書き下すときはその語尾を送る。

一、名詞は送假名を附せないのを原則とするが、一字で種々に讀まれる場合には混雜を防ぐ爲に、一音を送ることがある。特に動詞の連用形が名詞に轉じた場合にはさうである。

(い) 音と訓とで義のかはる場合には訓の末尾の一音を送つて區別する。
運が悪い。 運びが悪い。

(ろ) 一字に兩訓があつて、讀み方の紛れ易い場合には、一方に一音を附して區別する。
後を戒む。 敵に後ろを見せるな。

(は) 動詞の連用形から成つた名詞で紛れ易い兩訓があるときは一方に一音を送る。
場合によりては兩方に送るも妨ない。

渡を守る。 渡りをつける。

流が異なる。　流れを渡る。　流しを奇麗にする。

(二)動詞形容詞から成る準名詞は語尾の一音を送る。

言ふは易く、行ふは難し。

長きを斷ち短きを補ふ。

(三)形容詞の語幹がそのまゝ名詞となるものは假名を送らないが、附加辭を挨ちて名詞となつたものは附加辭を送る。

高さ、厚み、

清ら、樂しさ、

懷かしみ、嬉しげ。

(四)漢字をさ行三段に活用させた動詞から名詞に轉じたものは語尾のしまたじの音を送る。

達しがあつた。　察しがない。　通じがある。

(五)複合名詞の中、音讀と訓讀によりて意義を異にする場合には、音の方はそのままとし訓の方に假名を送る。

讀書を好む。　讀み書きが上手だ。

立食が終る。　立ち食ひを戒む。

(ち)訓から成る複合名詞の中紛れ易いものはいづれか一方に送る。

引出、引き出し。　預け主、預り物。　入り口、入れ物。

(リ)音と訓と相雜る複合語中、讀み誤らない爲に、假名を送る代りに縦線を應用し、訓の方ならば字の左旁に少しく上げて、音の方ならば字の右旁に單線を加へて區別することも差支がない。

稽古始。　三盆白。　綿入り(めんいり)

一代名詞は一般に送らないのを原則とする。

但し次の如きは一字を送る。

此の、其の、彼の、何れ、誰れ、

一、數詞は送らないのを原則とする。唯一つ二つの如く箇數を示す時は加へる。但し萬^{よろづ}だけは省きても宜しい、

一、副詞は二音から成る漢字には假名を送らない。

但し若し、縱し、先づ等は例外とし、一字を送る。

動詞に助詞で(又音便のんに連るときはで)の添ひて副詞となつてゐるものは語尾

の變化より送る。

極めて、總じて、決して、兼ねて、忍んで、

動詞形容詞より成る副詞は語尾を送る。

譬ひ、委しく、克く、

動詞の連體形に助詞にの添へるものや、條件形に助詞ばの添へるものは語尾より送る。

案ずるに、顧ふに、譬へば、

三音以上から成る副詞は末の一音を送る。

蓋し、但し、併し、寧ろ、嘗て、争で、未だ、將に、當に、終に、半ば、

即ち、甚だ、頗る、殆ど、忽ち、聊か、必ず、或は、最も、

漢字中に含まない部分はすべて送る。

平かに、花やかに、高らかに、甘らに、故さらに、聊かも、争でか、

必ずしも、直ちに、特に、颯と、蕭々と、

但し速にの類はやかを送らず。

漢字ばかりの副詞で送假名を附けないものは次の數語とする。

假令、大凡、大概、流石、加之、

同音を重疊する漢字は假名を送らないで、その右下に(ゝ)符を置く。

抑ゝ 愈ゝ 益ゝ 屢ゝ 兼ゝ 偶ゝ 旁ゝ 交ゝ 略ゝ

三 句讀法

句讀法は文の混雜を防ぐ爲に記號を用ゐて諸部の關係を明かならしめることを指す。これに文法上の關係によるものと、朗詠諷詠の爲にするものとの別がある。

韻文に於ては文義の斷續だけを主としないで、五七とか七五などの調べに基づき調の終に點をさし、朗讀體のものには讀み切りの都合上から、多少文法上の關係を斟酌して、一息の讀くのを限度として點をさす習ひである。

これらの符には

。 白圈

● 黒圈

、 白點

、 黒點

「」 單勾

『』 複勾

（ ） 小括弧

〔 〕 大括弧

— 單縱線

|| 複縱線

= 節

┌ 小段落

└ 大段落

等が用ゐられる。中に白圈は文の終止したところの右旁下に置く。世にはこれを句點と呼んでゐるが、終止符と呼びたい。一派の人々は終止符として黒圈を用ゐるものもあるが、白圈一つに限ることゝするのが統一上便利である。名詞などの幾つも連續して重出するとき、語と語との間に黒圈を挿んで、詞の紛れないやうにする。例へば

軍記類には保元・平治・平家・太平記等がある。

に於けるやうである。世にはこれを小讀點と呼んでゐるものもある。區分符又は區分點と名づけたい。

白點・黒點の中、白點は手數がかかるので漸次用ゐるものが少く、黒點の方は廣く使用されてゐる。世にはこれを讀點と呼んでゐる。終止以外の切れ目に廣く用ゐられる。重文(一)連文の中止形(二)及合文の條件節の末に(三)右旁に下げて置く。

蘆の湖は駒が嶽の南腹に位し、(一)逆さ不二を以て聞ゆ。

朝の風一しほつめたく、(二) 空には雲の往來あわたしく、(三) 霞もやがて降り來べし。

鏡に對へば、(三) おの姿は映る。心平正なるときは、(三) 姿もおだやかにあらはる。おのれ心づかずとも、(三) 無心の鏡は隠すところなし。

以上は極めて大綱を擧げたに過ぎないが、場合によりては細目を立てる要がある。文の形は終止してゐても意義の續いてゐる場合にはこれを如何にするか。例へば「西行の歌は自然を見つめてゐる人生を弔つてゐる後世を諭してゐる」

の文に於て、見つめてゐる及弔つてゐるの下に終止符を施さないで、區分符を置いた方が表現にびつたりとするが如き、また「あなゆゝしさるものなし」の如き文に於てもゆゝしの下に終止符を附けないで區分符にする方が一般に多い。主語述語が各單語から成つてゐてあまりに小さい形の文に於ても同じやうに終止符を施すは實用上如何にといふ問題も生ずる。連文の中止法を用ゐた下には區分點を施す規定としても、「天は高く地は低し」の如き短い文には略しても妨がないとするかといふ場合もある。また合文の條件節の終には區分點をさすのを一般の原則としてゐても、判定が僅々一二語から成つてゐるときは

今は手をつくしてもいけません。

の如く區分符を加へないこともある。また引用文には句を施すから意味の切れてととてなどといふ助詞にうつるところには終止符を略するも常である。例へば

「これは翁丸か」と見せ給ふ。

「右近ぞ見知りたる。呼べ」とて云々。

などに於けるやうである。尤も正式に云へば附けるのが正しいが、勾を附するので略するのである。また語句を倒置した文に於ては、

曉に見る、千兵の大牙を擁するを。

の如きは對象部の終に終止符を加へ、述語の見るの下には却つて區分點を置く。

「知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る」

の如きも述語の知らずの下には區分點を、去るの下に終止符を施すべきである。

主語總主語提示語が多く、の修飾語を具してゐる時、或はそれらがまた格を示す助詞を具へないで他と紛れ易いときは區分點を施す。例へば

かやうに候者は、都のものにて候。

太郎を田舎に送つたのは、もつとあの子を強くしたい考からであつた。

梢を離るゝ秋の空、何ぞ超越の氣象饒かなる。

に於けるやうに。尤も格を示す助詞を具してゐなくてもこれに對する述語が簡單である場合には區分點を加へないことが常である。

たとへば、婦人の操高く、心すゞしく、歸依慈愛の性深きに似たり。

に於けるが如し。また主語でも對象語でも並出するときは一つ一つに區分點を加へて混同しないやうにする。これは同格語でも同じく、

山の阿、水の涯、到るところ寸翳の目を遮るものなく、によつぱりと浮び出でたる山、美しうくねりゆく川、すべてこれ晶明、すべてこれ澄徹。

遮那王は清和天皇より十代の御苗裔、六孫王より八代、多田滿仲が末葉、伊豫入道頼義の子、八幡太郎義家が孫、六條判官爲義が嫡男、前左馬頭義朝が末子にて候ひけり。

に於けるやうである。

修飾語が幾つか重りて一つの名詞にかゝるときは、名詞に接してゐる語を除き、その他の修飾語の右旁に區分點を附ける。例へば

淨き、赤き心をもちて。

玉敷の都の中に棟を並べ、薨を爭へる、尊き卑しき人の住居は世々を経てつきせぬものなれど云々

後の世の平らけく、安く、全くあるべき政。
に於けるがやうである。

幾つかの述語が重出する場合に、その一つ一つが別の意義をあらはすときは、その間に區分點を加へる。

狂れ迷へる、頑なる奴の心をば慈み、悟し、正し賜ふべきものなり。

大臣の家の内の子どもをもはふり賜はず、失ひ賜はず、慈み賜はむ、起し賜はむ、溫ね賜はむ、かへりみ賜はむ。

に於ける如く加へるのである。

尙區分點の使用は細かく施す人と大略に止める人とがあつて容易に統一しがた
い。大體よりいへば口語文には細かに切らないで、一續きに長くし、文語に於てはこ
れと反對に小刻みに施す傾向がある。韻文に於ては、

磯間よりそがひに見ゆる、駿河の海おきつ波路は、
せばきかもふりさけ見れば、さがみねの八重山嶺は、

低きかも。

の如く、或は

落花の雪に踏みまよふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦きてかへる、嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも、旅宿となればものうきに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行末も知らず思ひおき、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。

の如く五七、または七五調にひかれて文意の切れない所にこの符を置くことがある。また往年外山博士の朗讀された散文詩旅順の英雄可兒大尉に於ては

開闢以來未だ嘗て、今日の如く國光の輝けるはなし。

開闢以來未だ嘗て今日の如く、我邦人の名譽の大なるはなし。

良運なり幸運なり、此の時期に遭遇せる日本人は。

の如く句切りをされた。これは朗讀上の便に據られたものである。

以上の如く音調を旨とするものと、文の構成上の關係を明かにするものと同じ點符を用ゐて分けようとするのは、いよいよ混亂を増すものである。されば韻文には終止符は散文と同様とするも、調の切れ目にさす點は散文に於ける區分點を廢し、白

點(・)を以て分けることにしたならば、相互の爲に都合が善からうと信ずる。

單勾かぎと複勾とは引用文の首尾をかこむに用ゐる。さうして一般の引用には單勾を用ゐ、引用中の引用には複勾を用ゐることゝするが便と思はれる。例へば、

彈正ちつとも騒がず、長政等が如きは、何百人が首刎ねられんにも、なん條事が候べき云々。されば昔の御心ならんには、かほどの事などか御心づきなかるべき。かゝる御心の附かせ給ふことこれたゞ事にあらず、一定ふる狐の入りかはつたるには候はずや。賤しき者の諺に、『人とりむとする鼈は必ず人に取らるゝ』とはこの御事にて候ぞ』と憚る所なく申しけり。

に於けるがやうに。

括弧は註文などを挿入するとき、本文と區分する爲にその全部をつゝむに用ゐる。その事項の少きときは小括弧を用ゐ、複雑なときは大括弧を用ゐる。

縦線 固有名詞特に外國の地名、人名を假名書きするときの右旁或は左旁にこれを施す。線の代りに單勾を用ゐることもある。或は助動詞助詞などが他に混じ易い時はこれを右旁に施して注意を喚起するにも用ゐる。

船はボスボラスの海峡を過ぐ。

「バーナード・ショー」は英國に於ける現代の小説作家としての大家なり。

ゾモコンモ係助詞ナリ。

に於けるが如くである。

節の符は幾つも連つてゐる文を事項の種類表現の様式等により纏まつてゐる部分々々を小分けするに用ゐる。これに黒の太き横線を用ゐるものと横線の中を白くしたのと兩方がある。いづれでも同じやうに用ゐる。段落は節より大きな區劃に用ゐる。段落の大小は今同様に用ゐて區別しないものもある。節及段落を附けた例を示せば次のやうである。

春は曙。やうやう白くなりゆく山際すこしあがりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる一夏は夜。月の頃は更なり。闇も螢とびちがひたる、雨などの降るさへをかし。」

子路ハ人コレニ告グルニ過アルヲ以テセバ喜ブ。禹ハ善言ヲ聞ケバ拜ス。一犬舜ハコレヨリ大ナルモノアリ。善ヲ人ト同ジクス。己ヲ舍テ、人ニ取リテ以テ善ヲ爲スヲ樂シム。耕稼陶漁ヨリ以テ帝トナルニ至ルマデ、人ニ取ルニ非ルモノナシ。一諸レヲ人ニ取リテ以テ善ヲ爲ス。是レ人ト善ヲ爲スモノナリ。故

ニ君子ハ人ト善ヲ爲スヨリ大ナルハナシ。』

文の主要なる語又は評語には黒圈・白圈・黒點・白點・二重圈・點◎を字の右旁に加へることもある。中に白點及二重圈は今日は用ゐるものが少くなつた。

四 練習問題

(二) 天照大神、手に寶の鏡を持たして、天の忍穗耳の尊に授けてほぎ給はく、「吾がみこの寶の鏡を視まさむこと、猶吾を視るが如くすべし。與に床を同じくし、殿を共にして、齋の鏡と爲すべし。」と宣り給ひき。(日本書紀)

○有屬文。引用文は對象部をなす。尙細部につき説明を試みよ。

(三) 綿津見の大神をしへまつりけらく、(中略)若しそれ然爲たまふ事を恨みて攻めなば、鹽盈珠を出して溺らし、若しそれ愁ひ請さば、鹽乾珠を出して活し、斯くたしなめ給へとまをして鹽盈珠、鹽乾珠併せて兩箇を授けまつる。(古事記)

○有屬文。引用文が前文と異なる點を説け。

(三) 古老の曰ひけらく、昔祖神の尊諸の神たちの處に巡りいでまししに、駿河の國の福慈の岳に到まして、卒に日暮に遇ひやどらむとまをしたまひき。(常陸風土記)

○有屬文。引用文の成立を細叙せよ。

(四) 悔しかも惜しかも。けふよりは大臣の奏し、政は聞しめさずやならむ。あすよりは大臣の仕へ奉りし儀はみそなはさずやならむ。(中略)歳時積りゆくまにまにさぶしき事のみし彌よまさるべきかも。(續紀、宣命)

○文の種類と節段とを分ちて説明せよ。

(五) ある時は糧つきて草の根を食物としき。ある時には海の貝を取りて命をつなぐ。旅の空に助くべき人もなきところにいろ／＼の病をして行方すらも覺えず、船のゆくに任せて、海に漂ひて五百日といふ辰の刻ばかりに海の中に遙かに山見ゆ。(竹取物語)

○連文の構造と有屬文の修飾部を説明せよ。

(六) 或人あがたの四とせ五とせ果て、例の事ども皆し終へて、解由など取りて住む館より出でて、舟に乗るべき所へわたる。かれこれ知る知らぬ送りす。(土佐日記)

○文の成分を述べよ。

(七) 木々の木の葉まだ繁うはなうて、若やかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空のけしきの何となくそゞろにをかしきに、少し曇りたる夕つ方夜など忍びたる時鳥の

遠うそら耳かと覺ゆるまで聞きつけたらむ、何ごゝちかはせむ。(枕草子)

○幾つかの單文に分ち各文の關係を述べよ。

(八) あてなるもの。削氷のあまづらに入りて新しき金椀に入りたる。水晶の數珠。藤の花。梅の花に雪のふりかゝりたる、甚じう美しきちごのいちご食ひたる。

○文の段節を切り各部の構造を說け。

(九) 繪にかける楊貴妃のかたちはいみじき繪師といへども筆かぎりあれば、いと匂なし。大掖の芙蓉未央の柳も、げに通ひたりしかたちをからめいたる粧はうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思ひいづるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに羽をならべ枝をかさはさむと契らせ給ひしに、かなはざりける命の程ぞつきせずうらめしき。(源氏物語)

○係結を說き、修飾語に簽をつけよ。

(一〇) 人々物語し給ひて、昔恐ろしかりける事どもなどに申しなり給へるに、今宵こそいとむつかしげなる夜なんめれ。かく人がちなるだにけしき覺ゆ。まして物離れたる所などいかならむ。さあらむ所にひとりいなむやと仰せられけるにえ罷らじとのみ申し給ひける。(大鏡)

○引用文を區分し、且文中の助動詞助詞を説明せよ。

(二)むかし壁の中より求め出でたりけん書の名をば、今の世の人の子は夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな^{ミづく}きの岡の葛葉かへす^くも書きおく跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。」(いざよひ日記)

○施線の部の文法的説明をなし、且文中の助詞及接尾辭を説明せよ。

(二)三その處のさまをいは^ゝ南に筧あり岩をたゝみて水をためたり林軒近ければつま木を拾ふに乏しからず名を外山といふまさきのかづらあとを埋めり谷しげけれど西は晴れたり觀念のたよりなきにしもあらず春は藤波を見る紫雲の如くして西の方ににはふ夏は時鳥を聞く語らふごとに死出の山路をちぎる秋はひくらしの聲耳に滿てりうつせみの世を悲しむかと聞ゆ冬は雪をあはれむつもり消ゆるさま罪障にたとへつべし。(方丈記)

○符點をさし、動詞助動詞の活用を説け

(二)三嫡子中務少輔、重盛生年十九歳赤地の錦の直垂に澤潟緘の鎧に白星の兜を着、二十四差したる中黒の矢負ひ、二所藤の弓持つて黄河原毛なる馬に乗り進み出でて、勅命を蒙つて罷り向ひたる者が敵陣こはしとて引き返す様やあるべき、續けやわ

か者共とて駈け出でられけるを、清盛これを見てあるべうもなし。あれ制せよ、者ども。爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし。過すなと宣ふ。(保元物語)

○陳述體の文を指摘し、且修飾語を區分せよ。

(二四) あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ならばいかに物のあはれもなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。(徒然草)

○文の構成を説け。

(二五) 多くのたくみの心をつくして磨き立て、唐の大和のめづらしくえならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心のまゝならず作りなせるは見る眼も苦しくいとわびし。(徒然草)

○修飾部を説明せよ。

(二六) 凡政道といふことは正直慈悲を本として決斷の力あるべきなり。これ天照大神の明かなる教なり。決斷といふにとりて數多の道あり。一にはその人を選びて官に任ず、官にその人あるときは君は垂拱してまします。されば本朝にも異朝にもこれを治世の本とす。二には國郡を私にせず、分つ所必ずその理のまゝにす。三には功あるを賞し、罪あるをば必ず罰す。これ善を勧め惡を懲す道なり。これ

に一つもたがふを亂政とはいへり。(神皇正統記)

○文の段落を切り、指詞、副詞、接續詞を抜きてその用法を述べよ。

(二七)正成は聖德太子の御墓の前を軍のそのにして出であひかけひき寄せつ返しつ、潮のみちひく如くにて、年はたゞ暮れに暮れはてぬれば、春になりて事どもあるべしなどいひしろふもいとむづかしく、心ゆるびなき世のありさまなり。(増鏡)

○述語の用法及修飾部に就きて説明せよ。

(二八)いかにこれなる人に尋ね申すべき事の候。こなたの事にて候か、何事にて候ぞ。見申せば美しき玉帚を持ち木陰を清め給ひ候はもし花守にて御入り候か。さん候。いつも花の頃は木陰を清め候ほどに花守とや申さん、又宮つことや申すべき。いづれに由ある者と御覽候へ。げに――由ありげに見え候。まづ――當寺の御來歴委しく語り給ふべし。(謡曲、田村)

○施線の部の用法につきて文法上の説明を加へよ。

(二九)在所の衆が養ひで、やう／＼馬を追ひ習ひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする。これ守袋を見さしやんせ、何の嘘を申しませう。御前の子にまぎれはない。外に望みは何にもない。父様を尋ね出し、一日なりとも三人一所にゐて下され。

みごと杳も打ちます。このわらんじも私が作つた。晝は馬を追うて夜は杳打ちわらんじ作り。父様母様養ひませう。父様と一つにゐて下され。拜みまする母様。(近松作、丹波興作)

○文の種類を分ち対象部を摘出して説明せよ。

(三〇)抑々事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖を恥ぢず。東南より海を入れて江の中三里浙江の湖を湛ふ。島々の數を盡して敬つものは天を指し伏するものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり三重にたゝみて、左にわかれ右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。(奥の細道)

○文中の動詞・助動詞・助辭を説明せよ。

昭和八年五月二十一日印刷
昭和八年五月二十五日發行

定價 金貳圓

著者 福井久藏

發行者 倉田八
東京市牛込區白銀町二十九番地

印刷者 西川喜右衛門
東京市神田區小川町二丁目十二番地

新高國文典

發行所 東京市牛込區白銀町二十九番地 育英書院

發賣所 東京市神田區駿河臺三丁目 目黑書店
振替口座東京二八〇九番

印刷



九番地

十



THE UNIVERSITY OF CHINA PRESS

